

京都府遺跡調査報告集

第163冊

一般国道24号線金尾交差点改良事業関係遺跡

下水主遺跡第2・3次

水主神社東遺跡第3・4次

2015

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版 1 一般国道 24 号金尾交差点改良事業関係遺跡

下水主遺跡・水主神社東遺跡



調査地全景(上が北、合成写真)

下水主遺跡



(1) A北地区全景(南東から)



(2) A地区全景(南から)

下水主遺跡



(1) B 地区全景(北から)



(2) C 地区全景(南から)

水主神社東遺跡



(1) D 地区全景 (北東から)



(2) E 地区全景 (北から)

序

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年4月に設立されて以来、34年間にわたり、府内各地で公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行っています。平成26年度も府内12か所で発掘調査を実施してまいりました。業務の遂行にあたり、皆様方より賜りましたご理解とご協力に厚く感謝申し上げます。

本書は『京都府遺跡調査報告集』として、平成24・25年度に西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した下水主遺跡・水主神社東遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書が、地域の埋蔵文化財への理解と関心を深めるうえで、多くの方々にご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された西日本高速道路株式会社をはじめ、京都府教育委員会、城陽市教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成27年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

例 言

1. 本書に収めた報告は下記のとおりである。

一般国道24号金尾交差点改良事業関係遺跡平成24・25年度発掘調査報告

下水主遺跡第2・3次

水主神社東遺跡第3・4次

2. 遺跡の所在地、現地調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	現地調査期間	経費負担者	執筆者
下水主遺跡第2・3次	京都府城陽市寺田今橋	平成24年9月24日～ 平成25年3月8日 平成25年4月26日～ 9月3日	西日本高速道路株式会社関西支社新 名神京都事務所	増田孝彦 岡崎研一 黒坪一樹 引原茂治 酒井健治
水主神社東遺跡第3・4次	京都府城陽市寺田金尾	平成24年9月24日～ 平成25年3月8日 平成25年4月26日～ 9月3日		

3. 上記2遺跡とも平成26年度に本部事務所(向日市寺戸町)で整理・報告作業を実施した。作業については、調査担当者の指示のもと調査課企画調整係が協力して実施した。

4. 本書で使用している座標は、別途記載がない限り世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。

5. 土層断面等の土色や出土遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。

6. 本書の編集は、調査担当者の編集原案をもとに、調査課企画調整係が行った。

7. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は調査課企画調整係主査田中彰が行った。

本文目次

一般国道24号金尾交差点改良関係遺跡平成24・25年度発掘調査報告	1
-----------------------------------	---

挿図目次

第1図 調査地及び周辺遺跡分布図	4
第2図 調査地地区割り図	7
第3図 条里型地割り復原図	8
第4図 A・B地区遺構配置図	9
第5図 A地区南壁断面図	10
第6図 A地区平面図	11
第7図 B地区東壁断面図(1)	13
第8図 B地区東壁断面図(2)	14
第9図 B地区平面図	15
第10図 B地区溝SD103実測図	16
第11図 B地区溝SD106・109実測図	17
第12図 B地区土坑SX102・107、SK105・108実測図	18
第13図 B地区土坑SX104実測図	19
第14図 B地区縄文土器出土状況図	20
第15図 B・C・D地区遺構配置図	21
第16図 C地区南壁断面図	23
第17図 C地区東壁断面図(1)	24
第18図 C地区東壁断面図(2)	25
第19図 C地区平面図	27
第20図 C地区溝SD207～209土層断面図	28
第21図 D・E地区遺構配置図	30
第22図 E地区南壁断面図	32
第23図 E地区平面図	34
第24図 A・A北地区遺構配置図	35
第25図 A北地区西壁断面図	36
第26図 A北地区平面図	37
第27図 A北地区土坑SK09実測図	38

第28図	D地区遺構配置図	39
第29図	D地区北東壁断面図(1)	40
第30図	D地区北東壁断面図(2)	41
第31図	D地区平面図(1)	44
第32図	D地区平面図(2)	45
第33図	島畑17断面図	46
第34図	D地区島畑18耕作溝他土層断面図	48
第35図	D地区溝S D 331遺物出土状況図	50
第36図	A地区・A北地区出土遺物実測図	53
第37図	B地区出土遺物実測図	54
第38図	C地区出土遺物実測図	55
第39図	D地区出土遺物実測図	57
第40図	E地区出土遺物実測図	58
第41図	島畑の標高一覧	60
第42図	明治20・41年、昭和40年城陽市域地図	61
第43図	掻き上げ田と掘り下げ田	63

付 表 目 次

付表1	島畑規模一覧表	68
付表2	出土土器観察表	68
付表3	出土瓦観察表	72
付表4	出土石製品観察表	72
付表5	出土木製品観察表	72

図 版 目 次

巻頭図版1	調査地全景(上が北、合成写真)
巻頭図版2	(1) A北地区全景(南東から) (2) A地区全景(南から)
巻頭図版3	(1) B地区全景(北から) (2) C地区全景(南から)
巻頭図版4	(1) D地区全景(北東から) (2) E地区全景(北から)

- 図版第 1 (1) A 地区調査前の状況(南西から)
(2) B 地区調査前の状況(南から)
- 図版第 2 (1) C 地区調査前の状況(南西から)
(2) E 地区調査前の状況(東から)
- 図版第 3 (1) A 北地区調査前の状況(北から)
(2) D 地区調査前の状況(北西から)
- 図版第 4 (1) A 地区全景(北から)
(2) A 地区全景(南から)
- 図版第 5 (1) A 地区島畑 1・2 西壁断面(南東から)
(2) A 地区島畑 2 断面(北東から)
- 図版第 6 (1) B 地区島畑 4・5 全景(南から)
(2) B 地区島畑 4 全景(南から)
- 図版第 7 (1) B 地区北西拡張部島畑 6 全景(北東から)
(2) B 地区島畑 5 南拡張部全景(東から)
- 図版第 8 (1) B 地区島畑 4 北側検出遺構(北西から)
(2) B 地区島畑 4 土坑 S K 105(南西から)
(3) B 地区島畑 4 溝 S D 109(南から)
- 図版第 9 (1) B 地区島畑 4 溝 S D 109断面 B - B´(南東から)
(2) B 地区島畑 4 土坑 S X 107(西から)
(3) B 地区島畑 4 南壁断面(北東から)
- 図版第 10 (1) B 地区島畑 4 土坑 S K 102遺物出土状況(西から)
(2) B 地区島畑 4 土坑 S K 102完掘状況(北から)
(3) B 地区島畑 4 縄文土器出土状況(南西から)
- 図版第 11 (1) C 地区全景(北西から)
(2) C 地区全景(北から)
- 図版第 12 (1) C 地区北壁断面(南から)
(2) C 地区南壁断面(北東から)
(3) C 地区島畑 7 溝 S D 207~209断面 F - F´(南から)
- 図版第 13 (1) C 地区島畑 7 溝 S D 207~209断面 G - G´(南から)
(2) C 地区島畑 7 溝 S D 207~209断面 H - H´(南から)
(3) C 地区島畑 7 溝 S D 207~209断面 I - I´(南から)
- 図版第 14 C 地区南壁・北壁断面(合成写真)
- 図版第 15 (1) E 地区全景(東から)
(2) E 地区全景(西から)

- 図版第16 (1) E地区島畑10・11・12全景(北西から)
 (2) E地区島畑10溝 S D406全景(北から)
- 図版第17 E地区南壁断面(合成写真、北から)
- 図版第18 (1) A地区微高地下層断ち割り(東から)
 (2) B地区微高地下層断ち割り(東から)
 (3) E地区微高地下層断ち割り(東から)
- 図版第19 (1) A北地区全景(北から)
 (2) A北地区全景(南から)
- 図版第20 (1) A北地区島畑13近景(南東から)
 (2) A北地区島畑14近景(東から)
- 図版第21 (1) D地区全景(北から)
 (2) D地区全景(上が東)
- 図版第22 (1) D地区全景(北西から)
 (2) D地区全景(南東から)
- 図版第23 (1) D地区島畑8・15・16全景(西から)
 (2) D地区島畑8・15・16全景(東から)
- 図版第24 (1) D地区島畑17全景(北から)
 (2) D地区島畑18溝 S D352全景(南から)
- 図版第25 (1) D地区島畑18全景(北から)
 (2) D地区島畑18全景(南から)
- 図版第26 (1) D地区水田 S N16全景(南から)
 (2) D地区水田 S N16全景(北から)
- 図版第27 (1) D地区島畑17断ち割り(南東から)
 (2) D地区水田 S N16断面(南西から)
 (3) D地区島畑18断面(南から)
- 図版第28 (1) D地区島畑8溝 S D345～347全景(北から)
 (2) D地区島畑15溝 S D342・343全景(東から)
 (3) D地区島畑16溝 S D331全景(西から)
- 図版第29 (1) D地区島畑16溝 S D331近景(西から)
 (2) D地区島畑16溝 S D331遺物出土状況(北から)
 (3) D地区島畑19溝 S D368全景(北から)
- 図版第30 (1) D地区島畑8溝 S D345断面(南から)
 (2) D地区島畑8溝 S D346断面(南から)
 (3) D地区島畑15溝 S D342・343断面(西から)
- 図版第31 (1) D地区島畑16溝 S D331(南東から)

- (2) D地区島畑18溝 S D308・323・324断面(南から)
- (3) D地区島畑18溝 S D351・352断面(南から)
- 図版第32 (1) D地区島畑17柱穴 S P354(南から)
- (2) D地区溝 S D349・353全景(西から)
- (3) D地区溝 S D349・353全景(北から)
- 図版第33 (1) D地区溝 S D335・336・349・353全景(東から)
- (2) D地区溝 S D335・336全景(東から)
- (3) D地区溝 S D336断面(東から)
- 図版第34 (1) D地区溝 S D336断面(西から)
- (2) D地区溝 S D335断面(東から)
- (3) D地区東壁焼土検出状況(¹⁴C分析、西から)
- 図版第35 出土遺物(縄文土器・石器)
- 図版第36 出土遺物(弥生土器・土師器・瓦)
- 図版第37 出土遺物(土師器・須恵器・瓦器・鉄滓)
- 図版第38 出土遺物(弥生土器・土師器・陶磁器)
- 図版第39 (1) A北地区東側の現在の野菜栽培島畑(西から)
- (2) A北地区北東側の現在のイチジク栽培島畑(南東から)
- (3) B地区東側の現在のイチジク栽培島畑(北東から)
- 図版第40 (1) C地区東側の現在の野菜栽培島畑(南から)
- (2) C地区東側の現在の島畑肩部の養生(南東から)
- (3) C地区東側の現在の島畑肩部崩落状況(北東から)

一般国道24号金尾交差点改良事業関係遺跡 平成24・25年度発掘調査報告

1. はじめに

この調査は、一般国道24号金尾交差点改良事業に伴い、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施したものである。一般国道24号は、城陽市内を南北に通じており、京奈和自動車道城陽インターチェンジで直角に曲がり、東西方向に転じている。新名神高速道路は、京奈和自動車道城陽インターチェンジと接続し、東西に建設されることに伴い、同インターチェンジの整備が計画された。それに伴い、一般国道24号金尾交差点の改良事業が計画された。当該事業計画地内には^{しもみずし}下水主遺跡・^{みぬしじんじゃひがし}水主神社東遺跡が所在する。

下水主遺跡・水主神社東遺跡は城陽市の南西部、木津川右岸の沖積地に広範囲に広がる遺跡で、縄文時代～中・近世の土器などの散布地として知られている。これらの遺跡の南側には、式内社の水主神社、水主城跡、西側には現在の水主集落に重なる奈良時代～近世にかけての遺物が散布する水主遺跡がある。また当該地周辺には、水田の中に島畑が分布する特徴的な景観が広がっており、江戸～大正時代には広範囲で綿や果樹栽培などが行われている。寺田地区の国道24号より西側には、現在も寺田イモ、イチジク栽培を行う島畑が多く存在する。また、文化庁の『農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究』（平成15年度）では、「畑地景観」の種別で、城陽市所在の「木津川流域の島畑」が掲げられている。

一般国道24号金尾交差点の改良に伴う道路建設予定地は、一般国道24号が直角に通じているところをショートカットして、北から南東に緩やかに弧を描いている。全長が約530mに及ぶことから、道路予定地に直交する東西方向の里道・市道に挟まれた範囲を一まとまりの地区とし、北から南に順にA～Eの調査区を設定して調査を実施した。A地区については、2年度にわたって2地区にわけて調査を実施したため、2年目に実施したA地区の北半をA北地区とした。A北・A～C地区が下水主遺跡、D・E地区が水主神社東遺跡に該当する。平成24年度はA～C・E地区、平成25年度にはA北・D地区の調査を実施し、各地区で中世に造成されたと考えられる島畑を検出した。また、島畑造成に伴い削平された弥生時代の溝、平安時代の溝、縄文時代晩期の遺物も確認した。

現地的一般公開は、平成25年8月3日(土)に実施し、123名の参加があった。

現地調査ならびに報告書作成にあたっては、京都府教育委員会、城陽市教育委員会をはじめ関係各機関、地元自治会や近隣住民の方々のご指導とご協力をいただいた。記して感謝します。

なお、調査に係る経費は、全額西日本高速道路株式会社関西支社新名神京都事務所が負担した。

(増田孝彦)

〔調査体制等〕

平成24年度調査：下水主遺跡第2次・水主神社東遺跡第3次

現地調査責任者	調査課長	水谷壽克
調査担当者	調査課調査第2係長	岩松 保
	同 次席総括調査員	伊野近富
	同 主任調査員	増田孝彦
	同 専門調査員	石尾政信・岡崎研一
	同 調査員	古川 匠
	同 副主査	辻本和美
	同 調査第1係主任調査員	引原茂治
	同 調査員	牧田梨津子

調査場所 城陽市寺田今橋・金尾

調査期間 平成24年9月24日～平成25年3月8日

調査面積 A地区：630㎡
B地区：2,520㎡
C地区：2,410㎡
E地区：800㎡
A北地区：500㎡（約1.5mの盛土除去）
D地区：2,800㎡（約1mの表土除去）

平成25年度調査：下水主遺跡第3次・水主神社東遺跡第4次

現地調査責任者	調査課長	水谷壽克
調査担当者	調査課調査第2係長	岩松 保
	同 主任調査員	竹原一彦・増田孝彦
	同 専門調査員	黒坪一樹

調査場所 城陽市寺田今橋・金尾

調査期間 平成25年4月26日～9月3日

調査面積 3,300㎡（内A北地区500㎡、D地区2,800㎡）

平成26年度整理作業：下水主遺跡第2・3次・水主神社東遺跡第3・4次

整理作業責任者	調査課長	石井清司
整理作業担当者	調査課課長補佐兼調査第2係長	岩松 保
	同 主査	増田孝彦
	同 副主査	引原茂治

2. 位置と環境

1) 地理的環境

遺跡の所在する城陽市は、近畿地方のほぼ中央部の内陸にあたる。市域の周囲には、宇治市・八幡市・京田辺市・久御山町・井手町・宇治田原町が隣接する。

城陽市は、東部の山地・丘陵と西部の平野とに二分される。東部は鷲峯山山塊に連なる山地で、市域内の最高地点は片原山である。山麓には、大阪層群からなる洪積丘陵や扇状地が位置している。市域の西部には、木津川が形成してきた沖積平野が河川に平行して南北方向に広がっている。

2) 歴史的環境

旧石器時代については、サヌカイト片が芝ヶ原遺跡や森山遺跡で確認されている。

縄文後期後半には森山遺跡が出現する。古墳時代の削平を受けてはいるが、複数の住居跡が規則的に配置されている様子が見える。

弥生時代になると、南山城地域では、木津川沿岸を中心に遺跡が増え始める。前期には木津川左岸、中期になると木津川右岸でも集落が出現し、巨椋池周辺から宇治川流域にも集落が営まれるようになる。後期になると、高地性集落が丘陵上にも出現するようになる。

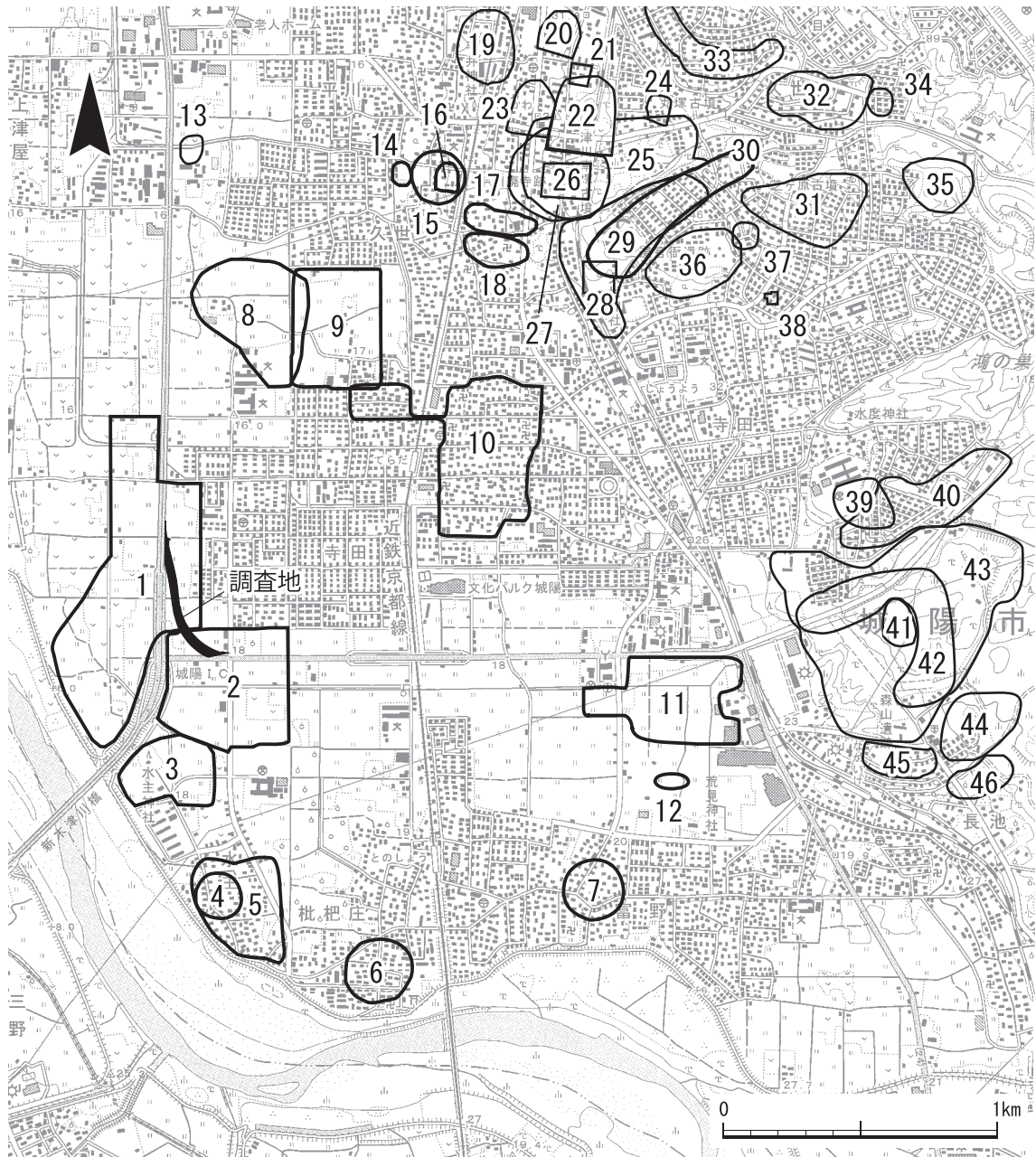
宇治丘陵では、城陽市内で、唯一の弥生時代の集落跡である森山遺跡において、後期の竪穴建物 2 棟と甕棺 1 基が見ついている。甕棺は中期後半、竪穴建物は後期後半と考えられている^(注1)。その他、遺構を伴うものではないが、芝ヶ原遺跡から後期末の土器が、正道遺跡からは時期不明ながら石庖丁が、胃山丘陵周辺から中・後期の土器や石器が見ついている。一方、木津川沿岸の沖積平野においては、塚本遺跡・塚本東遺跡・水主遺跡などで後期末の土器が出土している。

古墳時代になると、南山城地域には、墳丘墓が築かれるようになる。そのほとんどが木津川右岸に沿って南北に走る宇治丘陵上に位置する。

芝ヶ原古墳は丘陵北端部に築かれた前方後方形の墳丘墓である。玉類や鏡、鉄製品、庄内式土器の壺・高杯が出土している。平野部の塚本東遺跡では、庄内期の集落跡が見ついている。北東から南西に流れる溝が検出され、大量の庄内式土器が出土した。また、溝の南側には竪穴建物が検出されており、集落の存在が推定されている。出土した土器は、高杯・器台・甕・鉢・手焙形土器など多種にわたり、丹波・丹後地域の特徴を持つ土器も出土している。南山城地域と丹波・丹後地域の交流を示すものとして注目される^(注2)。

古墳時代前期前半には突如として椿井大塚山古墳、平尾城山古墳が出現する。その後、南山城の各地に前期古墳が出現し、久津川古墳群・大住南塚古墳・大住車塚古墳・飯岡車塚古墳・茶臼山古墳などが次々と築造される。

古墳時代中期になると、南山城地域では、宇治市南部から城陽市北半部にかけての宇治丘陵及び平野部に多くの古墳が集中するようになる。それが久津川古墳群である。同古墳群は、3つの支群（広野支群・久世支群・富野支群）に分かれるが、特に市内の北部に位置する久世支群では、最も多くの古墳が造営され、久津川車塚古墳や芭蕉塚古墳が位置する。久津川車塚古墳では、埋葬施設として竜山石製の長持形石棺が見ついている。副葬品として銅鏡・玉類・石製模造品・



- | | | | |
|------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 下水主遺跡 | 13. 里ノ西遺跡 | 25. 横道遺跡 | 37. 正道廃寺 |
| 2. 水主神社東遺跡 | 14. 里ノ西遺跡 | 26. 平川廃寺 | 38. 尼塚古墳 |
| 3. 水主神社遺跡 | 15. 北垣内遺跡 | 27. 古宮遺跡 | 39. 宮ノ平古墳群 |
| 4. 水主城跡 | 16. 箱塚古墳 | 28. 久世廃寺 | 40. 宮ノ平遺跡 |
| 5. 水主遺跡 | 17. 北垣内古墳 | 29. 芝ヶ原古墳群 | 41. 梅の子塚古墳群 |
| 6. 枇杷庄城跡 | 18. 南垣内古墳群 | 30. 芝ヶ原遺跡 | 42. 芝山古墳群 |
| 7. 外野城跡 | 19. 室木遺跡 | 31. 尼塚古墳群 | 43. 芝山遺跡 |
| 8. 塚本遺跡 | 20. 芭蕉塚古墳 | 32. 上大谷古墳群 | 44. 鷺坂山遺跡 |
| 9. 塚本東遺跡 | 21. 梶塚古墳 | 33. 西山古墳群 | 45. 森山遺跡 |
| 10. 寺田城跡 | 22. 久津川車塚古墳 | 34. 上大谷東古墳群 | 46. 河原遺跡 |
| 11. 小樋尻遺跡 | 23. 寺山古墳 | 35. 大谷古墳群 | |
| 12. 東田部遺跡 | 24. 丸塚古墳 | 36. 正道遺跡 | |

第1図 調査地及び周辺遺跡分布図

刀剣類などが出土しており、遺物年代から 5 世紀前半の築造と考えられる。城陽市北部の大谷川が形成した扇状地では、久津川車塚古墳や芭蕉塚古墳などの前方後円墳や梶塚古墳や青塚古墳などの方墳が築造される。南山城の他地域と比べても規模の面で群を抜いている。これら大古墳の出現は、城陽市北部を中心とした地域に大首長が存在したことを示している。

しかし、芭蕉塚古墳が築造されたのちは巨大な前方後円墳は見られなくなる。6 世紀前半には、各支群ごとに前方後円墳が造られるようになるが、その後は円墳が造られるようになり、規模も縮小化してゆく。6 世紀末には造墓活動を停止することになる。

一方、古墳時代の集落は、前期では森山遺跡、中期には室木遺跡・宇治市一里山遺跡、後期には芝ヶ原遺跡・正道遺跡・芝山遺跡などがある。

文献資料からこの時期の城陽市の歴史をひもといてみよう。南山城地域には、栗隈県が置かれたと考えられている。『日本書紀』仁徳天皇 12 年 10 月条に、「大溝」を「山背栗隈県」に掘るとみえ、『日本書紀』推古天皇 15 (607) 年 是歳条では、「山背国に、大溝を栗隈に掘る」とみえる。栗隈の地は『古事記』に「山代之玖々麻」と記され、後の栗前 (栗隈) 郷にあたる。『山城町史』では宇治市大久保町・広野町付近に想定されている。^(注3)『城陽市史』では、大久保町・広野町に加え、城陽市の上津屋・平川、久御山町の佐古・佐山を含めたより広い地域を想定している。^(注4)この地域には、北方の巨椋池に加え、栗隈大溝に比定される古川や木津川に近く、水上交通の要衝であった。栗隈県もそのような利便性に着目して設定されたのであろう。

県主はヤマト王権の直轄領である県の管理をうけもった豪族である。栗隈県の管理を任されていたのが、栗隈氏である。栗隈氏は、『日本書紀』舒明天皇即位前紀に、栗隈采女黒女の名がみえ、『日本書紀』天智天皇 7 年 2 月 23 日条には、栗隈首徳萬の娘の黒媛娘が、天智天皇の後宮に入り、水主皇女 (のちの水主内親王) を産んだことが見えている。奈良時代には栗隈連東麻呂などがみえる。栗隈県主という氏族はみえないが、栗隈首、栗隈連はかつて栗隈県主であった氏族の後裔と考えられている。^(注5)

律令制下においては、城陽市域は山城国久世郡・綴喜郡に編成される。

律令期の遺跡としては正道遺跡が挙げられる。当初は寺院跡と考えられていたが、奈良時代の官衙遺構が検出された。現在では久世郡衙の候補地の一つと考えられている。

官衙遺構は 3 時期に区分される。Ⅰ期の建物は 7 世紀第 3 四半期から第 4 四半期、Ⅱ期は 7 世紀第 4 四半期から 8 世紀初頭、Ⅲ期は 8 世紀前半に属する。

郡衙の周辺には、奈良時代前期から平安時代にかけての寺院跡と考えられる久世廢寺や平川廢寺などが点在する。特に平川廢寺については、塔や金堂の基壇がよく保存されており、築地などにより寺域の広がりほぼ確認されている。

鎌倉時代においては、賀茂別雷神社・石清水八幡宮・春日社・元興寺などの寺社領であったことから、京都・南都との関係の深い土地であったことがわかる。

南北朝期から室町時代においては、南山城地域は内乱の中心となる。元弘元 (1331) 年の後醍醐天皇の挙兵にあたり、周辺の土豪たちが参軍して幕府方と戦ったという伝承がある。応仁の

乱後の文明期の内乱においては、主戦場になり、土豪たちは城を築いて防備にあたった。特に城陽市域は水主氏の勢力基盤であった。

同時期の遺跡として水主城跡が挙げられる。水主城は、水主遺跡のほぼ中央にあたる水主集落一帯に存在していたと考えられる中世城郭である。水主城は、15世紀後半に『大乘院寺社雑事記』などの文献に「御厨子城」としてその名を見ることができる。文献から山城国一揆の拠点であるとともに当時の南山城地域支配の要の城と考えられる城郭である。現在、その痕跡は全く認められないが、明治5年作成の「水主村地所図」と現地形を手がかりに城郭復元案が作成されている^(注6)。この図には、「シロノ丁」・「シロノ内」という字名が記されており、水主城跡は水主集落の東北隅の一角に位置していたことが分かっている。水主城推定地付近を調査したのは、1995年の水主遺跡の確認調査においてであるが、遺構は検出されていない。その他、外野（富野）城・寺田城・枇杷庄城など、中世城郭の存在が確認されている。また、寺田の環濠集落も、応仁の乱ごろに防御を目的として形成されたものと考えられている^(注7)。織豊期における太閤堤の築造や伏見城の築造は、城陽市域にも大きな影響を与えた。大和街道の整備によって京・大和間の距離が短縮され、従来の奈良街道より重視されるようになった。

近世に入ると城陽市域は久世郡と綴喜郡に編成され、水主村は綴喜郡に属し、天領として幕府の支配下に置かれた。(酒井健治)

3. 調査経過

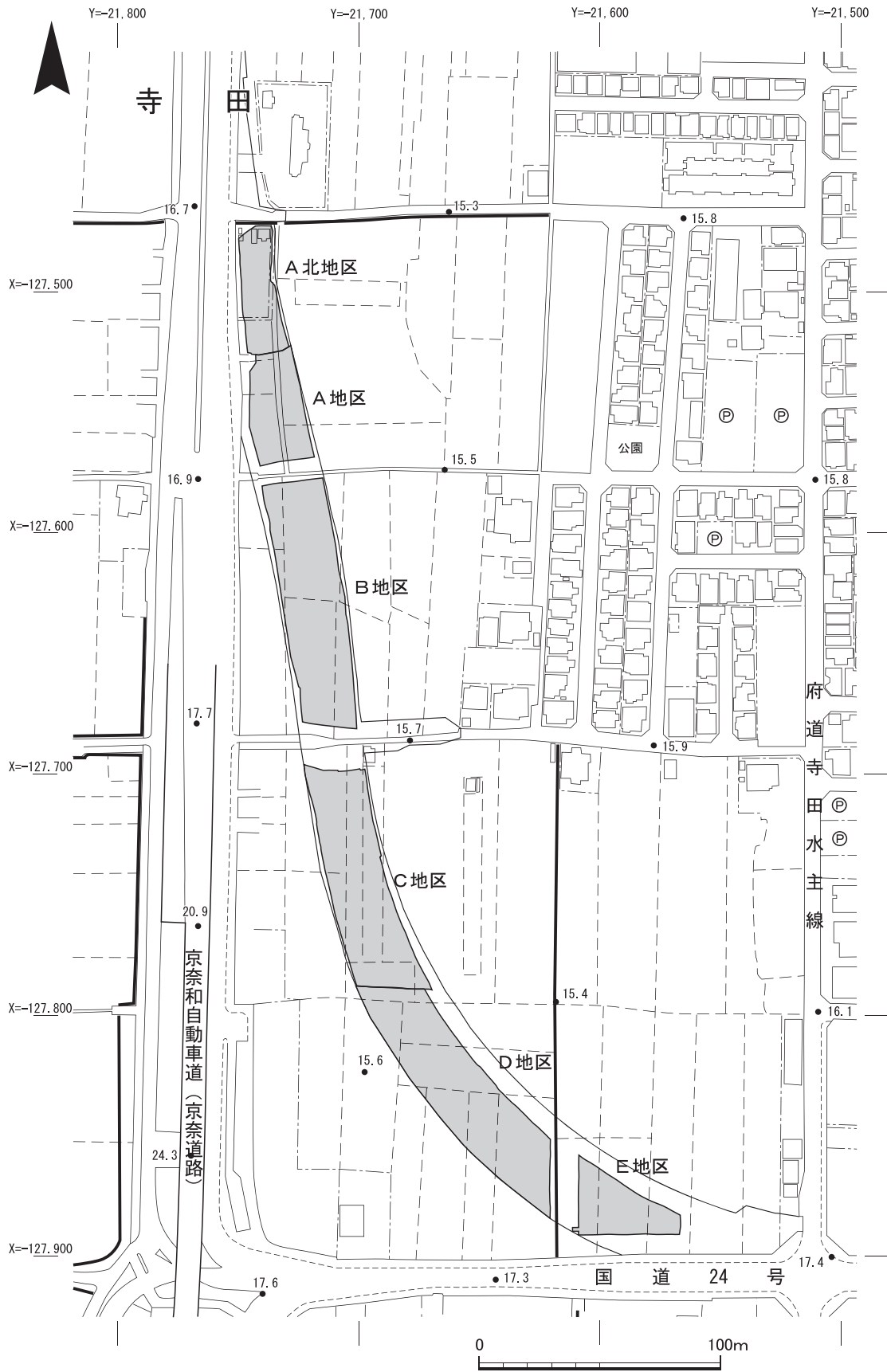
調査は、先述したように、道路予定地に直交する東西・南北の里道・市道に挟まれた範囲を一つの地区とし、北から南に順にA北・A～E地区として調査を実施した(第2図)。

明治以前の島畑・水田耕作面が、現水田耕作面より約0.5～0.8m下に位置することから、重機により表土の掘削を実施し、層位ごとに人力掘削で遺構の検出作業、遺物の取り上げ作業を行った。

遺構平面図は、トータルステーションおよびラジコンヘリコプターによる空中写真測量により、縮尺1/50・1/100で、土層断面図は縮尺1/20で作成した。必要に応じて、土層断面図・遺物出土状況図を縮尺1/5・1/10で作成した。平面・断面図に用いた国土座標は世界測地系の第Ⅳ座標系で、標高はT.Pである。

島畑については、検出した順に島畑1～21の番号を付した。遺構番号については、北から順に調査を行うことができなかったため、あらかじめA地区に1～100、B地区101～200、C地区201～300、D地区301～400、E地区401～500を割り振った。A北地区については、A地区を2地区に分けて調査を実施したため、A地区との割り振りとは別に01～09の番号を付した。島畑間の谷部については水田と考えられることから、遺構の記号をSNとした。水田は、南北方向のものから番号を付し、東西方向のものは南北方向のものの後の番号を付した。また、調査地の位置は、『城陽市史』に掲載されている復原条里を使用した(第3図)。

平成24年度には、A・B・C・E地区の調査を実施した。表土の仮置場が手狭なことと、工事



第 2 図 調査地地区割り図



第3図 条里型地割り復原図(『城陽市史』の条里図を基に作成)

ながら、平成25年度の調査予定地であるA北・D地区の表土掘削等を行った。A北地区については、旧水田面に高さ約1.3mのコンクリート擁壁が設けられ、盛土がなされており、それらの除去作業を実施した。D地区については、遺構面近くの現水田面下約1mまで表土掘削を行った。

平成25年度調査は、A北・D地区の調査を実施した。C・D地区の西側の隣接地では、新名神高速道路整備事業に伴って城陽インターチェンジ建設地で下水主遺跡第4次調査、水主神社東遺跡第5次調査が実施された。特にD地区の西側の水主神社東遺跡第5次調査は、今回の調査と同時期に実施しており、その成果の一部もこの報告内で触れている。

A北地区では、トレンチ中央部で東西方向の鳥畑2基を検出した。D地区では、東西方向の鳥畑2基、南北方向の鳥畑7基(C地区鳥畑の南端部分2基を含む)を検出した。鳥畑上での栽培作物を明らかにするため、D地区の水田S N16内の堆積土を水洗いし、種子を採取して同定作業を

の優先順位から、以下の順で調査を行った。まず、A・B地区(北側1/2)の調査を行い、A地区の終了とともにB地区南側を拡張してB地区全体の調査を行った。その後、C・E地区の調査を行い、E地区終了後にB地区北西部、B地区南西部、C地区北西部を拡張し調査を実施した。

これらの地区の調査により、東西方向の鳥畑をA地区で3基、B地区で1基、南北方向の鳥畑をB地区で2基、C地区で3基、E地区で3基の計12基検出した。これらの鳥畑は、出土遺物から13世紀後半～14世紀前半頃には造成され、15・16世紀、17世紀代に改変が行われ、近世以降の鳥畑に引き継がれたようである。

これらの調査の終了後に、調査区の埋め戻しと平行し

実施した。

平成26年度は、平成24・25年度調査の整理報告作業を実施した。あわせて、島畑の造成時期を特定するために¹⁴C年代測定を、島畑上で栽培された作物を明らかにするために花粉分析を実施した。

4. 平成24年度調査

1) 下水主遺跡第2次

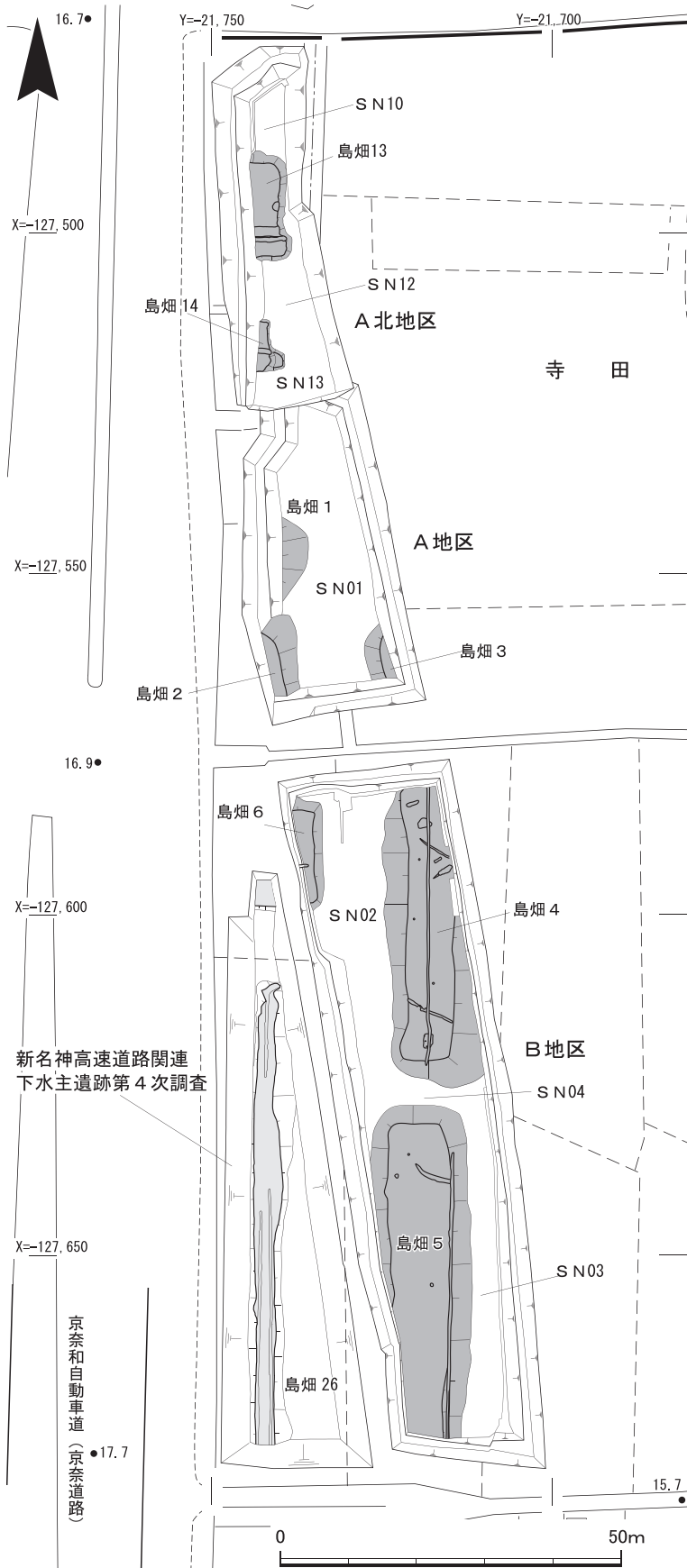
(1) A地区 (第4～6図)

城陽市寺田今橋に所在する。調査対象地の北側に位置し、復原条里によると、久世郡条里五条二里三十三坪にあたる。南端は坪境で、東西方向に里道が通じている。

調査地の標高は15.3mである。トレンチの西壁で島畑2基、東壁で島畑1基を確認した。これらはわずかな範囲の盛り上がりを認めただけであるが、周囲を掘り窪めて微高地上に盛土した東西方向の島畑の基部と判断する。トレンチ中央では、坪境に相当する南北方向の水田S N01を検出した。

①基本層序 (第5図)

トレンチ南壁の土層堆積状況は、第1層(現代水田耕作土)から第5層(緑黒色砂質粘土)までは、水田耕作土の第3層(青黒色粘土)と床土の第

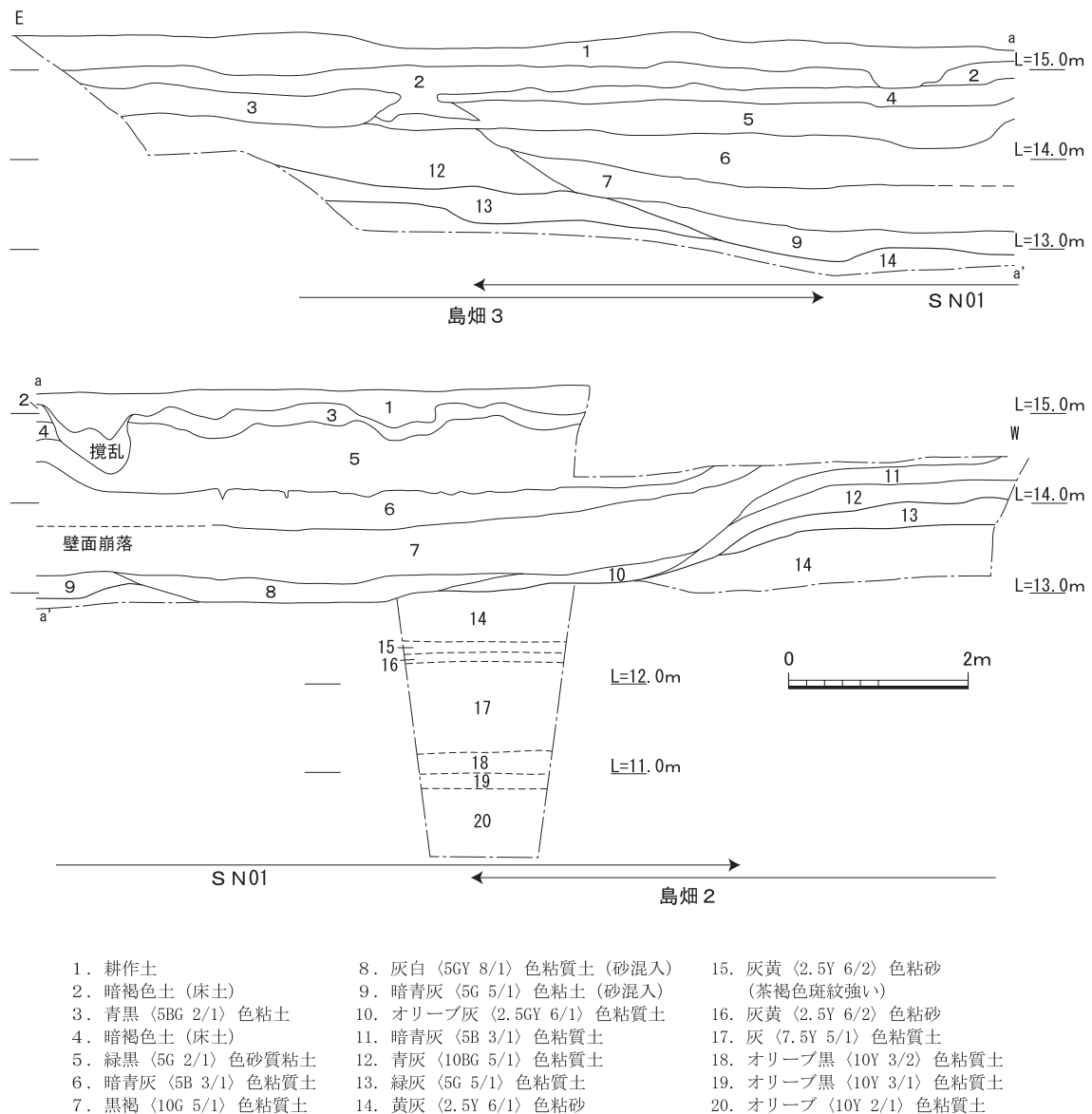


第4図 A・B地区遺構配置図

2・4層(暗褐色土)とが互層となっており、その間に細かな砂層が堆積することから、洪水を受ける度に水田の復旧がなされたことが窺われる。

東側の第3層や第5層が島畑上の盛土である第12層(青灰色粘質土)を覆っていること、第3・4層の下面がほぼ水平に堆積していることから、ある時点で島畑の上を整地して、水田へと改変したものと推測される。明治41(1908)年に作製された地図ではこの近辺に島畑が存在しているので(第42図)、この時期以降に島畑を取り壊して水田へと転換し、整地したものと推測される。

第6層(暗青灰色粘質土)は、20世紀初頭まで島畑が機能していた段階の低い部分に相当し、水田として土地利用された土層と考えられる。第7層(黒褐色粘質土)は、島畑2の上と水田部分とともに覆っている。記録が不十分であるが、本来は、谷部分に相当する土層と島畑上の土層が分かれるものと推測し、水田と島畑上の盛土と考えたい。第8～10層は3層に分層したが、上面が



第5図 A地区南壁断面図

ほぼ水平に堆積していることから、島畑の造成時もしくはそれに近い段階の水田面と考える（S N01）。第 8 層（灰白色粘質土）は、その形状から、水田の底面に掘削された水抜き用の溝の肩部が崩落した可能性もあろう。第 14 層（黄灰色粘砂）が基盤層で、この上に島畑が造られている。

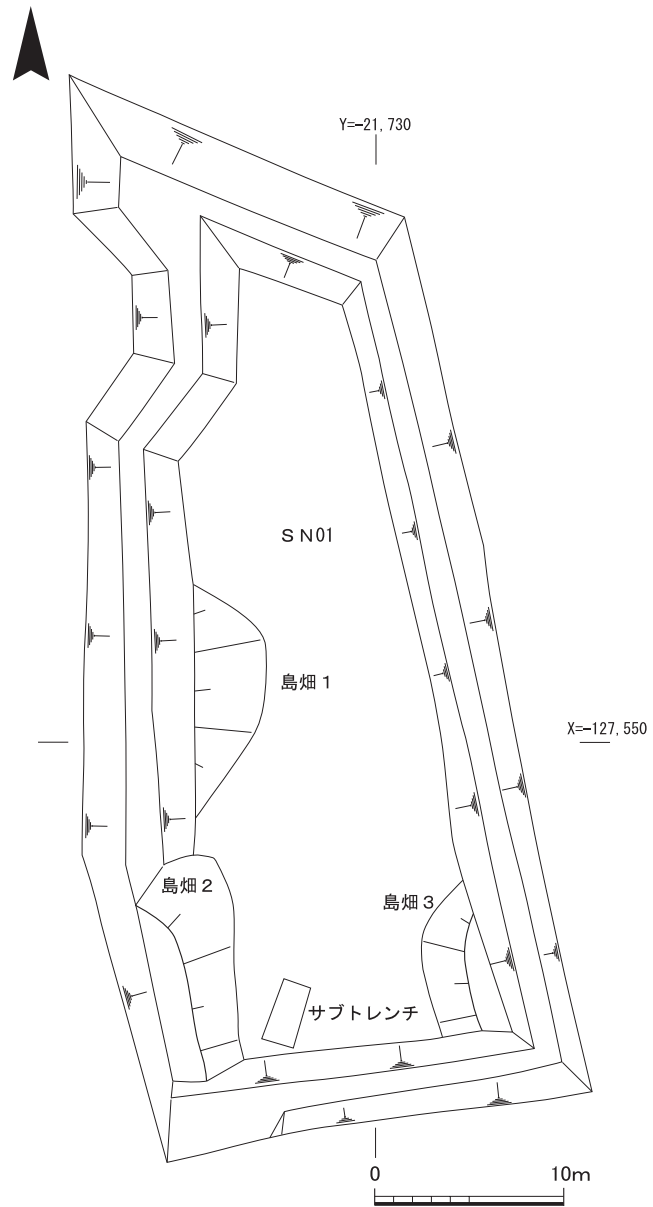
第 14 層より下層の遺構・遺物の有無を確認し、土層の堆積状況を観察するため、島畑 2・3 間の谷部底面にサブトレンチを設定し、深さ約 3 m、標高 10 m まで掘削した。その結果、第 14 層の基盤層は標高 12.5 m まで堆積していることを確認し、以下、灰黄色系の粘砂（第 15・16 層）、灰・オリブ系の粘質土（第 17～20 層）が認められた。これらの土質の状況から、人間が土地利用する以前は、湿地や沼地であったと推定された。遺構・遺物は出土しなかった。

②検出遺構（第 6 図）

島畑 1～3 とも、周囲を掘り下げて盛土を施した基部を確認した。島畑 1・2 は南北に接して一続きのようにも見えるが、削り出した下端が南と北に二つに分かれて検出されたため、その間には幅の狭い水田が存在すると考えられる。島畑 1・2 の東側、島畑 3 の西側は、水田と判断される平坦面となっている（S N 01）。

島畑 1 西壁中央部分で検出した。南に接して島畑が造られていることから、東西方向に長く造られた島畑と推定される。基盤層を削り出した裾を検出したもので、盛土等は確認できなかった。規模は、裾部の幅が最大で 12 m、高低差は最大で 0.84 m ある。

島畑 2 調査区の南西部分で検出した。南側の B 地区では、東西方向に延びる島畑 6 を検出していることから、島畑 2 は南北に長く延びるのではなく、東西方向に造られたことがわかる。島畑 2 は島畑上面の平坦面から下がる傾斜面を確認しただけである。土層で見ると（第 5 図）、第 14 層の基盤層を削り出し、その上に第 11～13 層を盛り上げており、島畑上に盛土を繰り返していることが分かる。規模は、裾部と裾部の検出幅が 11 m で、高低差は最大で



第 6 図 A 地区平面図

0.7mある。

島畑3 調査トレンチの南東部分で検出した。島畑3は、第5図の第12・13層およびその下の第14層で構成される。規模は島畑の裾部の検出幅8m以上で、高低差は最大で1mである。

水田S N01 島畑2・3の間の平坦面である。第6～10層が埋土であり、徐々に水田面が高くなっていったものと推測される。下端での削り出し幅が10mである。第7層からは、弥生土器底部片(第36図1)、第8～10層からは細片化した土師器・瓦器が出土した。

(2) B地区 (第4・7～14図)

城陽市寺田今橋に所在する。A地区の南側に位置し、復原条里によると、久世郡条里五条二里二十八坪にあたる。北側のA地区との境をなす里道と、南側の市道はともに坪境に相当する。調査地の標高は15.4mである。調査地南東側には、調査地と一部重なって、南北50m、東西20m、高さ0.3～0.4mの島畑が存在し、イチジク栽培が行われている(図版第39・40)。

調査の結果、トレンチ中央部分で南北方向に並ぶ島畑4・5の2基、北西隅で東西方向の島畑6の計3基の島畑を検出した。また、坪境に相当する南北方向の水田S N02、島畑間の水田S N03・04を検出した。島畑の上では土坑・溝を検出した。

①基本層序 (第7・8図)

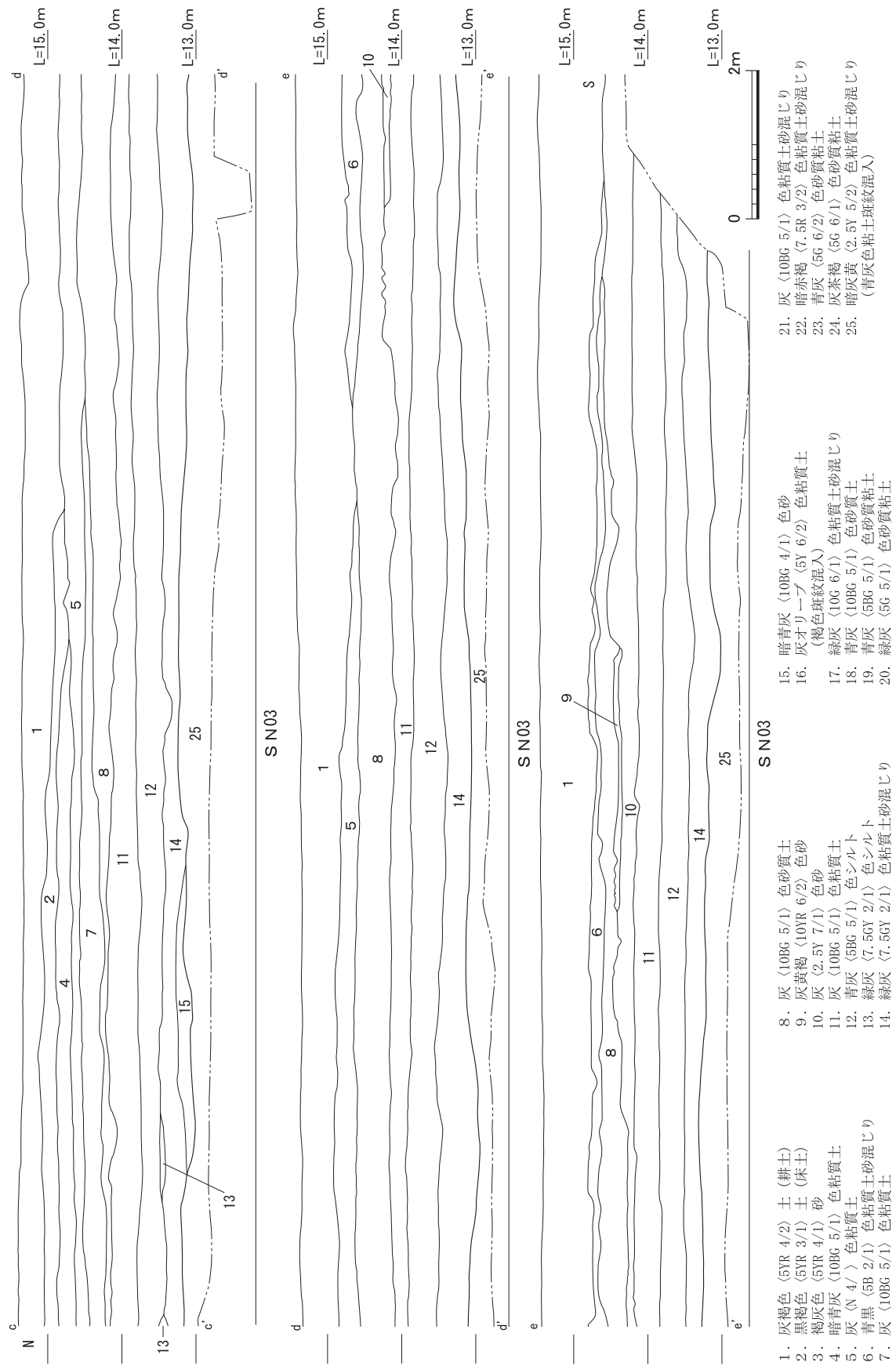
トレンチ東壁での土層の堆積状況は、第1層は現代水田耕作土である灰褐色土で、その下には中央より北寄りでは床土である第2層(黒褐色土)が、南寄りでは同じく床土である第6層(青黒色粘質土砂混じり)が堆積している。また、トレンチの北側では第3層(褐灰色砂)が、南側では第9層(灰黄褐色砂)が部分的に堆積している。ともに洪水に伴う砂層と判断する。第3・9層は、調査地北・南側には認められるが、中央部分には認められない。これは、氾濫後に田畑を復旧した際に、氾濫砂・泥を除去しきれなかったものが残存したものと考えられる。第4層(暗青灰色粘質土)、第5層(灰色粘質土)、第7層(灰色粘質土)も水田耕作土と考えられ、トレンチの南から北に向かって緩やかに下りつつ、下層の島畑を覆う堆積となっている。これらの水田耕作土は、A地区同様、明治41年の地図には島畑が調査区の西側にみられることから(第42図)、20世紀初頭にこの周辺が水田化された以後の堆積を示すものと判断される。

島畑は基盤層である第25層より掘り込まれている。島畑4の基盤層第25層は北に緩く下がっていくため、島畑上面の高さを揃えるために基盤層が傾斜し始める部分から第23層(青灰色砂質粘土)を盛り土したものとする。盛土後、基盤層の第25層も含め北側端部を削り出して島畑を形成する。第24層は、微高地を形成する基盤層の高い部分を削り整地した層と考えられ、この層中より細片化した縄文土器が散乱して出土した。

島畑4の北側の谷部には厚さ10～20cmの灰オリーブ色粘質土(第16層)～灰色粘質土砂混じり(第21層)が堆積する。これらの層序は粘質～シルト質であり、基本的に湿地状の環境であったものと推定される。それぞれの土層の上面が水平であることや現状の島畑のあり方から類推すると、これらの低地は水田として利用されていたと考えられる。



第7図 B地区東壁断面図(1)



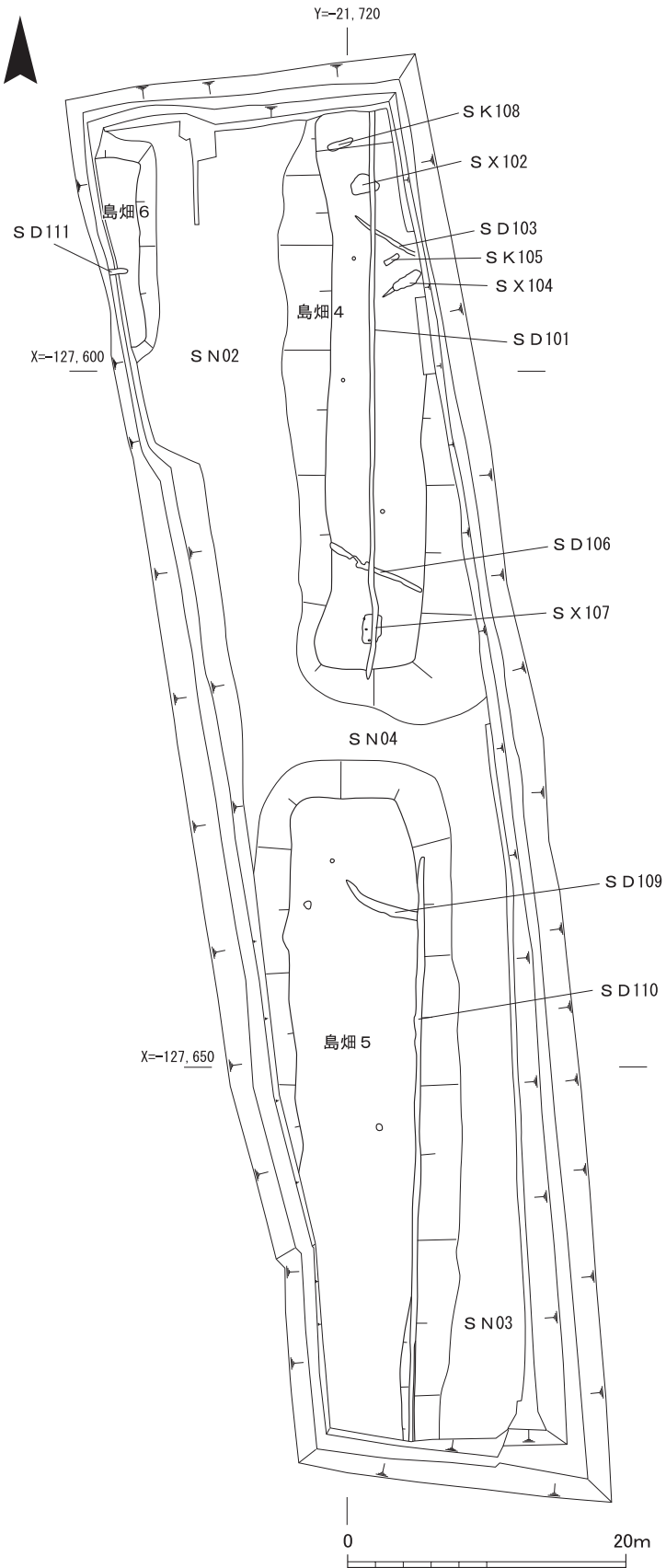
第8図 B地区東壁断面図(2)

②検出遺構(第9図)

島畑 4 微高地を削り出し南北方向の島畑基部を形成する。検出長43m、幅14m、高さ1.2mを測る。北端は、トレンチ北壁付近で終わる。西側にある島畑 6 との間は、水田 S N02 となり、坪境となる。島畑上では中央部で島畑に平行する溝 S D101 を検出した。S D101 に先行する遺構として、東壁寄りで溝 S D103、島畑南側で溝 S D106 を検出した。島畑北側で土坑 4 基(S K105・108、S X102・104) を検出し、島畑基盤層上の第24層より縄文土器片が出土した。南端で土坑 S X107 を検出した。

島畑 5 微高地を削り出して南北方向の島畑基部を形成する。検出長49m、幅13m、高さ1.2mを測る。南端は調査地外となり確認できなかった。島畑 4・5 間には水田 S N04、東側には水田 S N03 がある。島畑上の北端で溝 S D109、島畑東辺で削り出した平坦面に沿う溝 S D110 を検出した。S D109 の北側では、島畑基盤層上の包含層より縄文土器片が散乱して出土した。島畑 4 と同じく、微高地が北側に下る傾斜部分にあたり、その上に高所部分を削平して盛土を行ったものと推測する。

島畑 6 微高地を削り出して東西方向の島畑基部を形成す



第9図 B地区平面図

る。検出長5m、幅16m、高さ1.06mを測り、鳥畑の東端部分を検出した。鳥畑中央部で鳥畑に平行する溝SD111を検出した。鳥畑4との間には坪境に相当する水田SN02がある。

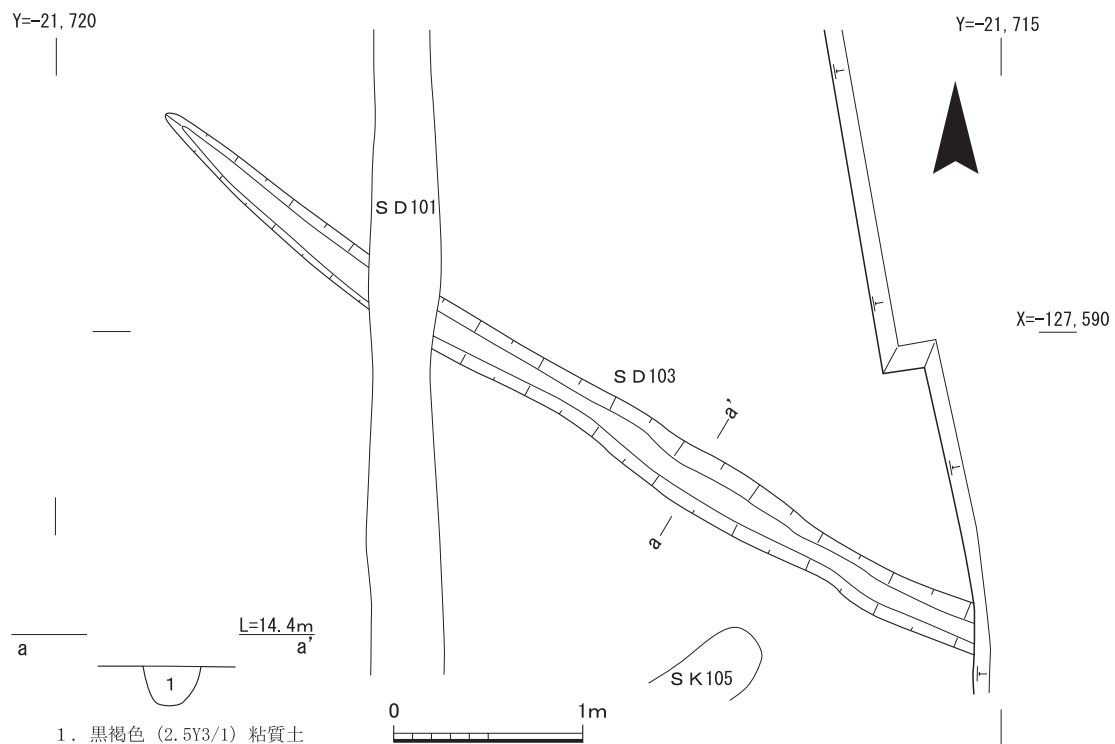
水田SN02 鳥畑4と鳥畑6の間の南北に延びる平坦面である。下端での削り出し幅は9m、上端での幅は13m、底面から上端までの高さ1.2mを測る。復原条里の坪境に合致する。出土遺物には細片化した土師器・瓦器がある。

水田SN03 鳥畑4・5の東側の平坦面で、南北に延びる水田である。第11層(灰色粘質土)～第14層(緑灰色粘質土砂混じり)がSN03内の堆積土で、ほぼ水平に堆積している。下端での削り出し検出幅は5m、上端での検出幅は8m、底面から上端までの高さは1.0mを測る。細片化した土師器・瓦器が出土した。

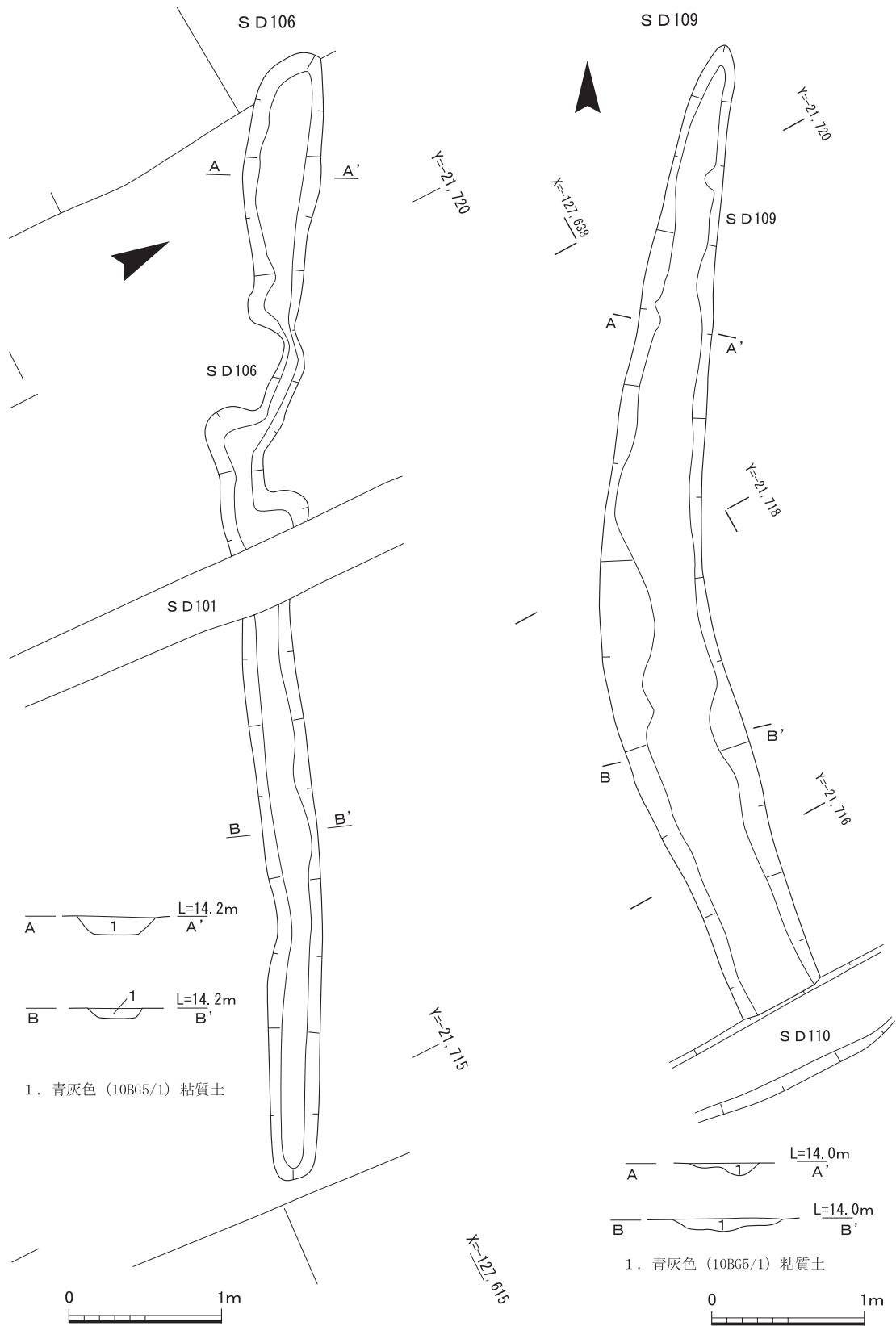
水田SN04 鳥畑4と鳥畑5の間の平坦面である。下端での削り出し幅4m、上端での幅は9mである。底面と上端の高さは1.2mを測る。土師器・瓦器の小片が出土した。

溝SD101 鳥畑の方位に平行し、鳥畑中央部を南北に貫通する。幅0.3～0.4m、検出長41m、深さ0.26～0.3mを測る。断面「U」字状を呈する。中央部を境に北・南方向に緩い傾斜をもつ。SX102・107、SD103・106より後に掘削されている。埋土は灰オリーブ灰色系の粘土・粘質土の2層からなる。土師器皿・瓦器の小片のほか、中央付近より椀型鍛冶滓が出土した(第37図16)。

溝SD103(第10図) 鳥畑4の北半で検出した。鳥畑中央部から南東方向に延びる溝で、重複関係より、SD101よりも古いものである。幅0.3m、検出長5.2m、深さ0.22mを測り、南東方向に緩い傾斜をもつ。細片化した土師器が少量出土した。



第10図 B地区溝SD103実測図

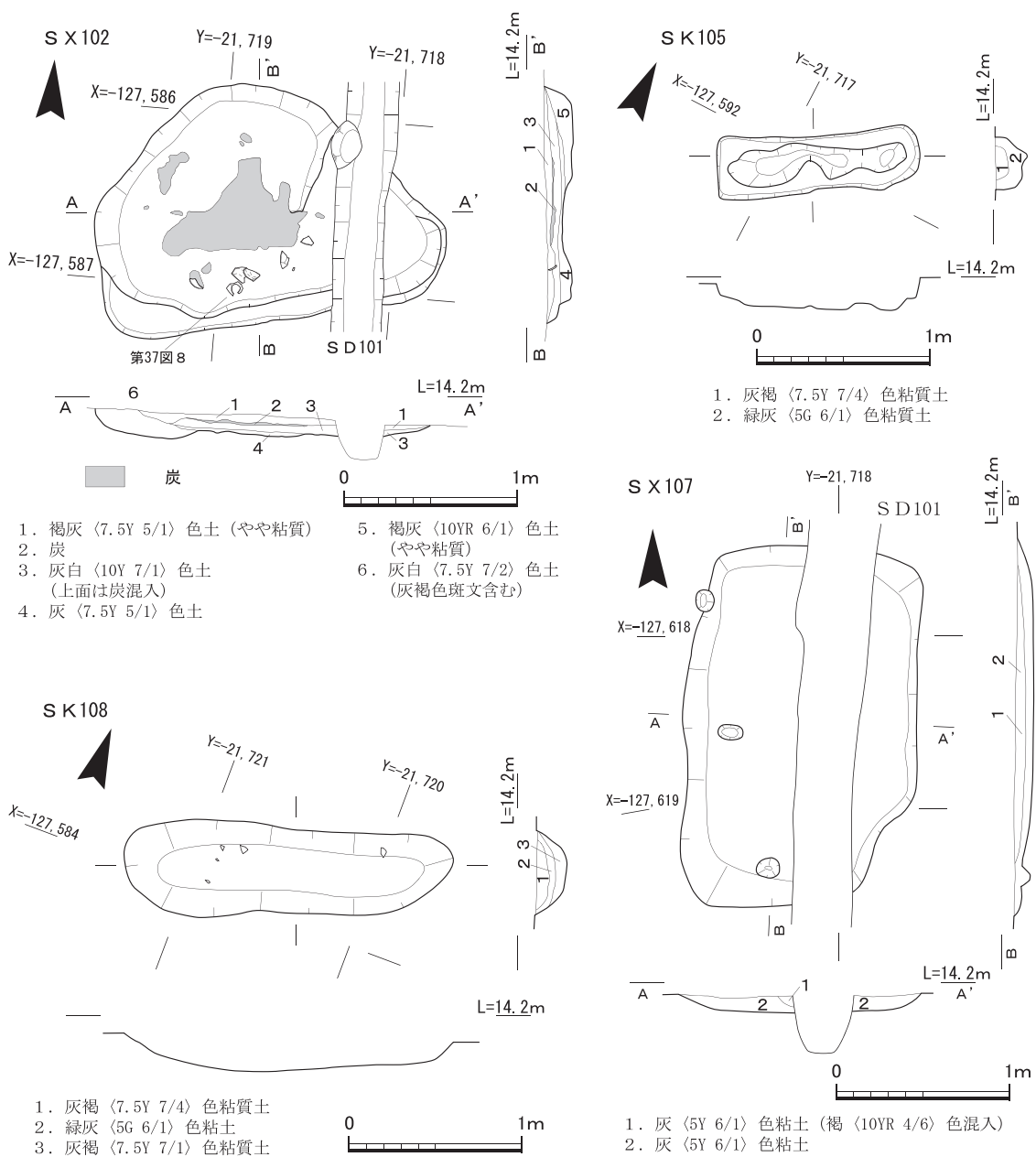


第11図 B地区溝 S D106・109実測図

溝S D 106(第11図) 島畑4の南半で検出した。島畑中央部から島畑上端をほぼ横切る北西から南東方向に延びる溝である。中央部より北西側の平面形がややいびつである。幅0.1~0.50m、検出長7.4m、北西側の深さ0.12m、南東側の深さ0.08mを測り、北西方向に緩い傾斜をもつ。土師器小片が少量出土した。

溝S D 109(第11図) 島畑5の北半で検出した。島畑中央部から南東方向に延びる溝である。重複関係から、S D 110よりも古いものである。幅0.3~0.8m、検出長6.4m、深さ0.1mを測り、南東方向に緩い傾斜を持つ。遺物は出土しなかった。

溝S D 110 島畑5の平坦面にあり、東辺にほぼ平行して検出した。検出長42m、幅0.3m、深さ0.2mを測る。平面の重複より、S D 109に後出するものである。遺物は出土しなかった。島



第12図 B地区土坑S X 102・107、S K 105・108実測図

畑造成以降の水田耕作に伴う溝と考えられる。埋土は青灰色粘土である。小片化した土師器が少量出土した。

溝 S D 111 島畑 6 の上面で検出した東西方向の溝で、島畑長辺に平行し、島畑を貫通せず、短辺側の斜面手前で終わる。断面は「U」字状を呈する。幅0.44m、検出長1.4m、深さ0.2mを測る。埋土は暗灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

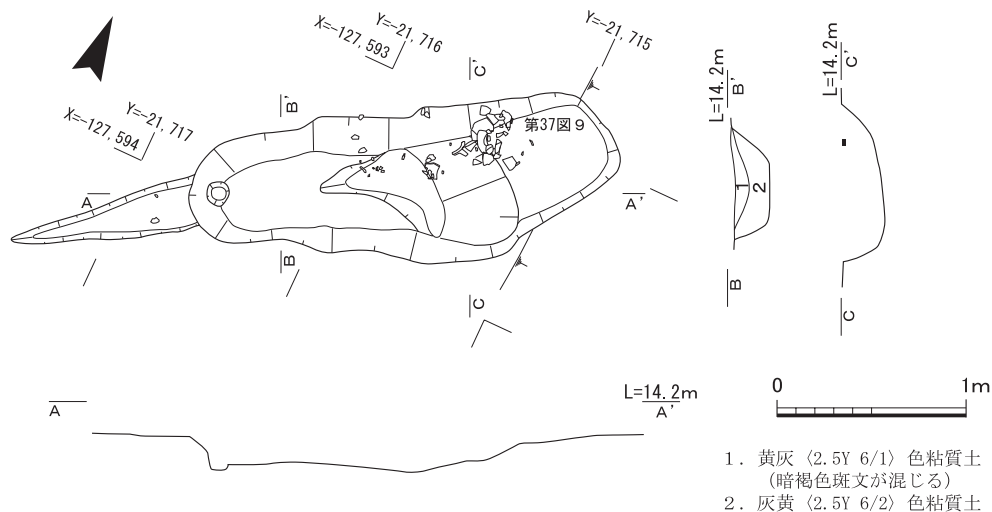
土坑 S X 102 (第12図) 島畑 4 の北半中央部で検出した。東側の一部を溝 S D 101 に削平される。平面形は楕円形状を呈する。検出長2.05m、検出幅約1.4m、深さ0.1~0.17mを測る。埋土は6層からなり、2層目に炭が中央部を中心に広がる。検出面より炭層までの間に弥生土器壺が出土した(第37図8)。

土坑 S X 104 (第13図) 島畑 4 の北半の東壁付近で検出した。平面形は長方形形状を呈し、南西側には浅い溝状の遺構が見られる。土坑中央部より北東側はやや浅い段が2段認められる。南西端には径0.1mの柱穴状の掘り込みが認められる。土坑断面の形状から、土坑以後のものと考えられる。長さ2.3m、幅約0.55~0.8m、深さ0.18~0.22mを測る。埋土は2層からなる。S D 101 と重複し、S D 101 に先行するものである。埋土より弥生土器壺片が出土した(第37図9)。

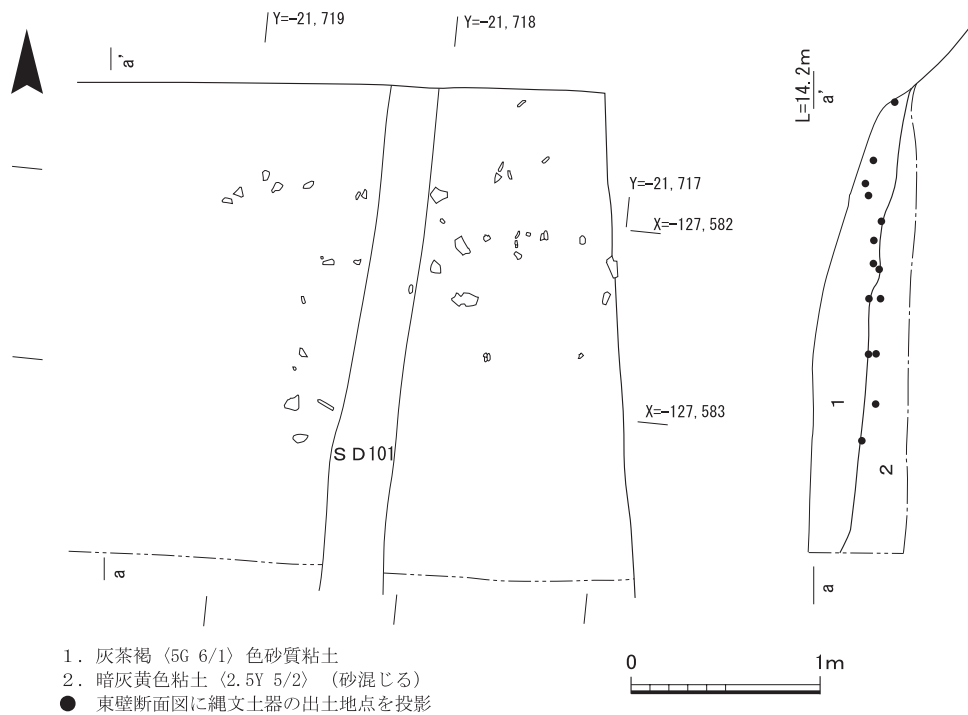
土坑 S K 105 (第12図) 島畑 4 の北半において S D 103 と S X 104 の間で検出した。平面形は長方形を呈する。長さ1.18m、幅0.35m、深さ0.6mを測る。底面の形状がややいびつである。遺物は出土しなかった。

土坑 S X 107 (第12図) 島畑 4 の南端近くで検出した。平面形は長方形形状を呈する。西・南側には径0.1~0.15mの杭状の痕跡が見られる。長さ2.1m、幅1.1~1.35m、深さ0.1mを測る。埋土は2層からなる。遺物は出土しなかった。

土坑 S K 108 (第12図) 島畑 4 の北辺近くの西側で検出した。平面形は長楕円形状を呈する。長さ1.93m、幅約0.5m、深さ0.17mを測る。埋土は3層からなり、検出面より1層までの間に細片化した弥生土器片が出土した。



第13図 B地区土坑 S X 104 実測図



第14図 B地区縄文土器出土状況図

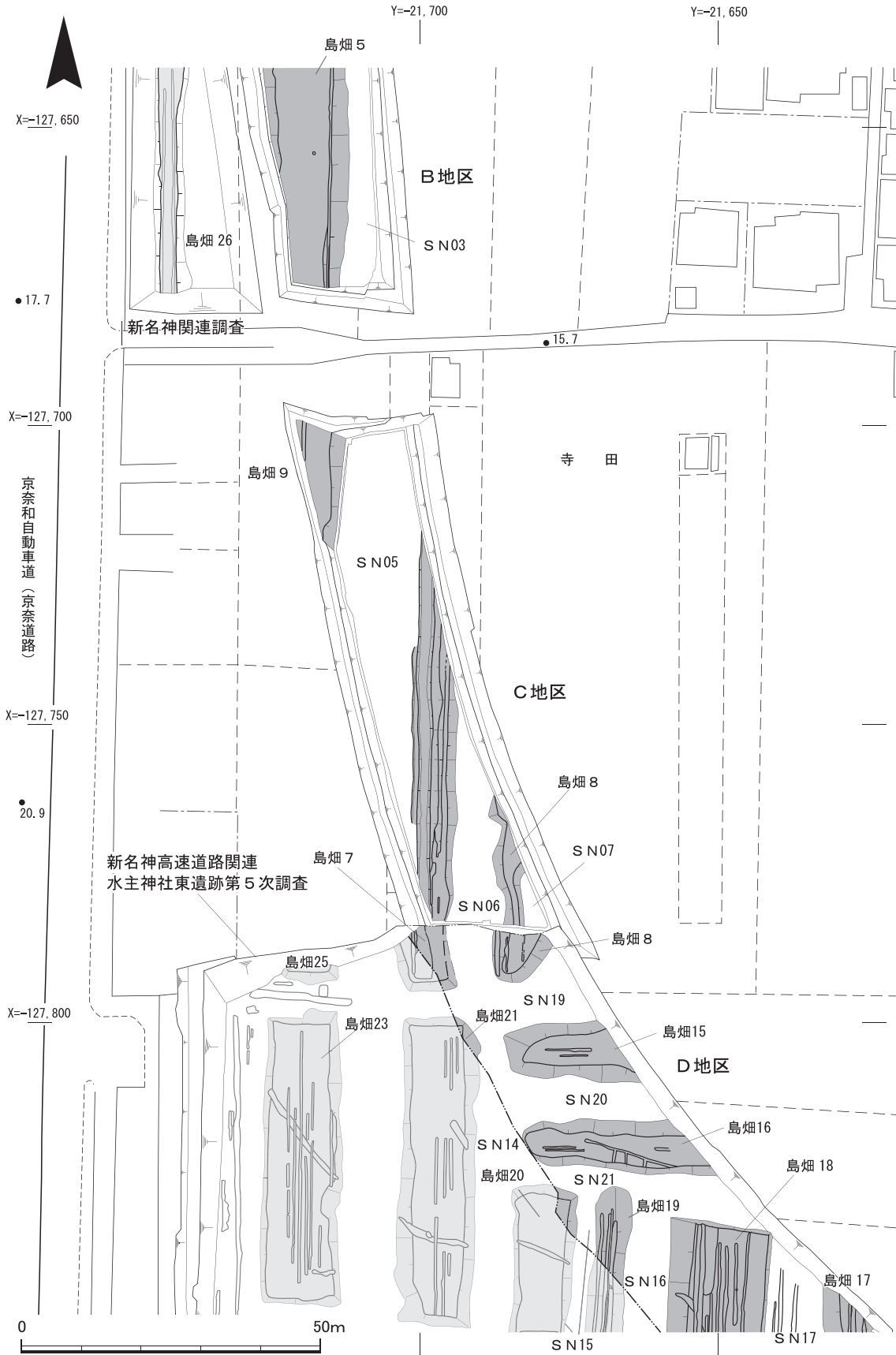
縄文土器出土地点(第14図) 島畑北端の微高地の地形傾斜が始まる部分に相当し、傾斜面に堆積した土砂中より細片化した縄文土器片が散乱して出土した(第8図第24層)。第14図では、東壁断面図に出土位置を標高で落とした。そのため、場所により基盤層の高さが異なるため基盤層中から出土したように見えるが、堆積土中の出土である。

③小結

B地区検出の島畑4～6は調査を行った島畑中で最も基盤層の削り出し高が深い。南から北あるいは、東から西へと島畑間の低地を用水路として機能させるため深く掘削された可能性がある。

島畑上で検出した溝は、島畑の方向に平行するものとやや斜行するものがあり、斜行するものは切り合い関係より、平行する溝よりも古いものである。出土遺物が少ないため、時期は不明であるが、D地区SD331のように島畑に斜行する溝から平安時代の遺物が出土しており、平安時代の可能性がある。

島畑に平行・直交する溝には2種類あり、SD101・110のように島畑の斜面部にまで掘削されている溝と、SD111のように島畑の縁辺部手前で終わっているものがある。前者は水の流れを堰き止めないという点で、排水のための溝である可能性が高いと考える。それに対して、後者は島畑の周囲を意図的に掘り残しているとすると、島畑の四周に作業用の通路があったものと考えられ、耕作に伴う溝(畝谷部等)の可能性が高いと考える。(増田孝彦)



第15図 B・C・D地区遺構配置図

(3) C地区(第15～20図)

城陽市寺田金尾に所在する。現在の地形図を見ると、調査地付近には南北方向の畦畔が認められる。また、東方約50mには、幅約10m、長さ約75mを測る現在の島畑が良好に見ることができると。調査地は、復原条里によると、久世郡条里五条二里二十一坪内にあたる。

調査の結果、南北方向の島畑3基を検出した。

①基本層序(第16～18図)

この調査地の北壁・南壁は、島畑に概ね直交することから、造成当初の島畑から現在に至るまで、島畑の構築状況を知ることができた。南壁での観察結果を以下に記す。

I期 現水田面の標高は、約15.5mを測る。耕土下20～60cmには、第2層(灰黄褐色砂質土)や第3層(灰白色砂)が堆積している。これは、木津川の洪水によるもので、近年の水害としては、昭和24年(ヘスター台風)、昭和34年(伊勢湾台風)による被害が甚大で、第2・3層の堆積はこれらによる可能性が高い。^(注8)

II期 第4層(黄白色砂質土)は旧水田面であり、島畑状の盛り上がりは認められないことから、全面を水田として利用していたと考えられる。明治20年の地図によると、調査地付近は一面水田として利用されていた(第42図)。このことから、第4層は明治20年頃の水田と考えられる。この時期の標高は、約15.0mである。

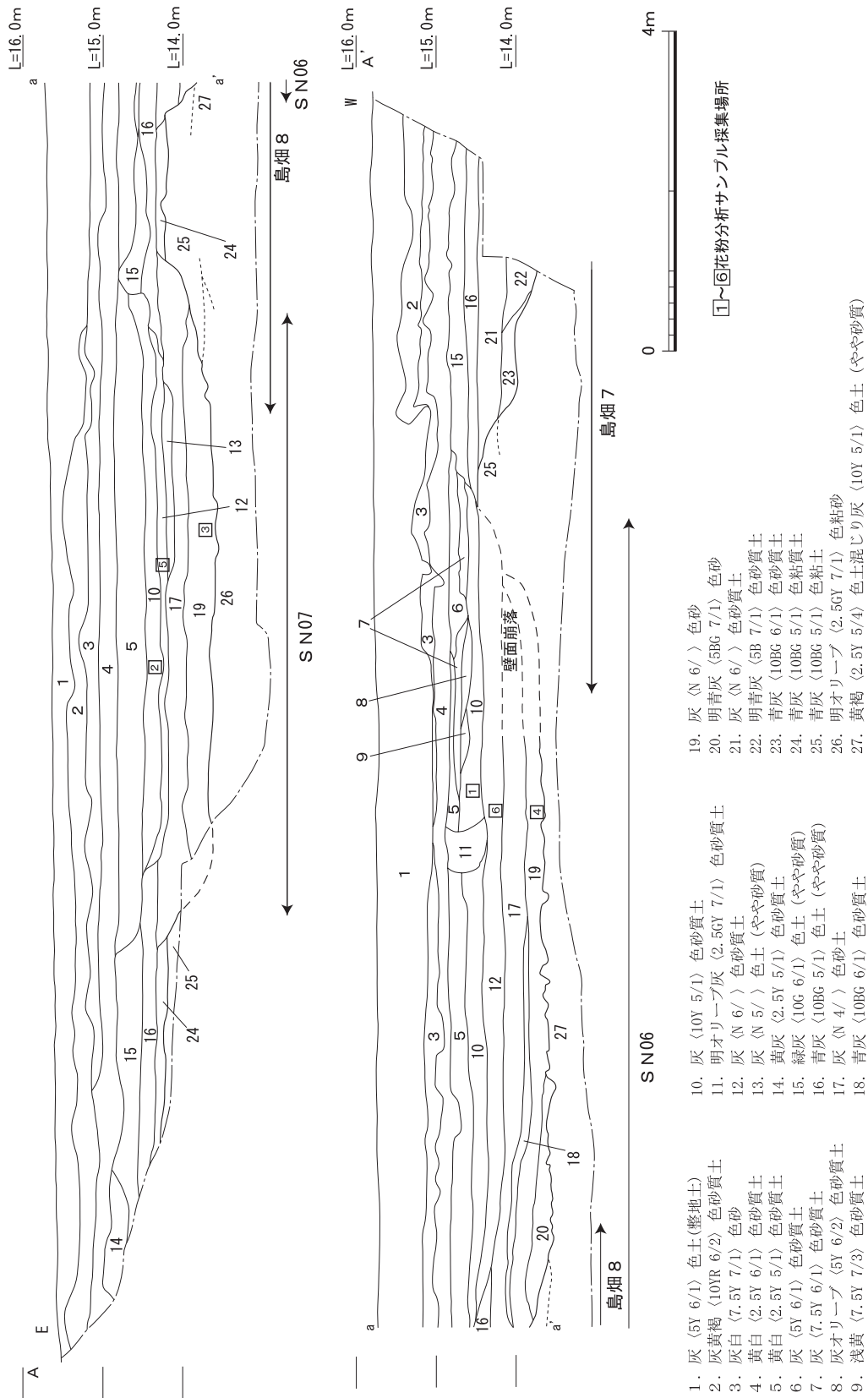
III期 第4層の水田形成時に島畑の上面を大きく削平する形で、島畑3基と水田2か所を確認した。島畑部は第15層(緑灰色土やや砂質)を耕作土とし、水田部の埋土は第5層(黄白色砂質土)～第9層(浅黄色砂質土)である。この時期の標高は、島畑部が約14.8m、水田部は約14.4mを測る。

IV期 III期の島畑・水田の下層で、それ以前の島畑と水田を2か所で検出した。島畑部は、第16層(青灰色土やや砂質)を耕作土とする。水田部は、第12層(灰色砂質土)と第13層(灰色土やや砂質)を耕作土とする。この時期の標高は、島畑部が約14.6m、水田部が約14.2mを測る。

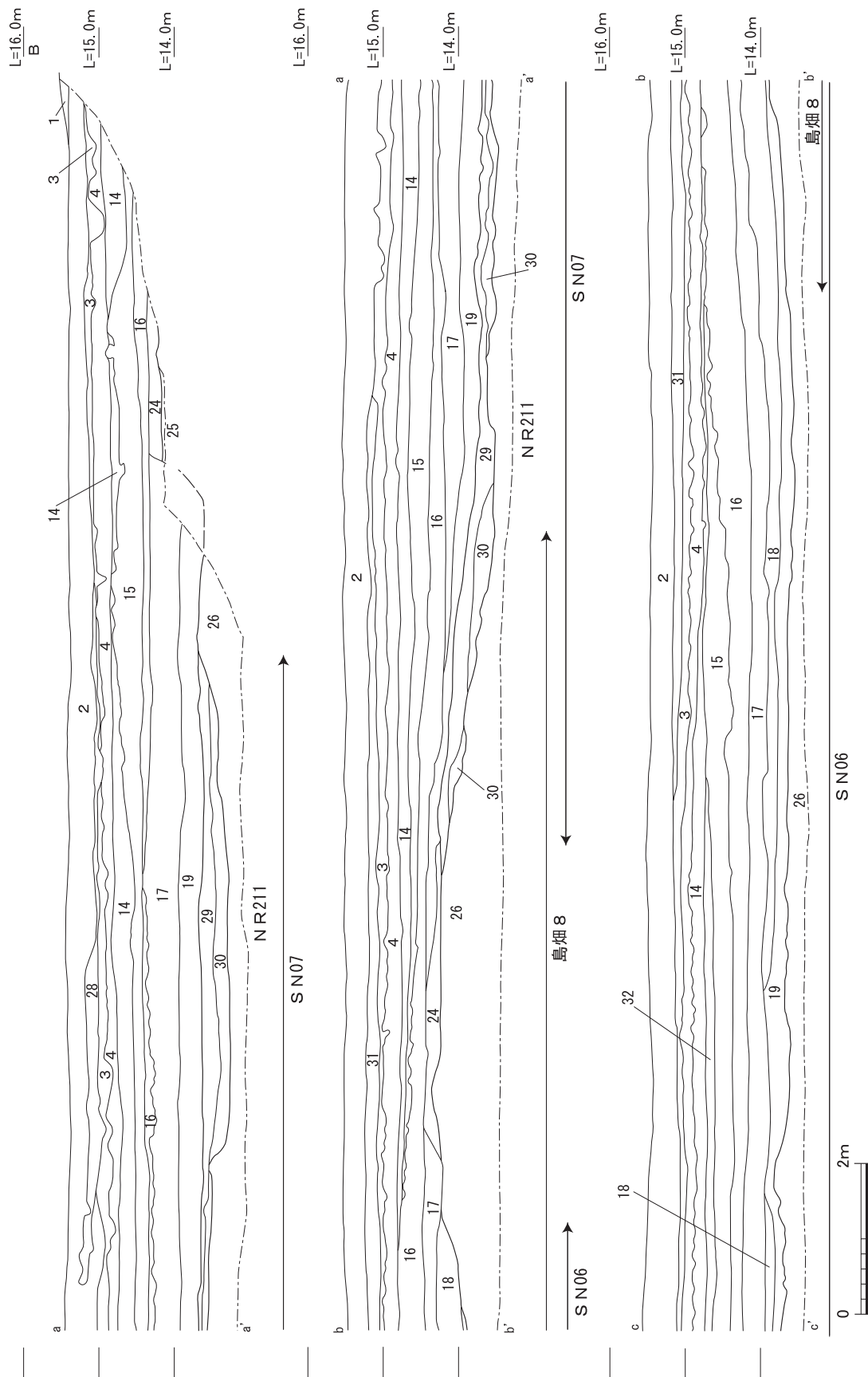
V期 IV期の下層で水田部のみを検出した。水田部の埋土は第17層(灰色砂土)と第18層(青灰色砂質土)である。この時期の水田部の標高は約14.0mを測る。

VI期 最下層では、最初期の島畑を確認した。島畑は、西から島畑7、島畑8である。島畑8の東側で、面的には確認できなかったが、土層の観察で島畑の一部を認めた(第15・16・24層)。これらの基部が調査地外に延びるため、この時期に造営されたのかどうかは不明である。これを含めると島畑部は3基となる。水田部は2か所で、西からS N06・07である。標高は、島畑部が約14.4m、水田部が13.6mを測る。島畑の基部は、第25層(青灰色粘土)で、第24層(青灰色粘質土)を盛土・耕作土とする。島畑間の水田S N06・07の底面には、第19層(灰色砂)、第20層(明青灰色砂)が堆積していた。

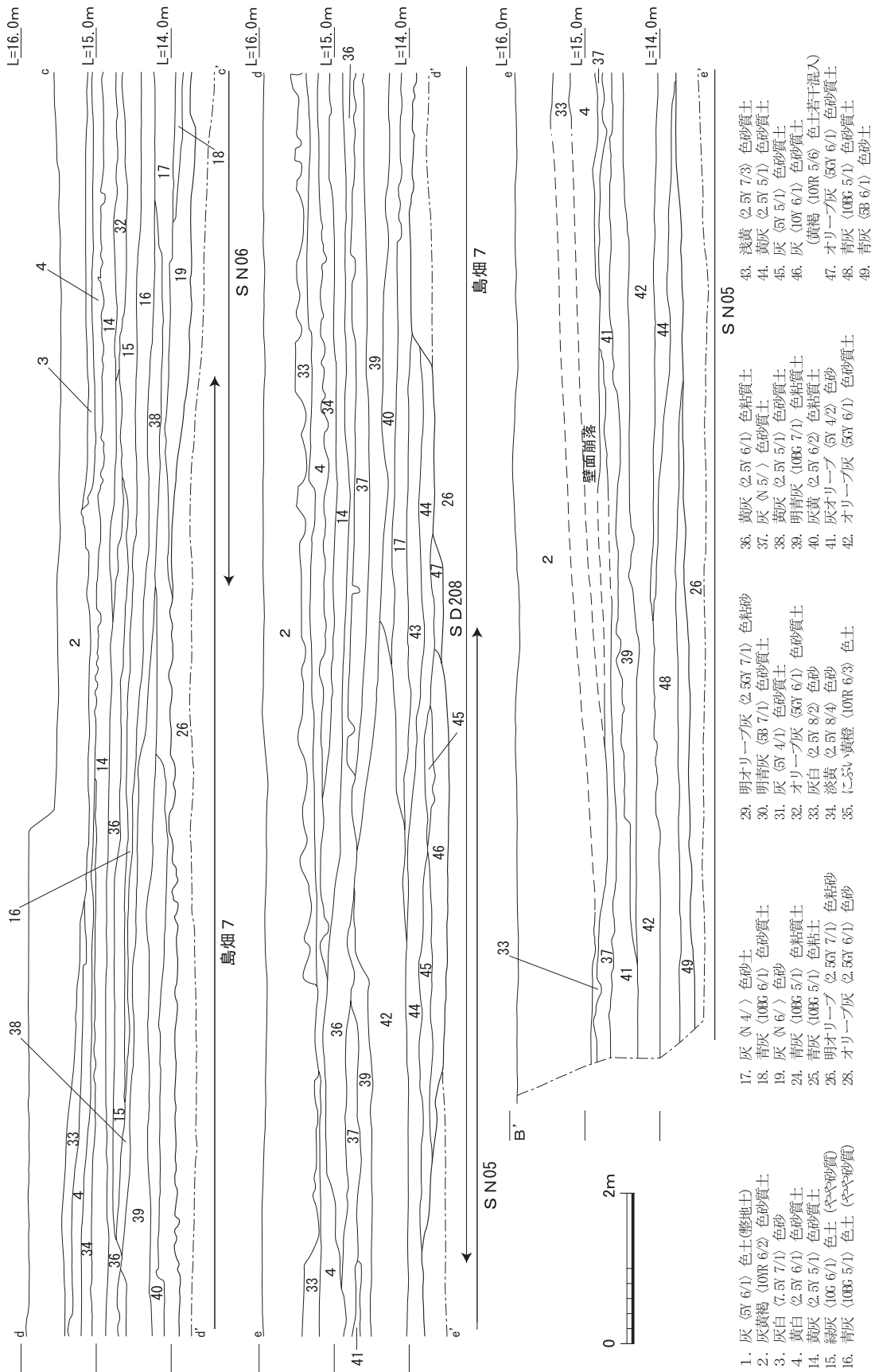
以上のように、南壁を精査した結果、6時期の島畑・水田を確認できた。このうち、島畑の形態をなすのは、III期からVI期までの4時期である。III～V期の島畑・水田は、最初期の島畑(VI期)の位置を踏襲している。時期を示す遺物が少なく、わずかな破片からVI期の島畑は13世紀代と考えられる。III・IV期については時期不明であるが、史料によると、この地域は18世紀前半と19世



第16図 C 地区南壁断面図



第17図 C地区東壁断面図(1)



第18図 C地区東壁断面図(2)

紀中頃に大きな災害が集中することから、これらの災害が原因で島畑を再構築している可能性が高く、その時期に該当するものと思われる。^(注9)

次に東壁面での観察結果を記す。現水田面（Ⅰ期）の下には洪水砂である第2層（灰黄褐色砂質土）・第31層（灰色砂質土）・第3層（灰白色砂）が南で約20cm、北では約1.0mと北ほど厚く堆積する。Ⅱ期の水田面は第4層（黄白色砂質土）・第33層（灰白色砂）で、その標高は南で約15.2m、北で約14.9mを測る。Ⅲ期の島畑は第15層（緑灰色土やや砂質）・第37層（灰色砂質土）で、南で島畑8を、中央付近で島畑7を確認した。中央の島畑については、Ⅱ期水田面によって大きく削平されていた。両島畑の標高は約14.8mを測る。Ⅳ期の島畑は第16層（青灰色土、やや砂質）で、調査地中央付近まで島畑部が続く。その標高は約14.5mを測る。Ⅴ期については、壁面では島畑部は確認できず、水田部の埋土として第17層（灰色砂土）を検出した。Ⅵ期の島畑は第25層（青灰色粘土）と第26層（明オリーブ色粘砂）を基部とし、島畑8の上面には、耕土・盛土として第24層（青灰色粘質土）が残る。その標高は約14.5mである。また、東壁南端において自然流路を検出した。

②検出遺構(第19図)

今回の調査で検出した遺構は、南北方向の島畑3基と島畑間の水田3枚と溝4条である。

島畑7 この島畑は北端は削り出しが少なく南側ほど深くなる。第19図E-E'・G-G'の断面での島畑の高さは0.6mを測り、斜面部は非常に緩やかな形状である。島畑7の南端は、一部D地区に及んでいた。D地区で検出した島畑も含めて、検出長77m、幅10mを測る。しかも島畑平坦面で、溝S D207～209を検出した。溝は、東から西へ、重複する形で掘り直され、S D209→S D208→S D207の順に築かれた。一時期用水路として機能した島畑の可能性はある。

島畑8 調査地南東部で検出した。島畑の基部は第25層（青灰色粘土）を削り出し、その上に第24層（青灰色粘質土）が盛土されている。検出幅3.6m、水田S N06・07からの高さ約0.6mを測り、島畑上面の標高は約14.4mである。島畑の南端はD地区で検出した。D地区での確認規模も含めると、島畑は検出長31mを測る。

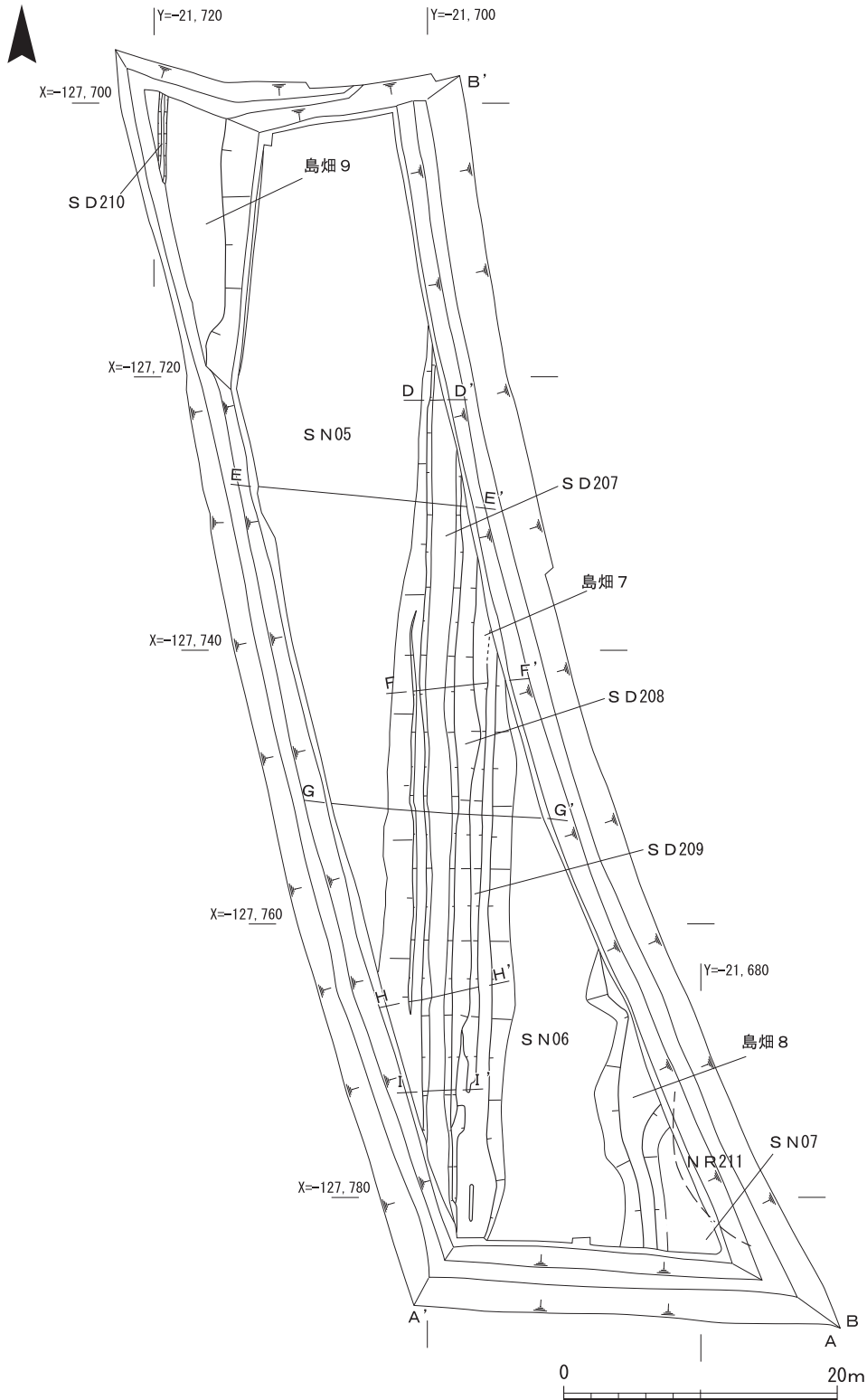
島畑9 調査地北西隅で検出した。島畑の規模は、幅6m以上、検出長20mを測る。水田S N201からの高さは0.6mを測る。島畑上面で溝S D210を検出した。

水田S N05 島畑7と島畑9間の水田である。裾幅14m、上端幅16m、検出長77m、高さ0.6mを測る。埋土は、北壁付近で第48層（青灰色砂質土）・第49層（青灰色砂土）である。第20図E-E'では第13層（灰色粘土）・第14層（灰色粘土）・第15層（明緑灰色粘質土）であった。わずかに土師器片や瓦器片、常滑甕・瀬戸灰釉椀・褐釉陶器椀の破片が出土した。

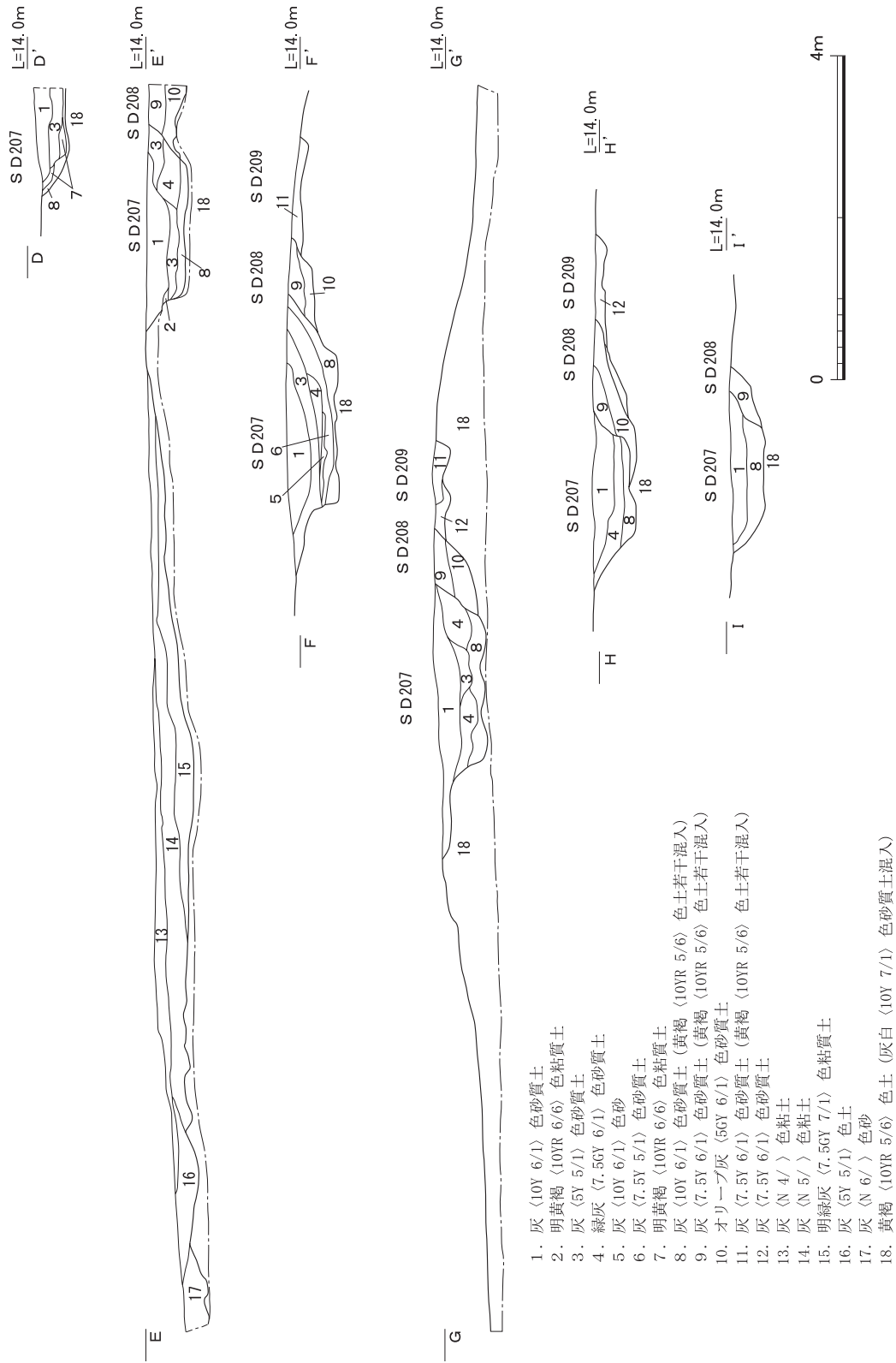
水田S N06 島畑7と島畑8間の水田である。裾幅5～9.5m、上端幅8～10m、検出長約41m、高さ0.7mを測る。埋土は、第17層（灰色砂土）～19層（灰色砂）である。土師器片・瓦器片が出土した。栽培作物を特定するため南壁で花粉分析サンプルを採集した。^(注9)

水田S N07 島畑8の東側の水田である。検出した裾幅4m、検出上端幅4.5m、検出長11mを測る。この溝の下層で自然流路N R211を検出した。

溝S D207 島畑7の上面で検出した南北方向の溝である。溝の規模は、幅2.2～3.4m、深さ



第19図 C地区平面図



第20図 C地区溝S D207~209土層断面図

0.4～0.6m、検出長65mを測る。埋土は灰色系の砂質土(第1～8層)である。わずかであるが、土師器片や瓦器片が出土している。

溝 S D 208 島畑 7 の上面で検出した南北方向の溝である。切り合い関係から溝 S D 207 に先行する。溝の規模は、幅 2.0m 以上、深さ約 0.4～0.5m、検出長 53m を測る。埋土は第 9 層(灰色砂質土・黄褐色土若干混入)と第 10 層(オリーブ灰色砂質土)である。わずかであるが、土師器片や瓦器片が出土している。

溝 S D 209 島畑 7 の上面で検出した南北方向の溝である。切り合い関係から溝 S D 208 に先行する。溝の規模は、幅 1.1～1.4m、深さ 0.04～0.2m、検出長 32m を測る。埋土は第 8 層(灰色砂質土・黄褐色土若干混入)と第 12 層(灰色砂質土)である。細片化した土師器・瓦器が少量出土した。

溝 S D 210 島畑 9 の上面で検出した耕作溝である。幅 0.6m、深さ 0.3m、検出長 6.5m を測る。遺物は出土しなかった。

自然流路 NR 211 水田 S N 07 の下層で検出した。調査地内に延びず、東壁面の断ち割り沿いにも確認できた。埋土は第 29 層(明オリーブ灰色粘砂)と第 30 層(明青灰色砂質土)である。有機物が若干混じる。深さは 0.6m を測る。出土遺物がなく時期は不明である。(岡崎研一)

(4) E 地区(第 21～23 図)

E 地区は、調査対象地の東南端にあたる。周辺の現状の水田畦畔は南北方向である。復原条里によると、久世郡条里五条二里十五坪にあたる。

調査の結果、島畑 10～12 の 3 基と島畑間の水田 S N 08～10 の 3 か所、島畑上で耕作に伴う溝 11 条・土坑 1 基・柱穴 1 基などを検出した。また、調査地南壁断面の観察により、長期間にわたっての島畑の構築状況を知ることができた。

①基本層序(第 22 図)

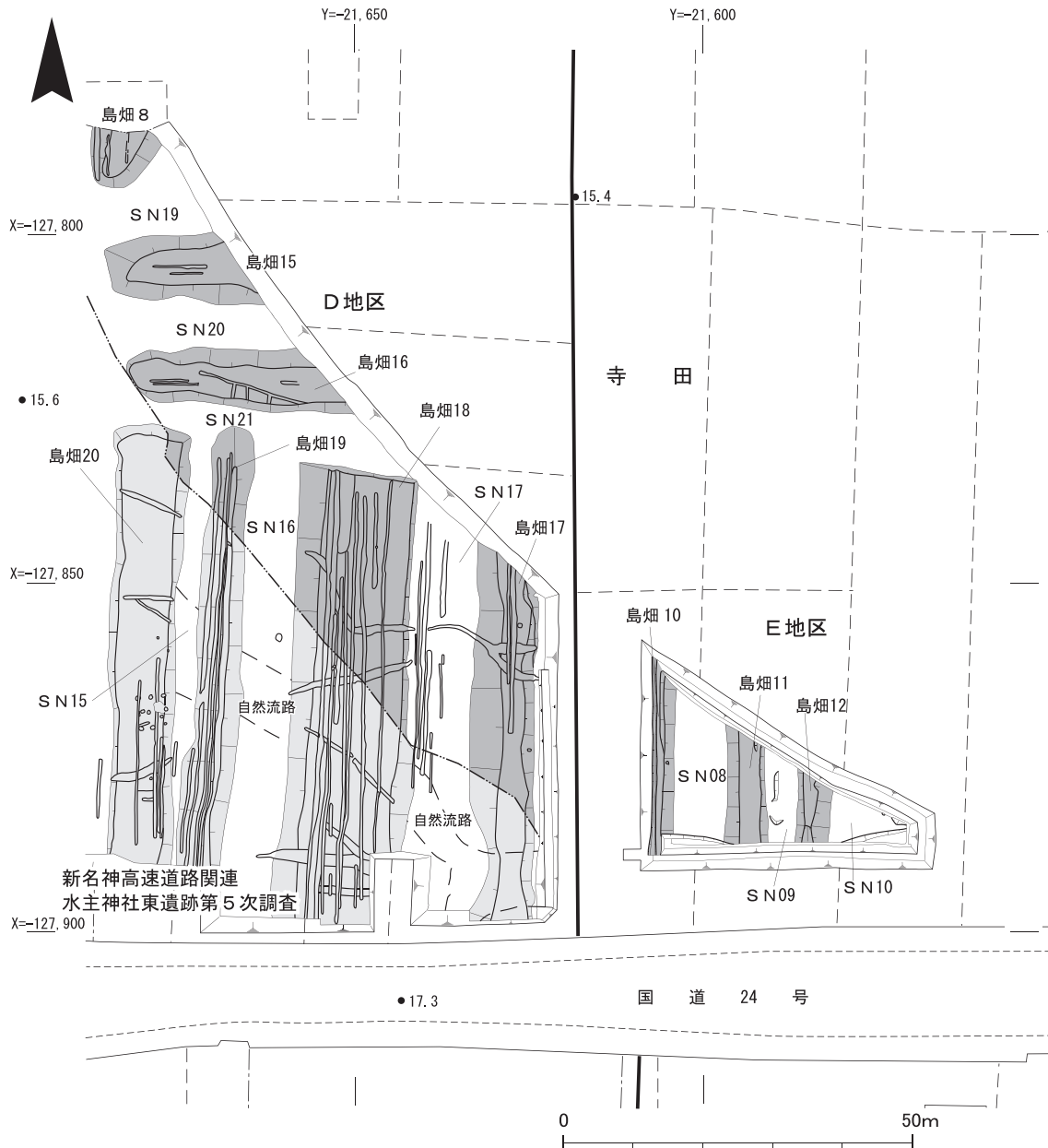
第 22 図は南壁断面の土層図である。現地表の水田面を含めて、7 面の水田・島畑を確認した。

現水田面の標高は約 15.4m を測る(第 1 面)。この面から 20～30cm 下には、調査地全面で灰色砂(第 4 層)と灰白色砂(第 6 層)が堆積している。これらの層は、木津川の洪水によるもので、近年の水害としては、昭和 24 年(ヘスター台風)、昭和 34 年(伊勢湾台風)の被害が甚大で、第 4・6 層はこの時期に堆積した可能性が高い。この時期の標高は約 15.2m である(第 2 面)。

洪水砂第 6 層直下の第 8 層(灰色粘質土)は旧水田耕作土と判断される。この層は平坦で、島畑の盛り上がりは認められない。全面が水田として利用されていたと判断される。調査地近辺は、明治 20 年には全面が水田として利用されていたのに対して、明治 41 年には部分的に島畑が存在する(第 42 図)。このことから、第 8 層は明治 20 年頃の水田と判断する(第 3 面)。

第 8 層の直下で、島畑と水田を確認した。島畑の耕作土・盛土は第 9 層(にぶい黄色土)と第 13 層(緑灰色土やや砂質)で部分的に残っている。水田面は第 14・20 層(灰色砂質土)である。この時期の標高は、島畑部が約 15.1m、水田部は約 14.6m を測る(第 4 面)。

第 4 面の島畑・水田の下層で島畑 4 基と水田部 4 か所を部分的に検出した。島畑部は、第 25・



第21図 D・E地区遺構配置図

29層(青灰色粘土やや砂質)、第28層(緑灰色土やや砂質)、第27層(青灰色土やや砂質)と第31層(青灰色砂土)である。第32層(灰色土やや砂質)、第33層(緑灰色土やや砂質)、第35層(青灰色砂質土)は、島畑基部の斜面に貼り付けた整地土である。水田部は、第21層(灰色砂質土)、第26層(青灰色砂質土)、第17層(青灰色細砂)、第18層(緑灰色土)からなる。この時期の標高は、島畑部が約15.0m、水田部が約14.4mを測る(第5面)。

第6面では、島畑3基と水田部4か所を検出した。西側の島畑の上面については、第27層(青灰色土・やや砂質)が想定されるが、肉眼による分層が困難であり、島畑上部の盛り上がり記録できていない。島畑部は、第28層(緑灰色土・やや砂質)である。第29層(青灰色土・やや砂質)と第38層(青灰色粘質土)は、島畑基部斜面に貼り付けた土で、島畑の盛土の一部と判断できる。水田部は、第60層(灰色土)、第34層(青灰色砂質土)、第36層(青灰色砂)、第19層(明オリーブ灰

色粘砂)からなる。この時期の標高は、島畑部が約14.9m、水田部が14.2mを測る。

第 6 面の島畑に部分的に削平される形で、この調査地で最も古い島畑を確認し、面的に調査を実施した(第 7 面)。検出した島畑は、西から島畑10、島畑11、島畑12の 3 基である。水田部は 3 か所で検出しており、西から S N08～10である。標高は、島畑部が約14.6m、水田部が14.0mを測る。詳細は、検出遺構に記した。また、島畑12の東側には島畑が認められず、第56層(オリーブ灰色砂)以下第70層(灰色砂)～第72層(暗褐色砂)が堆積しており、自然流路 N R 410の東側であると思われた。

以上のように、南壁を詳細に観察した結果、現在を第 1 面として第 7 面までの田畑を検出した。その内、最も古い第 7 面の島畑を踏襲する形で、第 6 面から第 4 面の島畑を確認した。第 7 面の島畑は、出土遺物から13世紀後半と判断され、その後、19世紀末までの 3 時期の島畑を確認したこととなる。詳細な時期については、出土遺物が細片で微量であるため不明である。史料によると、この地域は18世紀前半と19世紀中頃に大きな災害が集中することから、これが原因で島畑を改変・修復している可能性が高い。

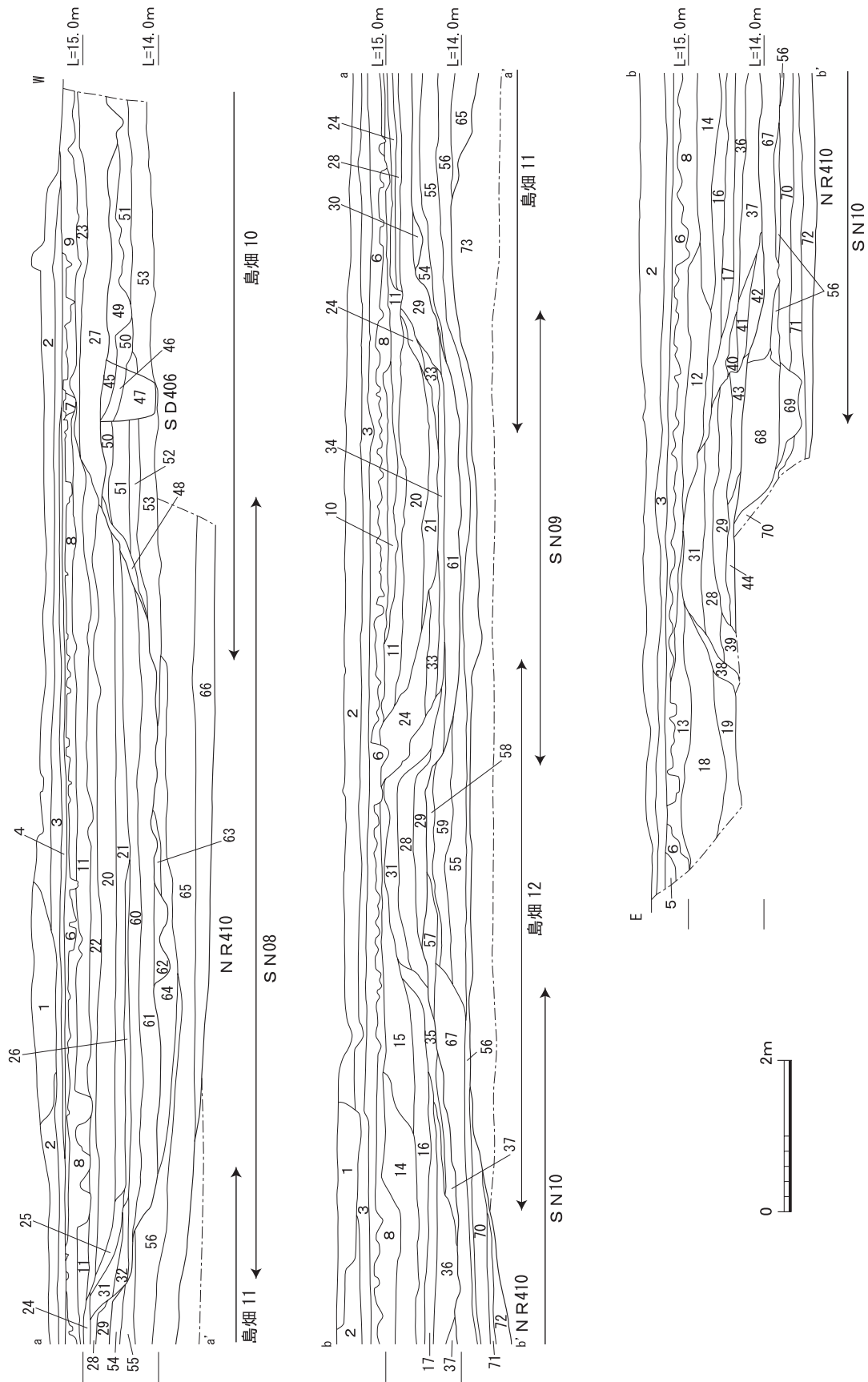
部分的にサブトレンチを設定して島畑以前の遺構の検出に努めたが、遺構は存在しなかった。島畑以前のものとして、自然流路を確認した。自然流路は、第73層(黄褐色土混じり灰色土・やや砂質)を掘り込む形で検出した。

②**検出遺構**(第23図) 今回の調査で検出した遺構は、島畑10～12の 3 基と島畑間の水田 S N08～10、溝 S D 406・柱穴 2 基(S P 407・408)である。その他、自然流路 N R 410と窪地 S X 409を検出した。

島畑10 調査地西壁沿いに検出した、南北方向の島畑である。幅 3 m、検出長約28mを測る。南端で西方に設定したサブトレンチの土層観察から、島畑の幅は5.4m以上であることがわかった。島畑東肩部より西方約1.4m付近で南北方向の溝 S D 406を検出した。この島畑東斜面は、第 48層(青灰色砂質土)を貼り付け成形している。上面に堆積している第49層(青灰色土やや砂質)や第50層(青灰色土やや砂質)を盛土もしくは耕作土と判断する。

島畑11 調査地中央付近で検出した南北方向の幅の狭い島畑である。その規模は、幅 6 m、検出長17mを測る。島畑上では、耕作に伴う溝を検出できていない。第55層(青灰色土やや粘質)をベースとして第54層(青灰色粘土)を盛り上げて築いている。

島畑12 調査地中央付近で検出した南北方向の幅の狭い島畑である。その規模は、幅 5 m、検出長10.6mを測る。島畑上面はほぼ平坦であるが、南辺付近で島畑上面が南に下がる傾斜変換点を認めたことから、島畑の南辺がこの南側に位置するものと推定される。この推定は、調査地外の南側に復原条里の坪境が想定されることに合致する。また、島畑11・12はともに細長い島畑であり、単体では畑として狭すぎるものである。しかし、南壁断面を観察すると、第 7 面の島畑・水田を踏襲して新しい段階の島畑・水田が築かれている。土層を観察する限り、島畑上の平面の幅は、島畑11は 3 m、島畑12は 1～2.2mであり、造成当初からさほど大きなものではなかったようである。



第22図 E地区南壁断面図

E 地区南壁断面土色

- | | | |
|---|--------------------------|---|
| 1. にぶい黄橙〈10YR 7/3〉色土(盛土・
礫混入) | 25. 青灰〈10BG 5/1〉色土(やや砂質) | 51. 青灰〈10BG 5/1〉色土(やや粘質) |
| 2. 黄灰〈2.5Y 4/1〉色砂質土(耕土) | 26. 青灰〈10BG 6/1〉色砂質土 | 52. 青灰〈5BG 5/1〉色土(やや粘質) |
| 3. 灰〈7.5Y 4/1〉色砂土 | 27. 青灰〈10BG 5/1〉色土(やや砂質) | 53. 青灰〈10BG 6/1〉色砂土 |
| 4. 灰〈10Y 5/1〉色砂 | 28. 緑灰〈10G 6/1〉色土(やや砂質) | 54. 青灰〈10BG 5/1〉色粘土 |
| 5. 灰白〈N 7/〉色粘土 | 29. 青灰〈10BG 5/1〉色土(やや砂質) | 55. 青灰〈5BG 5/1〉色土(やや粘質) |
| 6. 灰白〈7.5Y 7/1〉色砂(洪水砂) | 30. 青灰〈10BG 5/1〉色粘質土 | 56. オリーブ灰〈2.5GY 6/1〉色砂 |
| 7. 灰オリーブ〈5Y 4/2〉色砂質土 | 31. 灰〈N 5/〉色砂土 | 57. 青灰〈10BG 5/1〉色粘土 |
| 8. 灰〈N 5/〉色粘質土 | 32. 灰〈N 5/〉色土(やや砂質) | 58. 灰〈N 6/〉色土(やや粘質) |
| 9. にぶい黄〈2.5Y 6/4〉色土 | 33. 緑灰〈10G 6/1〉色土(やや砂質) | 59. にぶい黄〈2.5Y 6/4〉色土 |
| 10. オリーブ〈5Y 5/4〉色土(やや砂質) | 34. 青灰〈10BG 6/1〉色砂質土 | 60. 灰〈N 6/〉色土 |
| 11. 青灰〈10BG 5/1〉色粘質土 | 35. 青灰〈10BG 6/1〉色砂質土 | 61. 灰〈N 4/〉色土 |
| 12. 灰オリーブ〈5Y 5/2〉色砂土 | 36. 青灰〈10BG 6/1〉色砂 | 62. 灰〈N 4/〉色粘質土 |
| 13. 緑灰〈10GY 5/1〉色土(やや砂質) | 37. オリーブ灰〈2.5GY 6/1〉色砂 | 63. 青灰〈10BG 6/1〉色砂土 |
| 14. 灰〈N 4/〉色砂質土 | 38. 青灰〈10BG 5/1〉色粘質土 | 64. 青灰〈10BG 6/1〉色砂 |
| 15. 緑灰〈10GY 5/1〉色土 | 39. 青灰〈5B 5/1〉色粘質土 | 65. 明青灰〈10BG 7/1〉色砂 |
| 16. 緑灰〈10G 6/1〉色土(やや砂質) | 40. 灰〈N 5/〉色粘質土 | 66. 暗灰〈N 3/〉色土(やや粘質・有
機物含む) |
| 17. 青灰〈10BG 6/1〉色細砂 | 41. 灰〈N 6/〉色粘質土 | 67. 灰〈N 6/〉色砂土 |
| 18. 緑灰〈10GY 6/1〉色土 | 42. 灰〈N 5/〉色粘質土 | 68. 灰〈N 5/〉色粘土 |
| 19. 明オリーブ灰〈5GY 7/1〉色粘砂 | 43. 灰〈N 4/〉色粘土 | 69. 灰〈N 5/〉色粘砂 |
| 20. 灰〈N 4/〉色砂質土 | 44. 青灰〈5BG 6/1〉色土 | 70. 灰〈N 6/〉色砂 |
| 21. 灰〈N 5/〉色砂質土 | 45. 青灰〈5BG 5/1〉色土(やや砂質) | 71. 灰白〈N 7/〉色砂 |
| 22. オリーブ褐〈2.5Y 4/3〉色土
混じり灰〈N 4/〉色砂質土 | 46. 青灰〈5BG 5/1〉色土(やや粘質) | 72. 暗褐〈10YR 3/3〉色砂(有機質・自
然木含む) |
| 23. 緑〈10GY 5/1〉灰色土(やや砂質) | 47. 緑灰〈5G 5/1〉色粘土 | 73. 黄褐〈2.5Y 5/4〉色土混じり
灰〈10Y 5/1〉色土(やや砂質) |
| 24. 緑〈10GY 5/1〉灰色土 | 48. 青灰〈5BG 6/1〉色砂質土 | |
| | 49. 青灰〈5BG 5/1〉色土(やや砂質) | |
| | 50. 青灰〈10BG 6/1〉色土(やや砂質) | |

水田 S N08 島畑10・11間の水田である。裾の間の幅7.5m、上端幅11m、検出長23m、島畑10上面からの深さは約0.8mを測る。埋土は第60層(灰色土)・第61層(灰色土)・第62層(灰色粘質土)である。第61層からは、わずかに土師器片や瓦器片が出土した。第21・26層は、第5面の水田の埋土である。

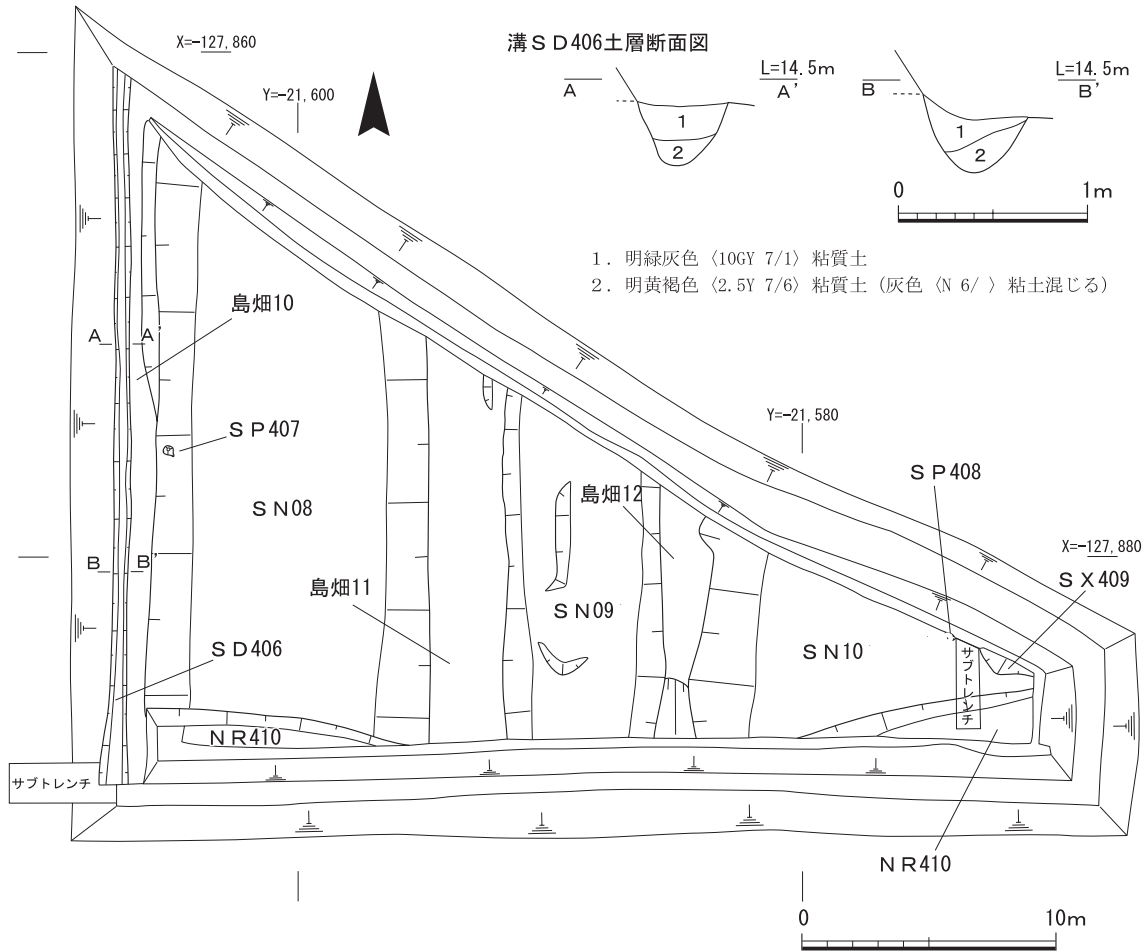
水田 S N09 島畑11・12間の水田である。裾と裾との幅が4.7m、上端幅6m、検出長14mである。深さは、第7面の島畑11上面からは0.6m、第7面の島畑12上面からは0.4mを測る。埋土は、下から第61・34・20・21層である。瓦器椀・須恵器杯・瓦質土器浅鉢の破片が出土した。

水田 S N10 調査区の東端、島畑12の東側で検出した水田である。裾の間の幅11m以上、上端幅12m以上、検出長7.5mで、第7面の島畑12上面からは0.4mを測る。埋土は、下から第67・37・36・17・16・14層である。遺物は出土しなかった。

溝 S D406 島畑10上面の東辺に沿ってに設けられた南北方向の溝である。規模は、幅0.5～0.8m、検出長約28m、深さ0.3～0.8mを測る。溝底は、わずかであるが北から南に傾斜する。埋土は、溝の北半部が上位から明緑灰色粘質土、明黄褐色粘質土(灰色粘土混じる)である。南壁側での埋土は、第45層(青灰色土やや砂質)、第46層(青灰色土やや粘質)と第47層(緑灰色粘土)である。溝の北側の下層の明黄褐色粘質土(灰色粘土混じる)から、13世紀代の瓦器椀底部(第40図101)が出土した。

ピット S P407・408 島畑10の東斜面と水田 S N10北端中央部の2か所でピットを検出した。埋土は灰色粘土で、ともに、径約0.2m、深さ約0.1mである。建物等に伴うものとはいえない。

窪地 S X409 水田 S N10の北東隅で検出した窪地である。検出長2.2m、検出幅0.7mの範囲で、北東側に約0.3m落ち込んでいる。埋土は灰白色砂・緑灰色土で、遺物は出土しなかった。



自然流路NR410 調査地の南西部と南東部の2か所で、自然流路の肩を確認した。それぞれ幅2m、長さ10mを測る。埋土は有機物や自然木を含む第66層(暗灰色土)や第72層(暗褐色砂)である。調査区の南辺付近を東西方向に走る自然流路と判断される。この自然流路はE地区西側に延び、D地区島畑17南端にあたる水主神社東遺跡第5次調査区でも確認している。

(岡崎研一)

5. 平成25年度調査

1) 下水主遺跡第3次

A北地区(第24~27図)

城陽市寺田今橋に所在する。調査対象地最北端に位置し、調査前は資材置き場として使用されていた。国道24号からの出入りをするために、水田面に約1.3mのコンクリート擁壁を設置し、盛土がなされていた。調査地付近の標高は15.3mで、周辺には東西方向の畦畔が認められる。調査地の東側には、東西44m、南北10m、高さ0.3~0.4mの島畑が現存する。復原条里によると、久世郡条里五条二里三十三坪にあたる。

調査は、平成24年度中に資材置き場使用時の盛土を除去して、旧水田面までの掘削を行った。

平成25年度には、コンクリート擁壁の除去をした後、重機により遺構面直上近くまでの掘削を行い、以後、人力による掘削および精査を行った。

調査の結果、東西方向に延びる島畑の東端部分を2か所で検出した。

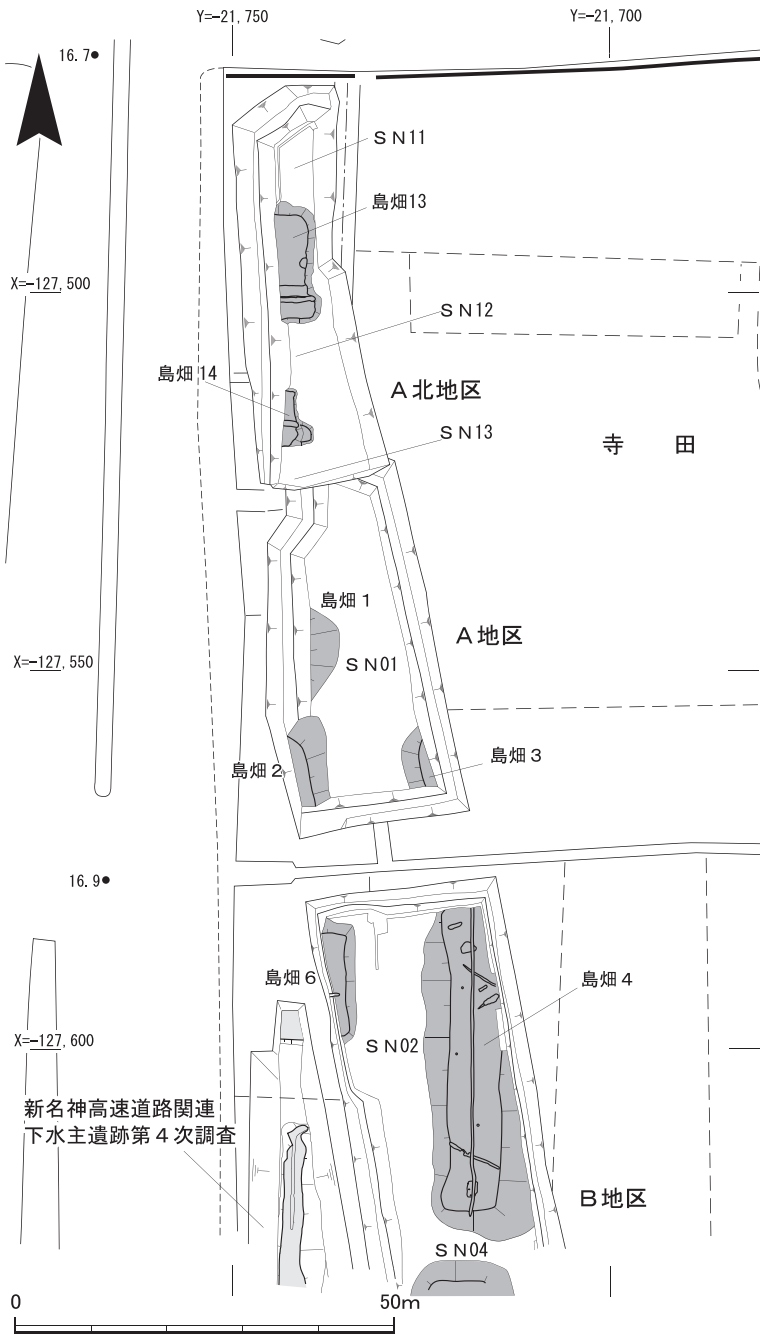
①基本層序(第25図)

トレンチ西壁の土層堆積状況は、第1～4層が現代の攪乱・盛土である。明治41年には調査地近辺に南北方向の島畑が認められる(第42図)が、土層の観察では、その層序の堆積は認められなかった。

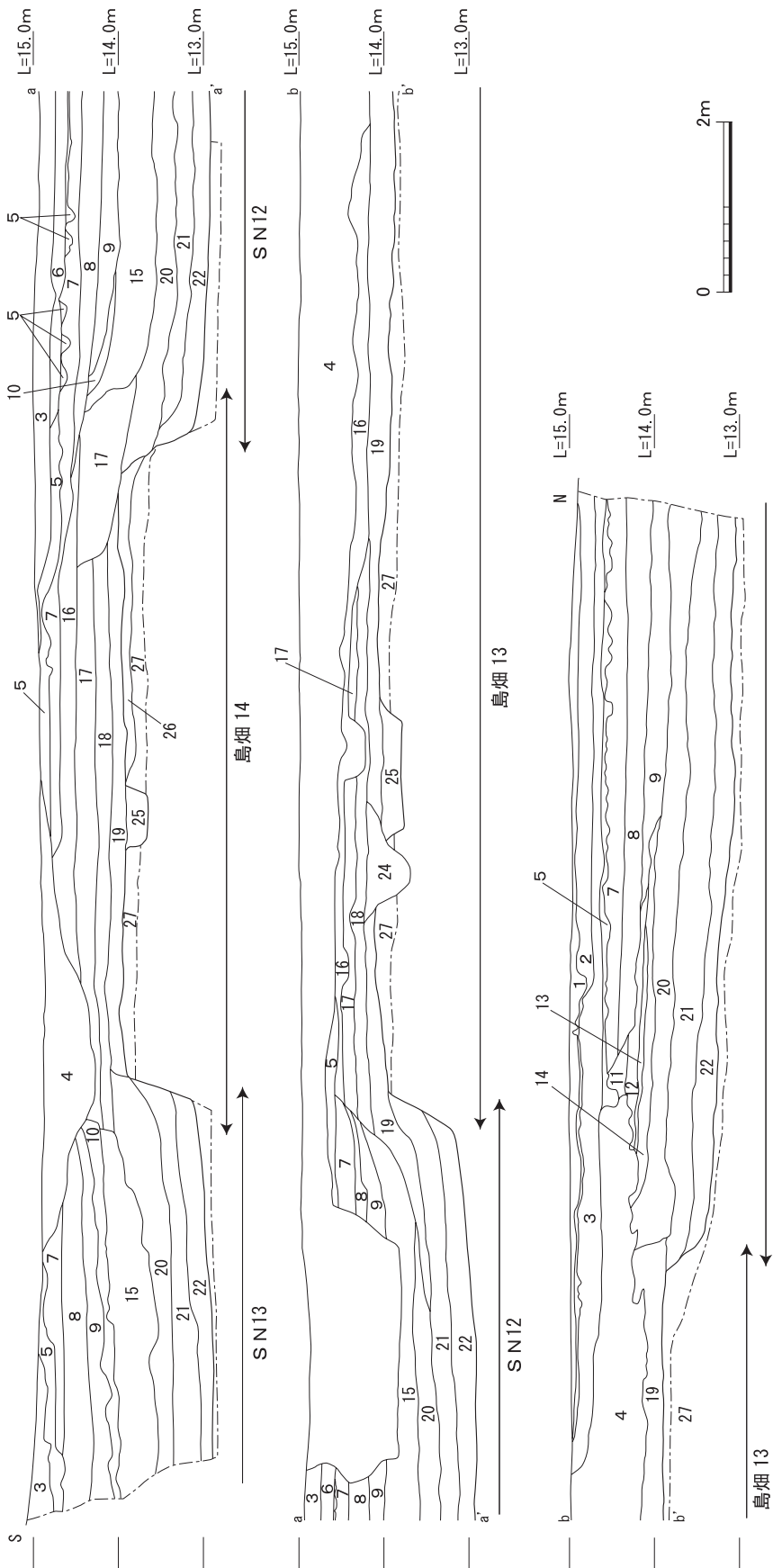
第27層(黄灰色粘質微砂)は遺構・包含層が形成される基盤層である。この基盤層が島畑13・14の位置に台形状に認められるため、島畑を造る際に周囲を削ったことがわかる。島畑本体の上には第16～19層がほぼ水平に堆積しており、島畑に伴う耕作土もしくは整地・盛土と判断する。

島畑上の盛土である灰色細砂(第19層)は水田耕作土(第21層)の上ののっていることから、島畑13本体を北・南に拡張した際の盛土と考えられる。第18・17層の時点では、耕作土・盛土の範囲が狭くなることから、島畑の規模が縮小し、逆に水田部分が拡張されたものと推測される。第16層が盛土された時点では、島畑の規模は当初の大きさに戻されたものと判断できる。

島畑と島畑の間の窪地部分は水田として利用されたものと推定できる。水田内の耕作土・盛土は、下から明黄褐色中粒砂(第22層)、灰色砂(第21層)が堆積し、この上に上述の島畑改変がなされている。その後水田内の堆積土である灰色粘質砂(第20層)、灰色粘質砂(第15層)、灰色中粒砂(第9層)～黄灰色粗砂(第7層)が堆積する。第5層より上の層序は、近世以降の島畑を破壊し、



第24図 A・A北地区遺構配置図



- 1~4. 現代攪乱・盛土
- 5. 黄褐色 (10YR 7/8) と 灰白色 (10YR 7/1) の洪水砂
- 6. 褐灰色 (10YR 5/1) 粗砂
- 7. 黄灰色 (2.5Y 4/1) 粗砂
- 8. 灰色 (5Y 4/1) 粗砂
- 9. 灰色 (5Y 4/1) 中粒砂
- 10. 明黄褐色 (2.5Y 6/6) 砂 (灰色 (5Y 5/1) 粘質土混じる)
- 11. 灰色 (5Y 5/1) 粘質砂
- 12. 灰白色 (2.5Y 7/1) 砂
- 13. 灰色 (7.5Y 4/1) 粘質砂
- 14. 灰色 (N 4/) 粘質土
- 15. 灰色 (5Y 5/1) 粘質砂
- 16. 灰オリーブ色 (7.5Y 5/2) 粘質砂
- 17. 灰色 (10Y 5/1) 粘質土
- 18. 灰色 (10Y 5/1) 砂質土
- 19. 灰色 (10Y 4/1) 細砂
- 20. 灰色 (N 4/) 粘質砂
- 21. 灰色 (NY 4/1) 砂
- 22. 明黄褐色 (2.5Y 6/6) 中粒砂
- 24. 黄灰色 (2.5Y 6/1) 粘質土
- 25. 暗灰色 (N 3/) 粘質砂
- 26. 灰色 (5Y 4/1) 微砂
- 27. 黄灰色 (2.5Y 5/1) 粘質微砂に 黄褐色 (10YR 5/8) 酸化鉄分が混じる

第25図 A北地区西壁断面図

水田に改変した面となる。

②検出遺構 (第 26 図)

島畑 13 第 27 層を削り出して、東西方向に島畑の基部を形成している。検出長 5 m、幅 16 m、高さ 0.9 m を測る。東辺が攪乱により削平を受けて、ややいびつになっている。島畑上では、中央部より南で東西方向の溝 S D 06・07、中央部東端で土坑 S K 09 を検出した。裾部の傾斜は、土層で見ると、鉛直方向から約 20° と急角度である。

島畑 14 第 27 層を削り出し、東西方向の島畑基部を形成している。検出長 4.2 m、幅 7.9 m、高さ 0.4 m を測る。東辺は攪乱 (第 4 層) により大きく削平を受ける。島畑中央部で溝 S D 08 を検出した。

水田 S N 11 島畑 13 の北側で検出した。北端は坪境に位置している。底面より島畑 13 の削り出し面までの高さ 0.9 m を測る。南北 16 m、東西 5.5 m である。土師器・瓦器片が少量出土した。

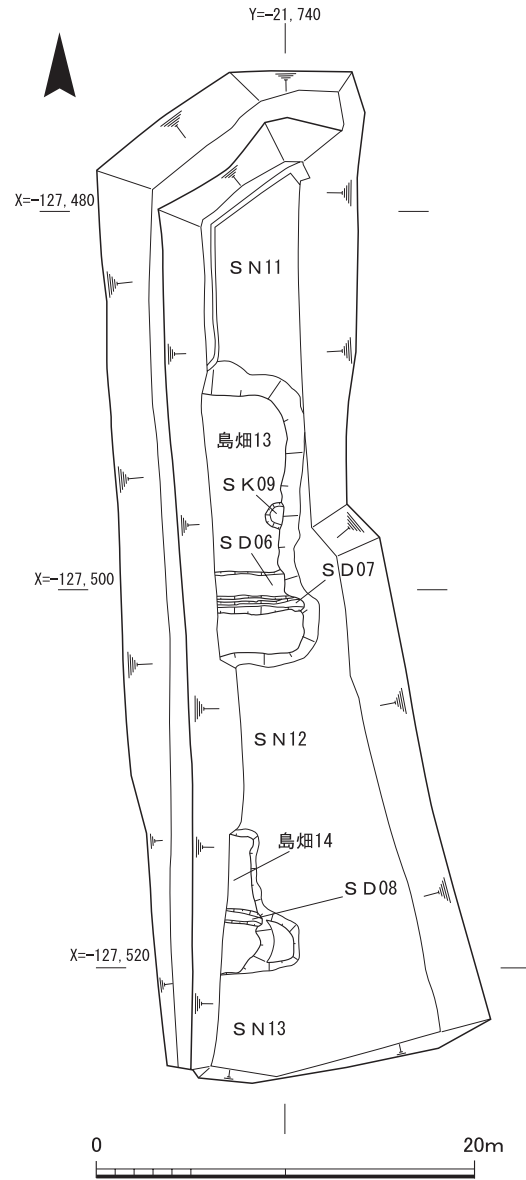
水田 S N 12 島畑 13 と島畑 14 の間の水田である。島畑 13・14 間の下端での幅 8.6 m、上端での幅 9.6 m、高さ 0.9 m である。東西長 5.5 m である。北東側より、瓦器椀 (第 36 図 2)、土師器羽釜 (第 36 図 4) とともに土師器小片が出土した。

水田 S N 13 調査区の南端で検出した。A 地区の島畑 1 との間は 20 m である。土層の観察では、この間に島畑が存在する土層は認められない。島畑 14 の削り出し面までの高さ 0.9 m、東西長 4.2 m を確認した。第 10 層より天目椀 (第 36 図 5)・土師器小片が出土した。

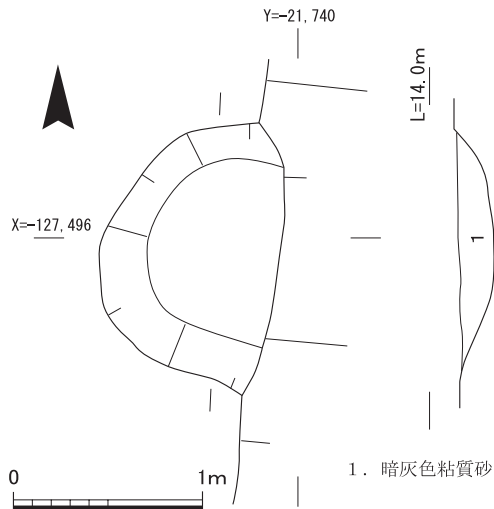
溝 S D 06 島畑 13 の上面で検出した東西方向の溝で、溝 S D 07 に先行する。島畑直上で検出し、島畑を最初に造成した段階の溝である。幅 1.7 m、検出長 4 m、深さ 0.24 m を測る。断面は逆台形状を呈し、埋土は第 25 層である。遺物は出土しなかった。

溝 S D 07 島畑 13 の上面で検出した東西方向の溝で、幅 1.4 m、検出長 9 m、深さ 0.55 m を測る。盛土の第 19 層より掘り込まれている。埋土は第 24 層である。断面は、中位より下方は「U」字状を呈し、上方は大きく外に広がる。遺物は出土しなかった。S D 06・07 とともに島畑を貫通する溝と考えられる。瓦器椀 (第 36 図 3) が出土した。

溝 S D 08 島畑 14 の中央付近で検出した東西方向の溝である。断面逆台形を呈し、島畑直上で検出した。幅 0.7 m、検出長 2 m、深さ 0.24 m を測る。埋土は第 25 層である。細片化した土師器



第 26 図 A 北地区平面図



第27図 A北地区土坑S K09実測図

が少量出土した。島畑を貫通する溝と考えられる。土坑S K09(第27図) 平面形は楕円形状を呈し、東側は攪乱により削平されている。検出長約1m、検出幅約1.4m、深さ0.2mを測る。遺物は細片化した土師器が少量出土した。

③小結

溝S D06・07・08とも島畑の長辺に平行し、短辺側端部手前で終わらずに突きぬけた状況で検出した。水路の可能性はあるが、水の流れた痕跡は確認できなかった。島畑上の排水路の可能性も考えられるが、短辺側が攪乱で削平を受けているため断定は

できない。

島畑が造成された時期は、島畑14より出土した瓦器碗の年代観より、13世紀後半頃と考えられる。島畑13・14は同様の堆積をなしていることから、同時期に造成され、改変を受けたものと考えられる。改変された時期については明確でないが、明治時代に地租改正がなされた時点では水田の中に畑が存在するという登記がなされていないため、明治以前にはすでに水田化していたものと推定される。(増田孝彦)

2)水主神社東遺跡第4次

D地区(第28～35図)

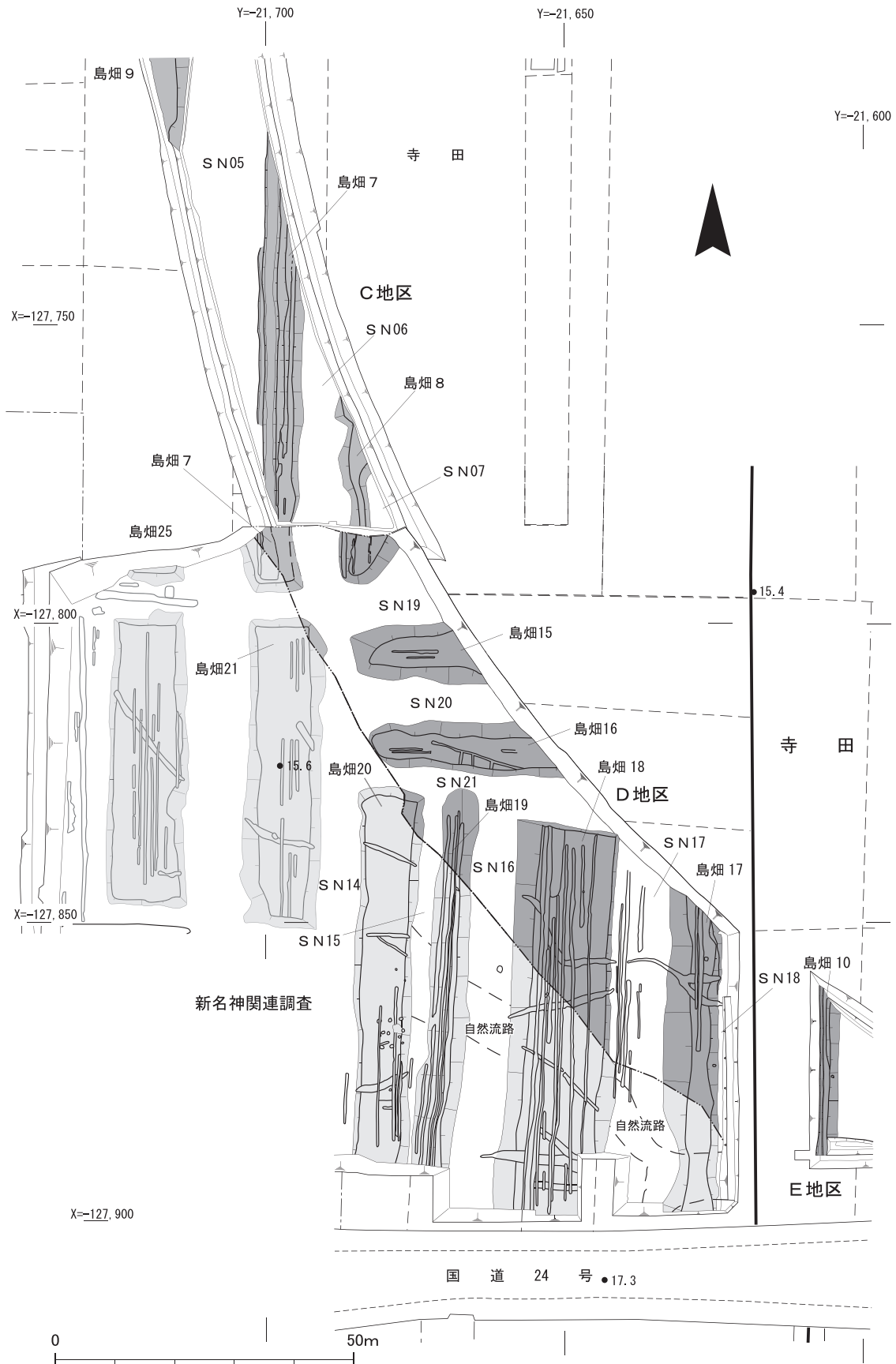
城陽市寺田金尾に所在する。復原条里によると、久世郡条里五条二里十六坪にあたり、北側のC地区、東側のE地区とはそれぞれ坪境に位置する。C地区との坪境は畦畔、E地区との間は南北方向の用水路となっている。現在の田畑の畦畔を見ると、D地区の北半部は東西方向、南半部は南北の区割りとなっている。調査地の標高は15.7mで、A北～E地区の中で最も高い位置にあたる。

調査の結果、現代の畦畔に沿う形で、東西方向の島畑2基、南北方向の島畑5基、C地区で検出した島畑7・8の南端部分を検出した。

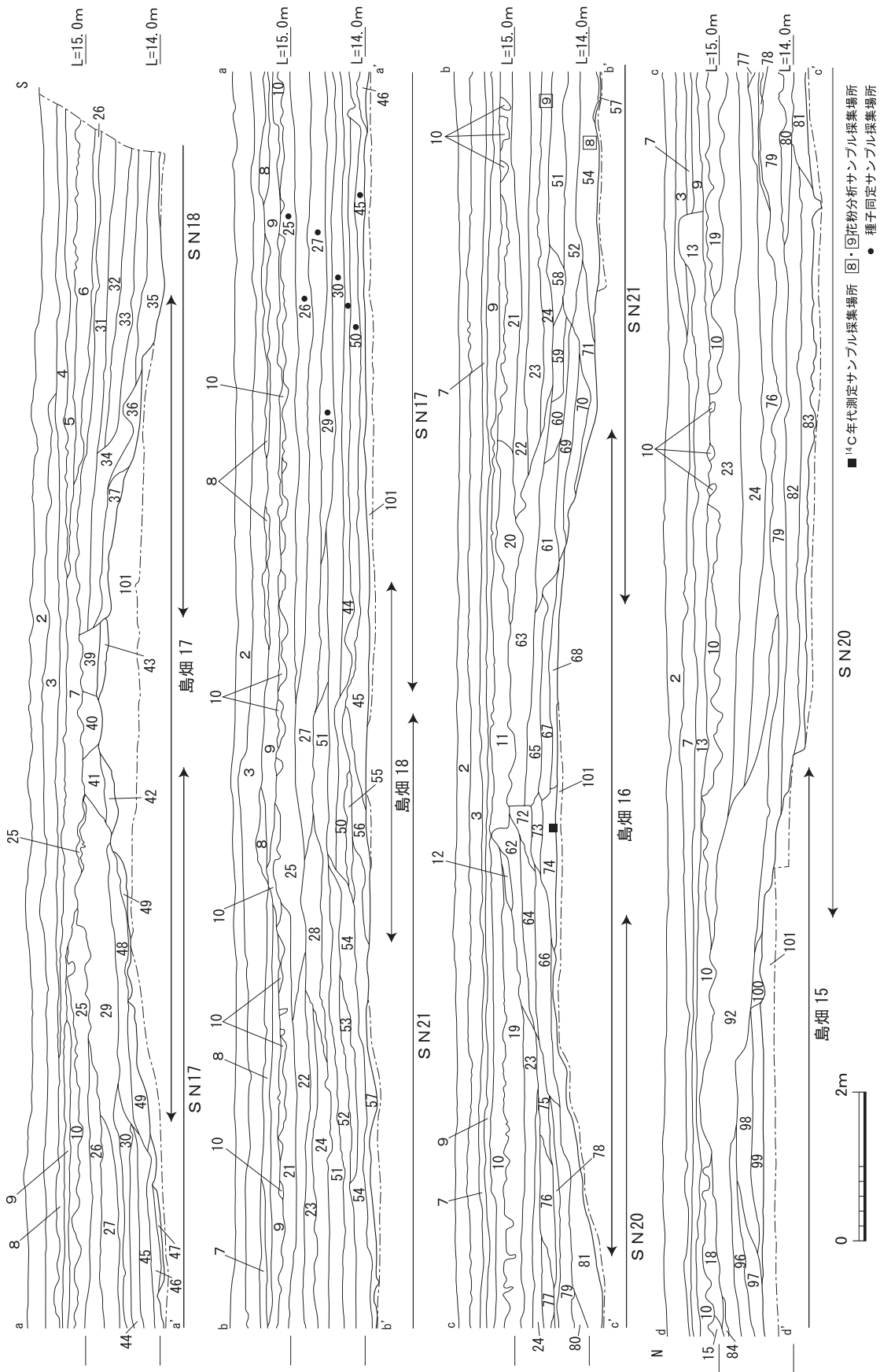
①基本層序(第29・30図)

D地区の層序を調査区北東壁を基準に見ていく。暗青灰色系や暗オリーブ系の粘質土を主体とするそれらの堆積状況は、中世(13世紀後半)から近世にいたる島畑の形成・改変の状況を示している。大きく隆起している部分が島畑で、その島畑と島畑の間は、水田・水路・条里の坪境などの機能が考えられる。

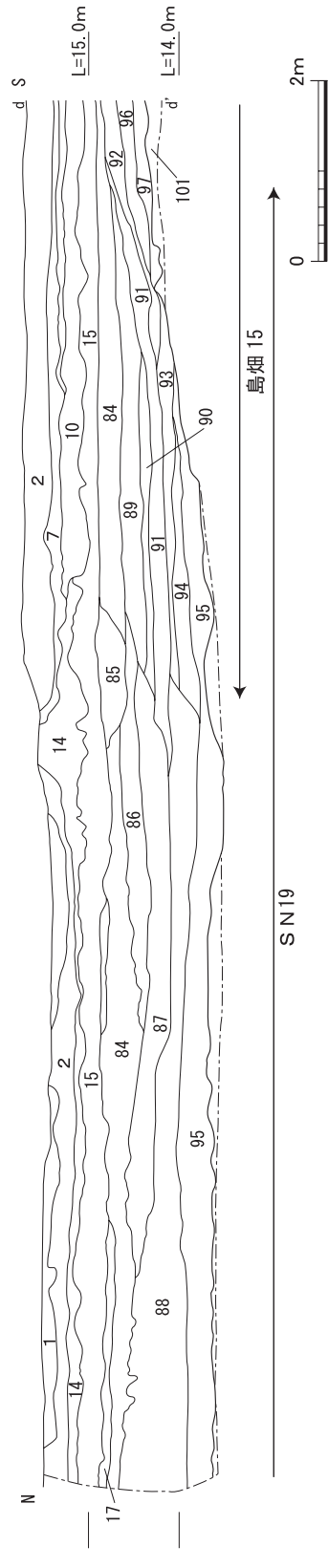
上層には、近・現代の攪乱・盛土(第1・2層)や耕土、床土(第6・7・9層)、木津川の洪水堆積物(第3～5・8・10層)がある。標高約15m前後から下位が、近世以前の堆積である。基盤層までの水平な土層堆積状況は、島畑と島畑の間の中間部で見ると、上位から第25層(暗灰黄



第28図 D地区遺構配置図



第29図 D地区北東壁断面図(1)



- | | | | |
|---------------------------------|---------------------------------|----------------------------|---------------------------------|
| 1. 撓乱 黒 (2.5Y 2/1) 色有機質土 | 26. 灰 (7.5Y 4/1) 色極細砂 | 52. 暗オリーブ灰 (5GY 4/1) 色粘質土 | 78. オリーブ黒 (10Y 3/2) 色粘質土 |
| 2. 暗灰黄 (2.5Y 4/2) 色細粒砂混じり土 (盛土) | 27. 灰オリーブ (7.5Y 4/2) 色極細砂 | 53. 暗灰黄 (2.5Y 5/2) 色極細砂質土 | 79. 灰オリーブ (5Y 4/2) 色粘土 |
| 3. 暗灰黄 (2.5Y 4/2) 色粗粒砂混じり粘質土 | 28. 灰 (10Y 4/1) 色極細砂 | 54. 暗オリーブ灰 (2.5Y 4/1) 色粘土 | 80. 灰オリーブ (5Y 4/2) 色粘質土 |
| 4. 黄灰 (2.5Y 4/1) 色砂質土 | 29. 暗オリーブ灰 (2.5GY 4/1) 色粘質土 | 55. 暗緑灰 (7.5Y 4/1) 色粘土 | 81. 灰オリーブ (5Y 4/2) 色粘質土 |
| 5. 褐灰 (10R 4/1) 色粗粒砂混じり砂質土 | 30. オリーブ黒 (7.5Y 3/1) 色シルト (粘質土) | 56. 灰 (5Y 4/1) 色粘土 | 82. 灰オリーブ (5Y 4/2) 色粘質土 |
| 6. 暗灰黄 (2.5Y 4/2) 色極細砂 | 31. 暗オリーブ灰 (2.5Y 4/1) 色極細砂 | 57. オリーブ黒 (7.5Y 3/2) 色粘質土 | 83. 灰オリーブ (7.5Y 4/2) 色粘土 |
| 7. オリーブ黒 (7.5Y 3/2) 色細砂 | 32. 暗オリーブ灰 (5GY 4/1) 色粘質土 | 58. 灰 (7.5Y 4/1) 色粘土 | 84. オリーブ黒 (5Y 3/2) 色極細砂質土 |
| 8. 暗灰黄 (2.5Y 5/2) 色粗粒砂 | 33. 暗オリーブ灰 (2.5GY 4/1) 色粘土 | 59. 灰 (5Y 4/1) 色粘質土 | 85. オリーブ黒 (5Y 3/2) 色粘質土 |
| 9. 暗灰黄 (2.5Y 4/2) 色粗粒砂混じり粘質土 | 34. 暗緑灰 (7.5GY 4/1) 色シルト (粘質土) | 60. 暗緑灰 (10GY 4/1) 色粘土 | 86. 灰 (10Y 4/1) 色粘質土 |
| 10. 暗灰黄 (2.5Y 4/2) 色細粒砂 | 35. 暗オリーブ灰 (5GY 4/1) 色粘質土 | 61. 暗緑灰 (10GY 4/1) 色極細砂質土 | 87. オリーブ黒 (7.5Y 3/2) 色極細砂質土 |
| 11. オリーブ褐 (2.5Y 4/2) 色粘土(含む) | 36. 灰 (5Y 4/1) 色粘質土 | 62. 灰 (7.5Y 4/1) 色極細砂質土 | 88. 暗オリーブ灰 (5GY 4/1) 色粘質土 |
| 12. オリーブ黒 (10Y 3/1) 色粗粒砂 | 37. 灰 (7.5Y 4/1) 色粘質土 | 63. オリーブ灰 (5GY 5/1) 色粘質土 | 89. オリーブ黒 (2.5Y 3/2) 色粘質土 |
| 13. オリーブ褐 (2.5Y 4/3) 色細粒砂 | 38. 暗オリーブ (7.5Y 4/3) 色極細砂 | 64. 灰オリーブ (5Y 4/2) 色粘質土 | 90. オリーブ黒 (10Y 3/2) 色粘質土 |
| 14. 暗灰黄 (2.5Y 4/2) 色細粒砂 | 39. にぶい黄褐 (10R 5/3) 色粘質土 | 65. 暗オリーブ灰 (5GY 4/1) 色粘質土 | 91. 黄灰 (2.5Y 4/1) 色粘質土 |
| 15. オリーブ黒 (5Y 3/2) 色粘質土 | 40. 灰オリーブ (5Y 4/2) 色極細砂 | 66. 暗オリーブ灰 (2.5Y 4/1) 色粘質土 | 92. 灰オリーブ (7.5Y 4/2) 色粘質土 |
| 16. オリーブ黒 (5Y 3/2) 色粘質土 | 41. 黄灰 (2.5Y 4/1) 色極細砂 | 67. 暗オリーブ灰 (5GY 4/1) 色粘質土 | 93. 暗灰黄 (2.5Y 5/2) 色粘質土 |
| 17. オリーブ黒 (7.5Y 3/1) 色粘質土 | 42. 黄灰 (2.5Y 4/1) 色粘質土 | 68. 灰 (7.5Y 4/1) 色粘質土 | 94. 暗オリーブ (5Y 4/4) 色粘質土 |
| 18. 灰 (7.5Y 4/1) 色粘質土 | 43. 黄褐 (2.5Y 5/3) 色粘質土 | 69. 暗青灰 (10B 4/1) 色粘土 | 95. 灰オリーブ (5Y 4/2) 色粘土 |
| 19. 暗灰黄 (2.5Y 4/2) 色極細砂 | 44. オリーブ黒 (7.5Y 3/2) 色シルト (粘質土) | 70. 暗オリーブ灰 (5GY 4/1) 色粘土 | 96. 暗オリーブ灰 (5GY 4/1) 色粘質土 |
| 20. 暗オリーブ灰 (7.5GY 4/1) 色極細砂 | 45. 灰 (10Y 4/1) 色粘質土 (極細砂多く含む) | 71. オリーブ黒 (10Y 3/2) 色粘質土 | 97. 暗灰黄 (2.5Y 5/2) 色粘質土 |
| 21. 灰 (7.5Y 4/1) 色極細砂 | 46. 暗オリーブ灰 (5GY 4/1) 色粘土 | 72. 灰 (10Y 4/1) 色粘質土 | 98. 灰オリーブ (5Y 4/2) 色粘質土 |
| 22. 灰 (7.5Y 4/1) 色極細砂 | 47. 灰 (10Y 4/1) 色粘土 | 73. 黄褐 (2.5Y 5/3) 色粘質土 | 99. オリーブ褐 (2.5Y 4/4) 色粘質土 |
| 23. 暗オリーブ灰 (7.5GY 4/1) 色極細砂 | 48. 灰 (2.5Y 4/1) 色極細砂 | 74. 暗オリーブ (7.5Y 4/3) 色粘質土 | 100. 灰オリーブ (5Y 4/2) 色粘土 |
| 24. 暗オリーブ灰 (5GY 3/1) 色極細砂 | 49. 灰オリーブ (7.5Y 4/2) 色シルト | 75. 灰オリーブ (5Y 4/2) 色粘質土 | 101. 灰オリーブ (7.5Y 5/2 ~ 5/3) 色粘土 |
| 25. 暗灰黄 (2.5Y 4/2) 色極細砂 | 50. オリーブ黒 (7.5Y 3/1) 色シルト (粘質土) | 76. 灰 (5Y 4/1) 色極細砂質土 | |
| | 51. 暗オリーブ灰 (5GY 4/1) 色粘土 | 77. 黄灰 (2.5Y 4/1) 色粘質土 | |

第30図 D地区北東壁断面図(2)

色極細砂)、第26層(灰色極細砂)、第27層(灰オリーブ色極細砂)、第29層(暗オリーブ灰色粘質土)、第30層(オリーブ黒色シルト)、第44層(オリーブ黒色シルト)、第50層(オリーブ黒色シルト)、第45層(灰色粘質土)の順で、暗オリーブ系粘質土の堆積である。

第10層(暗灰黄色細粒砂)までは現代の水田と木津川の洪水砂の堆積であり、各地区でも認められており、甚大な被害をもたらした昭和24・34年の台風によるものと考えられる。第10層の直下、水田S N19・島畑15上の第15層(オリーブ黒色粘質土)、島畑15・16、水田S N20上の第23層(暗オリーブ灰色極細砂)・第19層(暗灰黄色極細砂)、島畑16～18、水田S N21・17上の第20層(暗オリーブ灰色極細砂)・第21層(灰色極細砂)・第25層(暗灰黄色極細砂)、島畑17・水田S N18上のやや層厚が薄く層序がやや不確実であるが第26層(灰色極細砂)はそれ以前の島畑・水田を盛土・整地して水田に改変した土壌と考えられる。明治20年には全面が水田として利用されており(第42図)、この層はこの段階の水田面に相当すると考えられる。

以下、水田S N19の土層で見ると、第84層(オリーブ黒色極細砂質土)は水田化する直前の島畑に伴う水田と考えられ、周辺から出土する遺物から江戸時代と考えられる。

第89・90層(オリーブ黒色粘質土)・第91層(黄灰色粘質土)は島畑15の北側拡張部上の盛土で、第86層(灰色粘質土)・第87層(オリーブ黒色極細砂質土)はそれに伴う水田S N19の埋土と考えられる。島畑周辺から出土する遺物から16世紀～17世紀にかけての水田となる。

第93層(暗灰黄色粘質土)・第94層(暗オリーブ色粘質土)は島畑15の規模を北側に拡大したときの盛土である。当初の規模を北側に4m程度拡幅している。第88層(暗オリーブ灰色粘質土)はそれに伴う水田である。周辺出土遺物から14世紀～15世紀代と考えられる。

第95層(灰オリーブ色粘土)が造成後の水田であり、水主神社東遺跡第5次調査の成果では13世紀後半である。

島畑15は13世紀後半に造成されて19世紀後半頃島畑が壊されて水田化するまで最低3回の改変があったと考えられる。

②検出遺構(第31～35図)

D地区で検出した島畑は、北から島畑7・8・15～21の9基で、島畑15・16は東西に長い島畑であるのに対して、それ以外の7基は南北に長い島畑である。

島畑7 調査区の北西部で検出した南北方向の島畑である。C地区で検出した島畑7の南端部にあたる。調査地内ではほとんどが島畑の斜面にあたっていること、東側斜面の遺存状況が悪いため、高さは不明である。西側に隣接して実施した水主神社東遺跡5次調査では、島畑7の西半を検出しており、高さは0.6mである。C地区で検出した西半部の状況より、裾部と裾部の幅は9m、島畑上の平坦面の幅は6.5～7.5mに復元できる。上面に、溝S D413が南北方向に走る。その溝に切られて、C地区からの溝S D207の南延長部分を検出した。

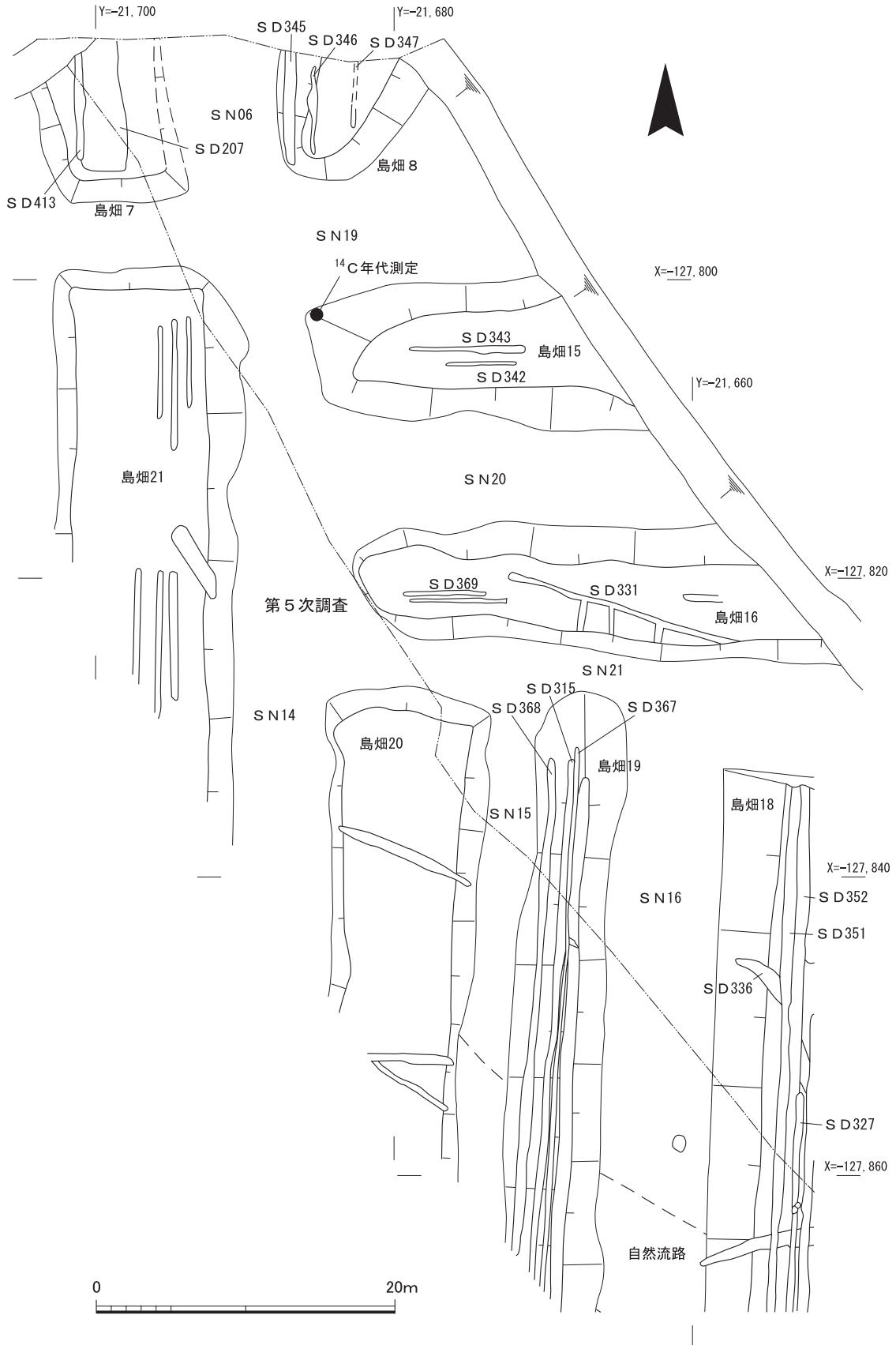
島畑8 調査区の北東隅で検出した島畑である。C地区で検出した島畑8の南端部である。島畑7とは約7mの空間を空けている。島畑の残存高は0.6mで、東側の裾部は緩い傾斜で下っている。裾部の幅は最大で約10m、島畑上面の幅は5mを測る。島畑の上面に溝S D346・347の2

条の溝が、西辺の裾部に溝 S D345が南北に掘られている。島畑 7・8の間にはC地区から続く水田 S N06がある。

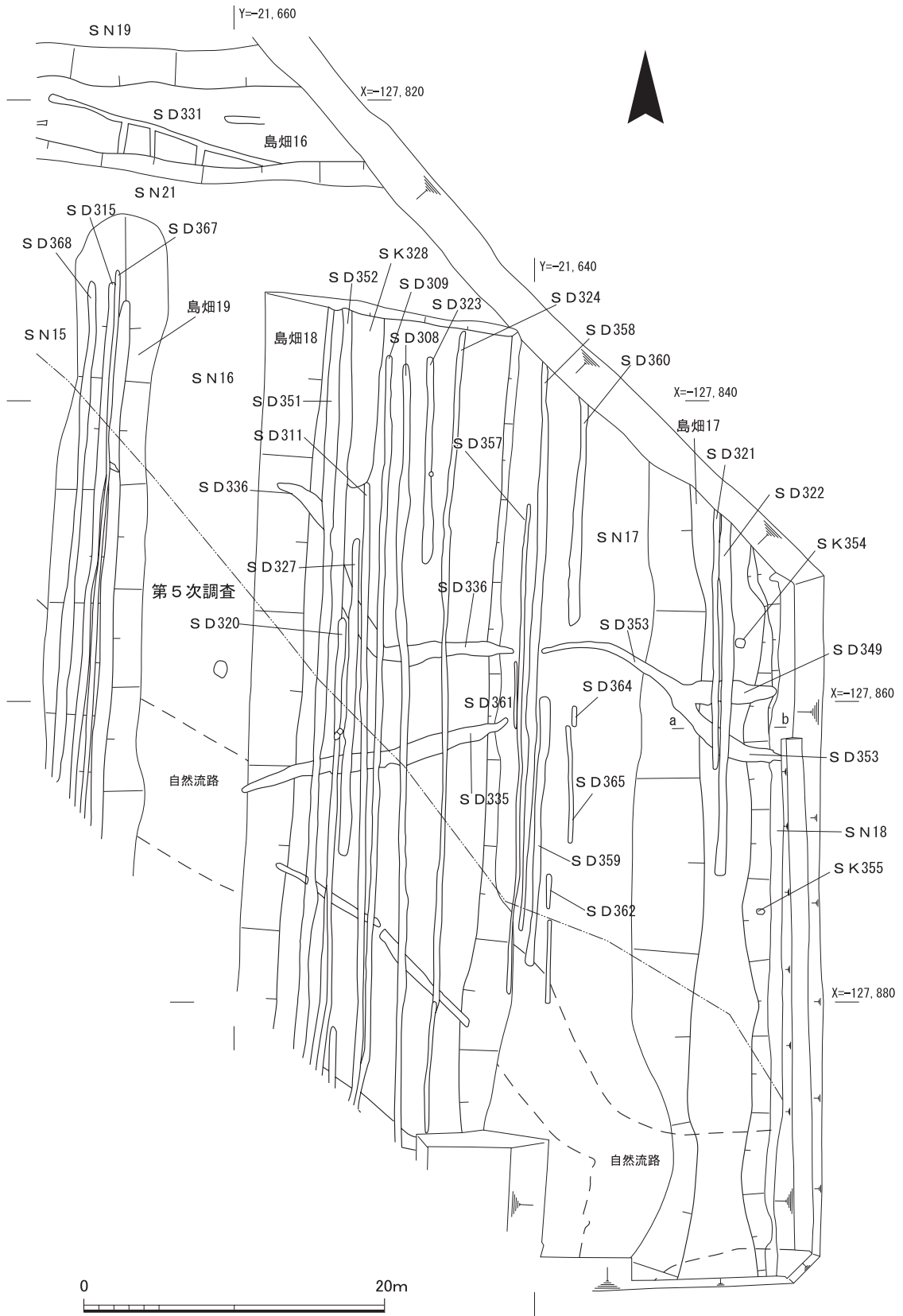
島畑15 島畑 8 から南へ7.5m隔てて造られた東西方向の島畑である。島畑 8 との間には水田 S N19がある。検出長は22mで、裾部での幅10m、上面の平坦部の幅は 6 m、基底部からの高さは0.8mを測る。土層を見ると、第101層(灰オリーブ色粘土)を削り出して造られている。島畑上部には下から第99・98・97・96・92層が盛土され、徐々に嵩上げしてきた状況が観察される。また、時期が下るにつれて、北・南側に拡張した層序が確認できる。北側斜面部では、第89～91層、第93・94層のように、約20cmの厚さで土が3時期に積み上げられたことが観察できる。第93・94層は初期の段階に北側に約4.2m拡張した時の整地土で、その後、その形状が踏襲されたことが窺える。南側斜面部は第92層が盛土として確認できるが、その下に水田 S N20の埋土である第79・82・83層が水平に堆積していることから、ある時点で南側に 2 m程度拡張されたものと判断できる。第92層は島畑15の北側で第93層を覆っていることから、北側の拡幅よりも一段階遅れるようである。島畑東壁の基盤層(第101層)の窪み部分に焼土や木炭片が認められたため、¹⁴C年代測定を実施した。その結果、縄文時代晩期中葉～後葉頃という結果が得られた。島畑の上面で東西方向の溝 S D342・343を検出した。

島畑16 島畑15の南に7.5m隔てて平行に造られた東西方向の島畑である。検出長32mを測り、裾部間の幅 9 m、上面の幅4.5～5 m、高さ0.8mを測る。島畑上には、第62～68・72～74層等が盛土されている。また、島畑周囲には、北・南側に拡張した層序が観察される。北側斜面部では、第75～78層・第81層が、南側斜面では第59～61層・第69～71層が島畑斜面に斜めに堆積する状況が観察できる。南・北側ともに約 2 m程度拡張されたものと判断できる。これらの盛土層は、島畑16の北・南の平坦面に堆積した水平層を間に挟むことから、周囲の水田とともに島畑を嵩上げたことが窺える。島畑の上面で、東西方向の溝 3 条、斜行する溝に南北に取り付く溝群を検出した。瓦器椀(第39図69)が第61層(暗緑灰色粘土)から、縄文土器深鉢(第39図91)が基盤層直上の盛土内から出土した。また、北東壁の基盤層(第101層)の上面で、焼土・炭化物を含む土層を確認した。掘削を行ったところ、平面・底面の形状は不定で、自然の凹地内の堆積と判断した。この炭化物を¹⁴C年代測定したところ、縄文時代晩期後葉から弥生時代の移行期頃との結果を得た。

島畑17(第33図) 調査区の南東隅で検出した南北方向の島畑である。北辺・南辺は調査地外で、島畑の東・西辺を確認した。南側は水主神社東遺跡第5次調査区に延びる。今回の調査では、長さ41mにわたって調査した。裾部の幅 9 m、上部の平坦面の幅は 4 m、島畑の高さは0.8mを測る。島畑は第101層(灰オリーブ色粘土)を削り出して造られている。この島畑本体の周囲には、北側には第29層(暗オリーブ灰色粘質土)・48層(灰色極細砂)・49層(灰オリーブ色シルト)、南側には第34層(暗緑灰色シルト・粘質土)・36層(灰色粘質土)・37層(灰色粘質土)、島畑上には第39層(にぶい黄褐色粘質土)～43層(黄褐色粘質土)が盛られている。最終的に高さ0.2mの盛土がなされている。島畑上の平坦面では、島畑に平行する南北方向の溝 S D321・322、これらの溝に切られる形で、斜行する溝 S D349・353 を検出した。また、平坦面および斜面部で土坑 2 基を検出した。



第31図 D地区平面図(1)



第32図 D地区平面図(2)

島畑の西側で水田S N17、東側で水田S N18を確認した。

島畑18 調査地の南側で検出した南北方向の島畑で、D地区で最大規模のものである。今回の調査では長さ38mを検出した。南側は、水主神社東遺跡第5次調査区に延びており、総長66mとなる。幅は、裾部の幅18m、島畑上の平坦面の幅は12.5mである。検出高は0.4mを測る。東壁の断面に島畑本体はかかっていないが、第45・50・51・55・56層が島畑本体の盛土と判断される。島畑上で、南北方向の溝9条、東西溝2条、土坑1基を検出した。

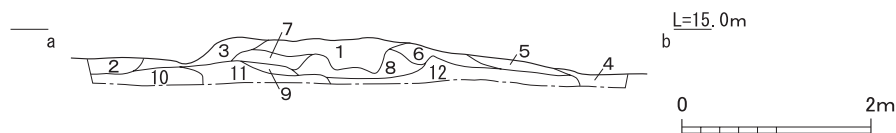
島畑19 島畑18の西側に平行して造られた南北方向の島畑である。北端部が今回の調査地にあたり、南側の大半は、水主神社東遺跡第5次調査区にあたる。今回の調査では、長さ16mにわたって検出したが、全体では63mを確認している。規模は、裾部の幅6m、島畑上面での幅は1.5mである。残存高0.1mである。また、土層の観察では、島畑19は島畑18・20を造成した段階では水田部であったのが、その後島畑として改変されたものと考えられる。西側のS N15は幅が3m程度しかなく、水田としてはやや狭いため、水路として機能していたとも考えられる。同様に、島畑の北端から島畑16裾部までの間は約2mしかなく、水田の水位を制御するような施設があった可能性がある。

島畑20 島畑19の西側に平行する南北方向の島畑である。今回の調査地内では、その北東隅を検出したにすぎないが、水主神社東遺跡第5次調査と一続きで調査をしており、総検出長は63mとなる。

島畑21 島畑7の南側で検出した南北方向の島畑である。水主神社東遺跡第5次調査と一続きで調査をしており、総検出長は63mとなる。今回の調査では北東隅を検出したただけである。北辺は、東側の島畑15の北辺と一致し、西辺は北側の島畑7とほぼ合致する。東辺は島畑7の東辺とほぼ一致する。

水田S N06 島畑7・8の間で検出した。島畑間の削り出し下端幅が7m、上端幅が9m、高さ0.6mを測る。島畑南端までの検出長は10mである。基盤層を削り出した面より上の堆積は、水田耕作土と考えられる暗オリーブ系粘質土を主体とした3層を確認した。細片化した土師器・瓦器が少量出土した。

水田S N14 島畑21の東側の南北方向の水田である。島畑15・21の削り出し下端の幅は5m、上端の幅は10m、下端と上端の比高は0.8mを測る。埋土中から、少量の土師器・瓦器の細片と



- | | |
|--|-------------------------|
| 1. 暗オリーブ〈5Y 4/4〉色粘質土
(黄褐〈10YR 5/6〉色の斑紋多く含む) | 7. 暗灰黄〈2.5Y 5/2〉色粘質土 |
| 2. 灰〈5Y 4/1〉色粘質土 | 8. 黒褐〈2.5Y 3/2〉色粘質土 |
| 3. 灰オリーブ〈7.5Y 5/2〉色粘質土 | 9. オリーブ褐〈2.5Y 4/4〉色粘質土 |
| 4. 灰オリーブ〈7.5Y 4/2〉色極細砂 | 10. 灰オリーブ〈7.5Y 4/2〉色粘質土 |
| 5. 灰黄褐〈10YR 4/2〉色極細砂 | 11. 灰オリーブ〈5Y 4/2〉色粘質土 |
| 6. 灰黄褐〈10YR 5/2〉色粘質土 | 12. 暗灰黄〈2.5Y 4/2〉色極細砂 |

第33図 島畑17断面図

ともに、青磁椀(第39図76)が出土した。

水田 S N 15 島畑19・20の間で検出した水田である。削り出し下端の幅は3mで、島畑19の上端との比高が0.1~0.2m、島畑20との比高が1.0mである。北側の島畑16とは8mの間隔が空けられている。細片化した土師器が少量出土した。

水田 S N 16 島畑18・19の間で検出した水田である。削り出し下端の幅は6.4~7.4m、島畑18との比高は0.84mを測る。瓦器椀が出土し(第39図71)、その年代観より13世紀代のものである。

水田 S N 17 島畑17と島畑18の間で検出した水田である。削り出し下端の幅9m、削り出し上端の幅13m、上端と下端の比高0.6mを測る。埋土中より土師皿(第39図61)、底面調査中に瓦器椀(第39図70・71)が出土した。13世紀代のものである。このほか、石鏃(第39図97)が底面精査中に出土した。栽培作物を特定するため北東壁の第25~27・29・30・44・45・50層の土砂を採集し、水洗いを行い内容物の同定作業を行った。^(注11)

水田 S N 18 島畑17の東側、調査区の東端で、南北34mにわたって検出した。調査区の東端であるため、幅は不明である。調査区の坪境の位置にあたる。土師器・瓦器細片が少量出土した。

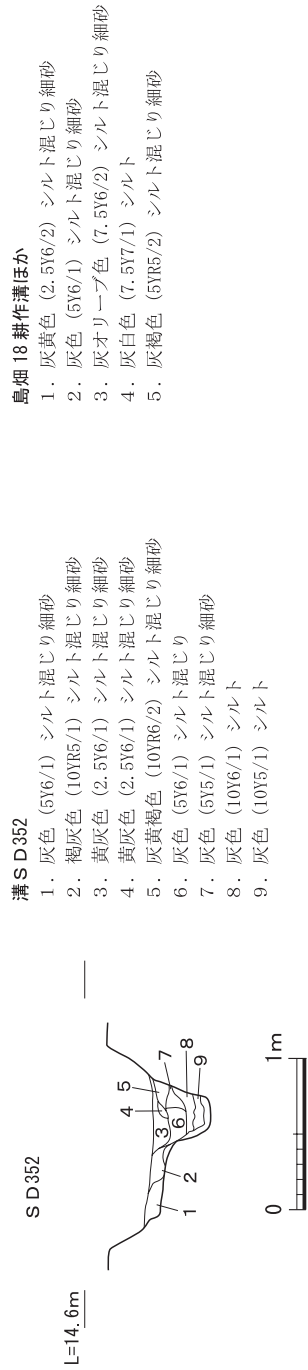
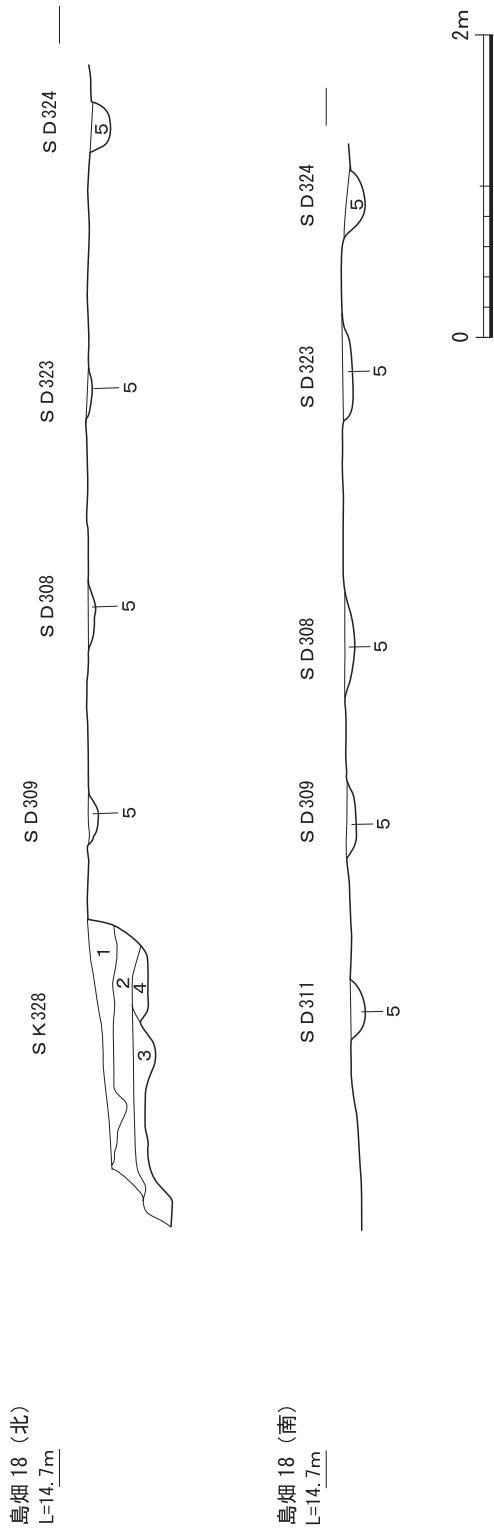
水田 S N 19 島畑7・21、島畑8・15の間で検出した東西方向の水田である。復原条里の坪境に相当する。島畑8の崩壊部分が多いため、東側が広がっている。良好な状態で残る島畑7・21間で見えた場合、削り出し下端では幅4.5m、上端での幅7.5m、高さ0.6mを測る。長さ23m分を検出した。S N 19を狭めて島畑15を北側に拡張している土層が観察された。島畑15の北西隅にあたる S N 19内の第87層より出土した板材の¹⁴C年代を測定したところ、15世紀後半~17世紀前半との結果を得た。^(注12) また、島畑16裾部分の堆積土の木炭も¹⁴C年代測定を実施した。埋土中より土師器皿・甕(第39図57・59・64・85)が出土した。第95層からは土師器釜(第37図73)が出土した。

水田 S N 20 島畑15・16間で検出した東西方向の水田である。両島畑間の削り出し下端では幅6m、上端の幅11m、高さ0.8mを測る。長さ24m分を検出した。埋土中から台付皿(第39図67)、底面近くから瓦器椀(第39図72)が出土した。第76層より出土した木炭の時期を特定するため¹⁴C年代測定を実施したところ、15世紀中頃~17世紀前半の結果を得た。^(注13)

水田 S N 21 島畑16の南側で、島畑18~20の北側にあたる部分で、長さ20mにわたり検出した。島畑18との間は、削り出し下端の幅が7m、上端の幅が10m、高さ0.45mを測る。島畑19から島畑20にかけては、削り出し下端の幅が3m、上端の幅が6mである。埋土中からは土師器杯もしくは皿(第39図66)、第54層からは白磁椀(第39図77)、第63層からは須恵器杯(第39図79)が出土した。このほか、埋土中より土師器細片が少量出土した。C地区で栽培作物を特定するため花粉分析試料を採集しているが、補足するために第24・54層の試料を採集し分析を行った。^(注14)

溝 S D 207 島畑7上面のやや西寄り検出した南北方向の溝で、溝 S D 413とはほぼ重複して検出した。切り合い関係より、S D 413に先行するものである。溝の南側は、西隣の水主神社東遺跡5次調査地へと延びる。検出長7.4m(水主神社東遺跡5次調査地を含めると19m)、幅3m、深さ0.36mを測る。細片化した土師器片や瓦器片が出土した。

溝 S D 308 島畑18の上面で検出した南北方向の溝である。溝 S D 335・336に後出するもので



第34図 D地区鳥畑18耕作溝他土層断面図

ある。水主神社東遺跡第 5 次調査区に延びており、総検出長 57.5m のうち 26.5m が今回の調査分である。幅 0.4～0.8m、深さ 0.08～0.1m である。埋土より土師器・瓦器の小片が出土した。

溝 S D 309 鳥畑 18 の上面で検出した南北方向の溝である。南側は水主神社東遺跡第 5 次調査区に延びている。総検出長 62m のうち 27m が今回の調査分である。幅 0.3～0.4m、深さ 0.8m を測る。埋土から瓦器皿・須恵器杯・平瓦(第 39 図 65・80・93)が出土した。

溝 S D 311 鳥畑 18 の上面で検出した南北方向の溝である。溝 S D 335・336 に後出する。土坑 S K 328 との切り合い関係はない。水主神社東遺跡第 5 次調査区に延びており、総検出長 51m のうち 16m が今回の調査分である。幅 0.3m、深さ 0.1～0.15m である。埋土より細片化した土師器・瓦器が出土した。

溝 S D 315・367 鳥畑 19 の上面で検出した南北方向の溝である。溝 S D 315・367 と東に接した位置でも一条の南北方向の溝を検出した。重複関係を有しており、S D 315 が先行し、S D 367 が続き、東接する溝が最も新しいものである。検出長は、S D 367 が 59.5m、S D 315 が 58.5m、東接する溝が 57.5m である。水主神社東遺跡第 5 次調査区に延びているため、S D 367 は 10.3m、S D 315 は 9.2m、東接する溝は 9m が今回の調査分である。S D 367 は幅 0.3～0.4m、深さ 0.05～0.1m、S D 315 は幅 0.3m、深さ 0.1m、東接する溝は幅 1m、深さ 0.15m である。S D 315 からは細片化した土師器が少量出土した。

溝 S D 320 鳥畑 18 の上面で検出した南北方向の溝である。南北方向の溝 S D 352、斜行する溝 S D 335 に後出する。検出長 37m、幅 0.3～0.4m、深さ 0.1m である。埋土より土師器細片が出土した。

溝 S D 321 鳥畑 17 の上部平坦面、やや西寄りて検出した南北方向の溝で、溝 S D 322 と重複して検出した。切り合い関係より、S D 322 に先行するものである。また、溝 S D 349・353 に後出するものである。検出長は 17.5m、幅 0.4m、深さは 0.13～0.2m である。埋土は黄灰色粘質土で、土師器細片が出土した。

溝 S D 322 鳥畑 17 の上で溝 S D 321 と重複して検出した。切り合い関係より、S D 321 に後出するものである。また、斜行する溝 S D 349・353 に後出する。検出長は 24m、幅 0.7m、深さ 0.2m で、埋土は灰オリーブ極細砂で、土師器・瓦器細片が出土した。

溝 S D 323 鳥畑 18 の上面で検出した南北方向の溝である。検出長 13.5m、幅 0.3～0.6m、深さ 0.5m である。埋土より土師器・瓦器片が少量出土した。

溝 S D 324 鳥畑 18 の上面で検出した南北方向の溝である。北端は鳥畑端部まで延びるが、貫通していない。溝 S D 335・336 に後出するものである。水主神社東遺跡第 5 次調査区に延びており、総検出長 53m のうち 27.4m が今回の調査分である。幅 0.4m、深さ 0.1m である。埋土より土師器・瓦器の細片が出土した。

溝 S D 327 鳥畑 18 の上面で検出した南北方向の溝である。溝 S D 335・336 に後出する。11.8m が今回の調査分で、南は水主神社東遺跡第 5 次調査区に延びている。幅 0.4m、深さ 0.1m である。埋土より土師器・須恵器細片が出土した。

溝S D 331 (第35図) 鳥畑16の上面で検出した溝群である。東西方向から西で北に約18°振れる溝に、ほぼ南北に走る3条の溝が取りついている。斜行する東西方向の溝は、検出長16m、幅0.3~0.4m、深さは0.11~0.15mである。南北方向の3条の溝は、東側の溝が検出長1.3m、幅0.5m、深さは0.15m、中央の溝が検出長1.4m、幅0.3m、深さは0.09m、西側の溝が検出長2m、幅0.5m、深さは0.13mである。これらの溝は、鳥畑上の平坦部を貫通していること、出土遺物の年代観から、鳥畑造成以前の遺構と判断される。溝S D 331検出時に土師器皿(第39図63)、埋土中より土師器皿が出土した(第39図80・84)。東側の南北方向の溝から土師器皿(第39図82・83)が出土した。10世紀代のものである。

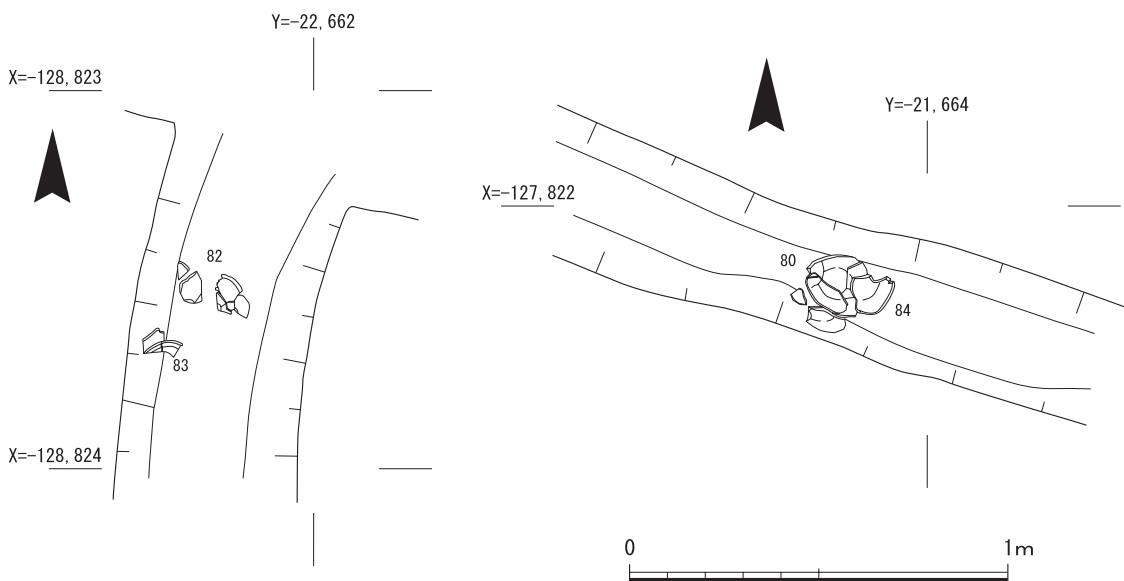
溝S D 335 鳥畑18の上面中央部で検出した。西南西から東北東に延びる溝で、重複関係より、南北方向の溝より古いものである。水主神社東遺跡第5次調査区に延びており、検出長18.4mのうち8.3mが今回の調査分である。中央部での最大幅1.4m、深さ0.65mで、逆台形~逆三角形の断面をなす。鳥畑17で検出した溝S D 349の延長部分と考えられる。埋土から弥生土器(第39図90)が出土した。

溝S D 336 鳥畑18の上面で検出した。北西から南東に延びて、ほぼ東西に屈曲する溝で、重複関係より、南北方向の溝に先行するものである。幅0.7~1.2m、長さ8.8m、深さ0.3~0.7mで、埋土から弥生土器(第39図88)が出土した。

溝S D 342 鳥畑15の上面で検出した東西方向の溝である。検出長は4.8m、幅0.2m、深さは0.05mである。埋土より土師器・瓦器片が出土した。

溝S D 343 鳥畑15の上面で検出した東西方向の溝である。検出長8m、幅0.2~0.5m、深さは0.05mである。遺物は出土しなかった。

溝S D 345 鳥畑8の西辺の裾部で検出した南北方向の溝である。検出長は7.7m、幅0.8m、深さは0.13mである。遺物は出土しなかった。



第35図 D地区溝S D 331内遺物出土状況図(番号は第39図出土遺物実測図番号に対応)

溝 S D 346 島畑 8 上面の西辺近くで検出した南北方向の溝である。北側は斜面部分にかかっている。検出長は 5.9m、幅 0.2～0.7m、深さは 0.07～0.2m である。埋土より瓦器小片が出土した。

溝 S D 347 島畑 8 のほぼ中央で検出した南北方向の溝である。北半部分については消失している。検出長は 2 m、幅 0.3m、深さは 0.06m である。遺物は出土しなかった。

溝 S D 349 島畑 17 上で検出したほぼ東西方向の溝である。溝 S D 353 と重複関係をもち、S D 353 に後出するものである。検出長 3.2m で、島畑 上での最大幅は 1.43m である。断面は逆台形で、深さは最大で 0.9m である。埋土から弥生土器の細片が出土した。

溝 S D 351 島畑 18 の上面で検出した南北方向の溝である。溝 S D 352 と重複しており、S D 352 に後出するものである。総検出長 64m のうち 24.4m が今回の調査分で、南は水主神社東遺跡第 5 次調査区に延びている。幅 1.2m、深さ 0.26m である。埋土より土師器・瓦器小片とともに土師器羽釜(第 39 図 74)が出土した。

溝 S D 352 島畑 18 の上面で検出した南北方向の溝である。溝 S D 351・土坑 S K 328 と重複しており、切り合い関係によりそれらに先行するものである。水主神社東遺跡第 5 次調査区に延びており、総検出長 64m のうち 25.5m が今回の調査分である。幅 0.5m、深さ 0.4m である。埋土より土師器小片が出土した。水主神社東遺跡第 5 次調査区では平安時代の遺物が出土している。

溝 S D 353 島畑 17 および水田 S N 17 上で孤状に検出した溝である。溝 S D 349 と重複するので、S D 349 に先行する。検出長 19m で、島畑 上での最大幅は 1 m である。断面は逆台形で、深さは最大で 0.8m である。埋土から弥生土器(第 39 図 86・87・89)のほか、石鏃未成品(第 39 図 95)が出土した。

溝 S D 357 水田 S N 17 の底面西寄りで検出した南北方向の溝である。検出長 32.5m、幅 0.1～0.25m、深さ 0.05m である。南側は水主神社東遺跡第 5 次調査区に延びていき、26.5m 分が今回の調査分である。埋土から土師器片が少量出土した。

溝 S D 358 水田 S N 17 の底面西寄りで検出した南北方向の溝である。検出長 38m、幅 0.5～0.6m、深さ 0.06～0.18m である。水主神社東遺跡第 5 次調査区に延びていき、36.4m 分が今回の調査分である。土師器・須恵器小片とともに石鏃(第 39 図 97)が出土した。

溝 S D 359 水田 S N 17 の底面西寄りで検出した南北方向の溝である。検出長 18m、幅 0.4～0.6m、深さ 0.06m である。水主神社東遺跡第 5 次調査区に延びていき、14.4m 分が今回の調査分である。埋土から土師器片が少量出土した。

溝 S D 360 水田 S N 17 の中央部底面で検出した南北方向の溝である。検出長 11m、幅 0.5～0.7m、深さ 0.06～0.1m である。遺物は出土しなかった。

溝 S D 361 水田 S N 17 西側の溝 S D 357 に近接して検出した南北方向の溝である。検出長 4.4m、幅 0.2m、深さ 0.05m である。遺物は出土しなかった。

溝 S D 362 水田 S N 17 の西寄り底面で検出した南北方向の溝である。検出長 2.3m、幅 0.2～0.3m、深さ 0.08m である。南延長部と考えられる溝が水主神社東遺跡第 5 次調査区で長さ 5.6m 認められる。遺物は出土しなかった。

溝S D364 水田S N17の中央部底面で検出した南北方向の溝である。検出長1.4m、幅0.3m、深さ0.03mである。遺物は出土しなかった。

溝S D365 水田S N17の中央部底面、溝S D364の南側で検出した南北方向の溝である。検出長7.8m、幅0.25～0.3m、深さ0.05mである。埋土から細片化した土師器が少量出土した。

溝S D368 島畑19の上面西端で検出した南北方向の溝である。検出長34mであるが、水主神社東遺跡第5次調査区に延びており、今回の調査分は8mである。幅0.3～0.5m、深さ0.15mである。埋土より細片化した土師器が少量出土した。

溝S D369 島畑16の上面、西側中央で検出した東西方向の溝である。検出長は5.5m、幅0.2～0.3m、深さは0.1mである。埋土より土師器小片が出土した。このほか、溝S D369に南接した位置と、島畑上面の東側で、それぞれ1条の溝を検出したが、遺物は出土しなかった。前者は検出長6.5m、幅0.2～0.3m、深さ0.05m、後者は検出長2.6m、幅0.35m、深さ0.1mである。

溝S D413 島畑7上面で検出した。溝S D207と重複しており、切り合い関係よりS D207が先行する。検出長は17m、幅0.5m、深さは0.25mである。埋土より土師器・瓦器小片が出土した。

土坑S K328 島畑18の上面で検出した土坑で、溝S D352に後出するものである。規模は、幅1.5～2.2m、長さ11.7m、深さ0.4mである。埋土から少量の土師器・須恵器片が出土した。

土坑S K354 島畑17の上面北寄りで検出した。0.62m×0.72mの隅丸方形を呈し、深さ0.16mである。遺物は出土しなかった。

土坑S K355 島畑17の中央部の東斜面側で検出した。長径48cm、短径34cmの楕円形を呈し、深さは0.17mである。遺物は出土しなかった。(黒坪一樹)

6. 出土遺物

1) 下水主遺跡出土遺物

今回の調査では、縄文時代から近世に到る遺物が整理箱4箱分出土した。内容は、土器、陶磁器、木製品、石器、金属製品などである。今回の調査区では、C地区からの遺物の出土が多く、他の地区では少ない傾向がみられる。特にA地区は細片の遺物がわずかに出土したのみである。B地区から縄文土器が出土しているのが注目される。なお、法量等の遺物の詳細は、付表2～5を参照していただきたい。

(1) A地区・A北地区出土遺物(第36図1～5)

1は弥生土器底部で、壺ないし甕とみられる。A地区の水田S N01第7層(黒褐色粘質土)下面から出土した。やや摩滅しているが、外面はケズリ後ナデ調整、内面はナデ調整とみられる。底部はやや広目で、中期頃のものか。

2～5はA北地区から出土した。2は瓦器椀である。内面のミガキは粗く、外面にも口縁端部にミガキがわずかに残る。島畑14の東側の水田S N12より出土した。13世紀後半頃のものともみられる。3は瓦器椀である。内面のミガキはかなり粗く、外面にミガキは無い。口径も小さくなっており、高台も形骸化している。丸味をもった深めの器形から、14世紀の大和型の製品とみられ

る。島畑13の上面の溝 S D07から出土した。4は土師器羽釜である。口縁部は内傾して立ち上がり、端部はやや肥厚する。島畑14の東側の水田 S N12より出土した。5は美濃瀬戸陶器の天目椀である。高台周辺の露胎部に鬼板化粧する。16世紀後半頃のものと思われる。水田 S N13検出面第10層(灰色粘質砂)より出土した。

(2) B 地区出土遺物(第37図6~16)

6は土師器皿で、丸味をもった小型の皿である。島畑4上の第11層(灰色粘質土)より出土した。7は肥前磁器(伊万里)の染付小椀である。器胎は薄手で、口縁端部は外反する。外面に花文を描く。17世紀中頃のものと思われる。島畑4の東側の壁面清掃時に出土した。盛土中であるが、詳細な層位は不明である。

8は弥生土器壺である。二重口縁をもつ小型の壺とみられる。体部外面をミガキ調整する。肩部には波状文を廻らし、その周囲に縦方向の刺突列点文を施す。口縁の屈曲部外面にはヘラによるキザミを施す。後期のものと思われる。土坑 S X102から出土した。9は弥生土器壺である。口縁部は外反し、肩の張った扁平気味の器形である。器壁は摩滅しており、調整は不明である。後期のものと思われる。土坑 S X104から出土した。

10~14は縄文土器深鉢である。摩滅のため調整の詳細は不明であるが、11では外面に横方向のケズリ痕跡が残る。いずれも晩期のものと思われ、島畑4北端の第24層(灰茶褐色砂質粘土)から出土した。

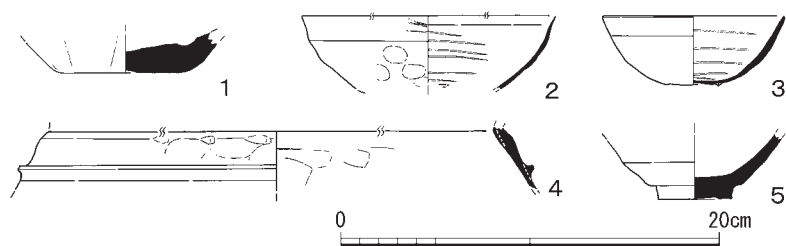
15は鉄釘とみられる。断面が長方形であり、角釘である。島畑4上の溝 S D106から出土した。16は鉄滓である。小片ではあるが、椀形鍛冶滓で、重さ32.7gである。溝 S D01から出土した。

(3) C 地区出土遺物(第38図17~56)

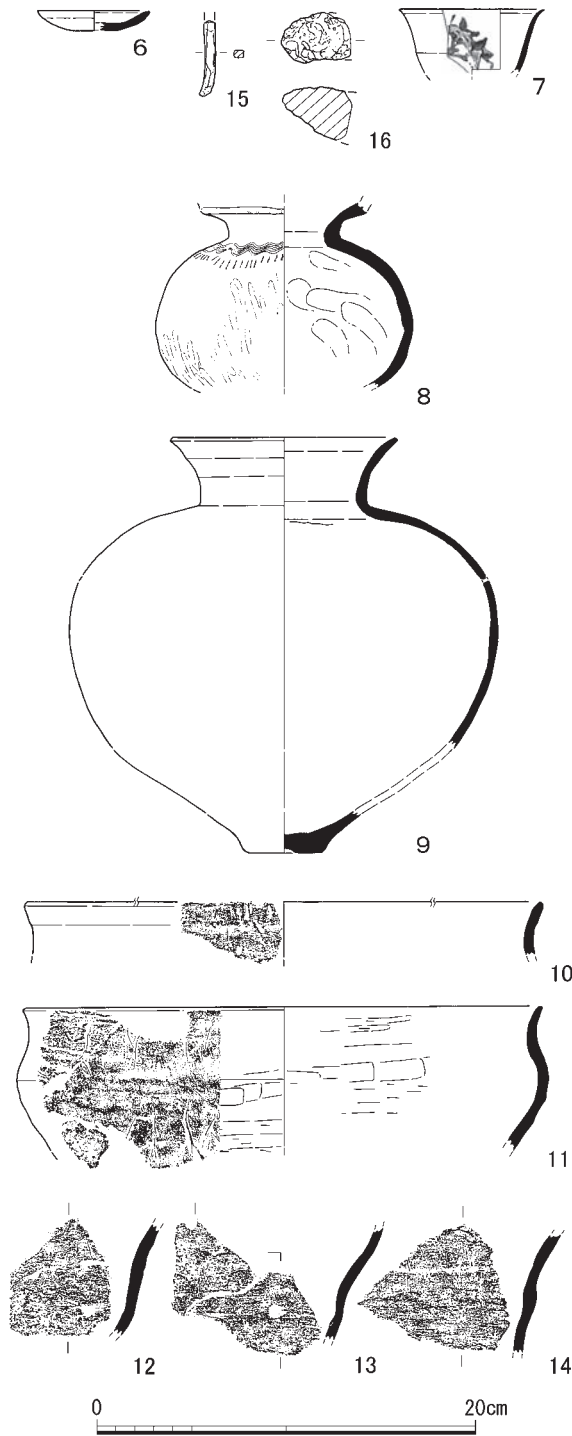
17~23は土師器皿である。外面を強くナデ調整するものや丸味をもつものなどがある。23はコースター形のものである。12~13世紀頃のものと思われる。17・22は島畑7の水田 S N05から、18は S N05北端から、19は島畑7の溝 S D208から、20は水田 S N06から出土した。21は島畑9上から出土したが、重機による掘削時であったため、層位は不明である。23は東壁精査中に出土した。

24~31は瓦器椀である。内面のミガキは粗く、外面にはミガキがみられない。27は口縁端部内面に段状の沈線を廻らす、大和型の椀である。その他の椀には沈線がみられない。いずれも13世紀頃のものと思われる。32は瓦質土器三足鍋の脚部である。24・27・32は水田 S N05北端の第45層(青灰色砂質土)、25は水田 S N06の南端の島畑7付近より出土した。28~31は島畑7の溝 S D208から、26は島畑7の溝 S D208の精査中に出土した。

33~37は土師器釜である。36・37は鏝が残っており、羽釜である。33~35は



第36図 A地区・A北地区出土遺物実測図



第37図 B地区出土遺物実測図

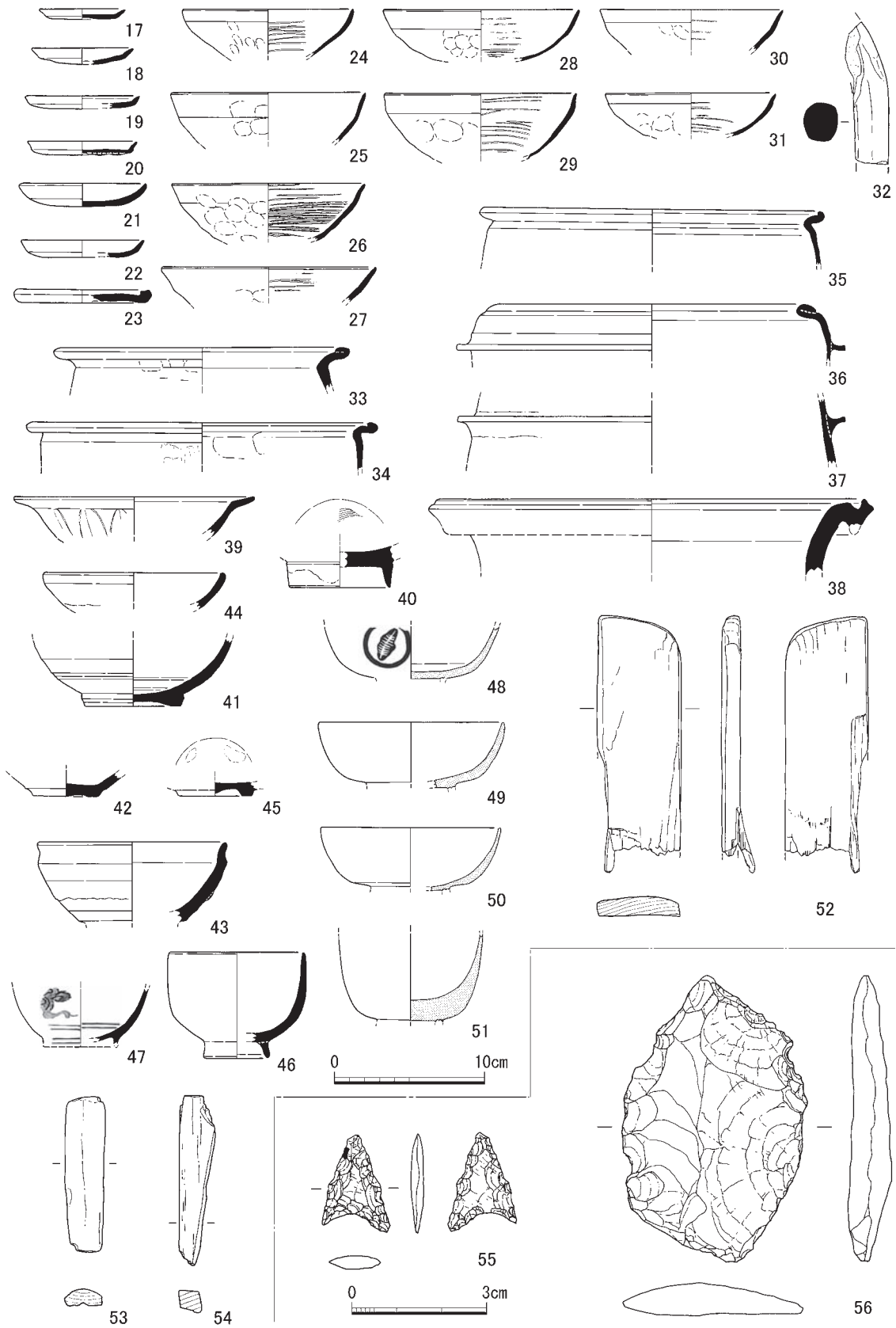
口縁端部を内側へ折り返しており、36は外側へ折り返す。33は水田S N05内の北側精査中、34～37は島畑7のS D208から出土した。

38は陶器甕で、常滑産と考えられる。口縁端部がわずかに垂下するものとみられ、13世紀頃の製品とみられる。島畑7の溝S D207から出土した。42は古瀬戸灰釉椀である。15世紀頃の製品とみられる。43は美濃瀬戸陶器天目椀である。16世紀頃の製品とみられる。44は肥前陶器(唐津)皿である。口縁部が内湾気味に立ち上がる。灰釉を施す。17世紀初頭頃の製品とみられる。45は肥前陶器皿である。見込みに砂目の目跡が残る。17世紀前期頃の製品とみられる。46は肥前陶器椀である。高台畳付以外に施釉する。17世紀後半頃の製品とみられる。43～45は東壁標高14.5m付近、第5層(黄白色砂質土)、第10層(灰色砂質土)の精査中に出土した。46は標高15m付近で重機掘削時に出土した。

39は中国製の青磁杯である。外面に鎬連弁文を施し、口縁部は鐔状に屈曲する。13世紀後半から14世紀前半頃の龍泉窯産とみられる。島畑7上の重機掘削時に出土した。40は中国製の白磁椀である。高めの削り出し高台をもつ。12世紀頃のものとみられる。水田S N05北端の第48層(青灰色砂質土)より出土した。41は褐釉陶器椀である。高台

は低い削り出しで、無釉である。中国製とみられる。島畑7のS D207中央西側肩部付近より出土した。47は青花磁器椀である。外面に雲文もしくは靈芝文を描く。中国製の連子椀で、15世紀後半から16世紀前半頃の製品とみられる。南端部の重機掘削時に出土した。

48～51は漆器椀である。48は内面朱漆塗、外面は黒漆塗であり、朱漆で丸に葉文を描く。49は内面朱漆塗、外面黒漆塗である。50は内外面とも朱漆塗である。51は深めの椀で、内外面とも黒漆塗である。器底は厚い。52～54は不明木製品である。52は角に丸味をもつ板材である。53・54



第38図 C地区出土遺物実測図

は一部に加工痕をもつ。48は調査区中央部よりやや南寄りの標高14.5m付近の西壁、第5層(黄白色砂質土)、第10層(灰色砂質土)の精査中に出土した。49～51は重機掘削時に出土した。

55は石鏃である。無莖の鏃で、サヌカイト製である。島畑8の中央部の基盤層直上から出土した。56は木葉形石鏃の未成品と考えられる。石材はサヌカイトである。弥生時代中期頃のものと思われる。水田S N05北端の第48層(青灰色砂質土)から出土した。(引原茂治)

2)水主神社東遺跡出土遺物

(1)D地区出土遺物(第39図57～97)

57～64は土師器皿である。外面を強くナデ調整するものや、口縁が直立気味に立ち上がるものなどがある。12～13世紀頃のものと思われる。57・59・64は水田S N19の埋土中より、58・60は重機掘削中に、61は水田S N17の埋土中より出土した。63は島畑16の溝S D331から出土した。65は瓦器皿である。内面にミガキがみられる。溝S D309から出土した。66は土師器杯もしくは皿である。口縁端部は外反気味で、外面にユビオサエの痕跡が残る。水田S N21から出土した。67は台付皿の脚部である。ナデ調整する。水田S N20の埋土中から出土した。

68～72は瓦器椀である。内面のミガキは粗く、外面にミガキは無い。69は内面口縁端部に段状の沈線をもつ。72は断面三角形の低い高台を付す。いずれも13世紀頃のものと思われる。68は溝S D315から出土した。69は島畑16の第61層(暗緑灰色粘土)、70・71は水田S N17の底面精査中に、72は水田S N20の底面近くで出土した。

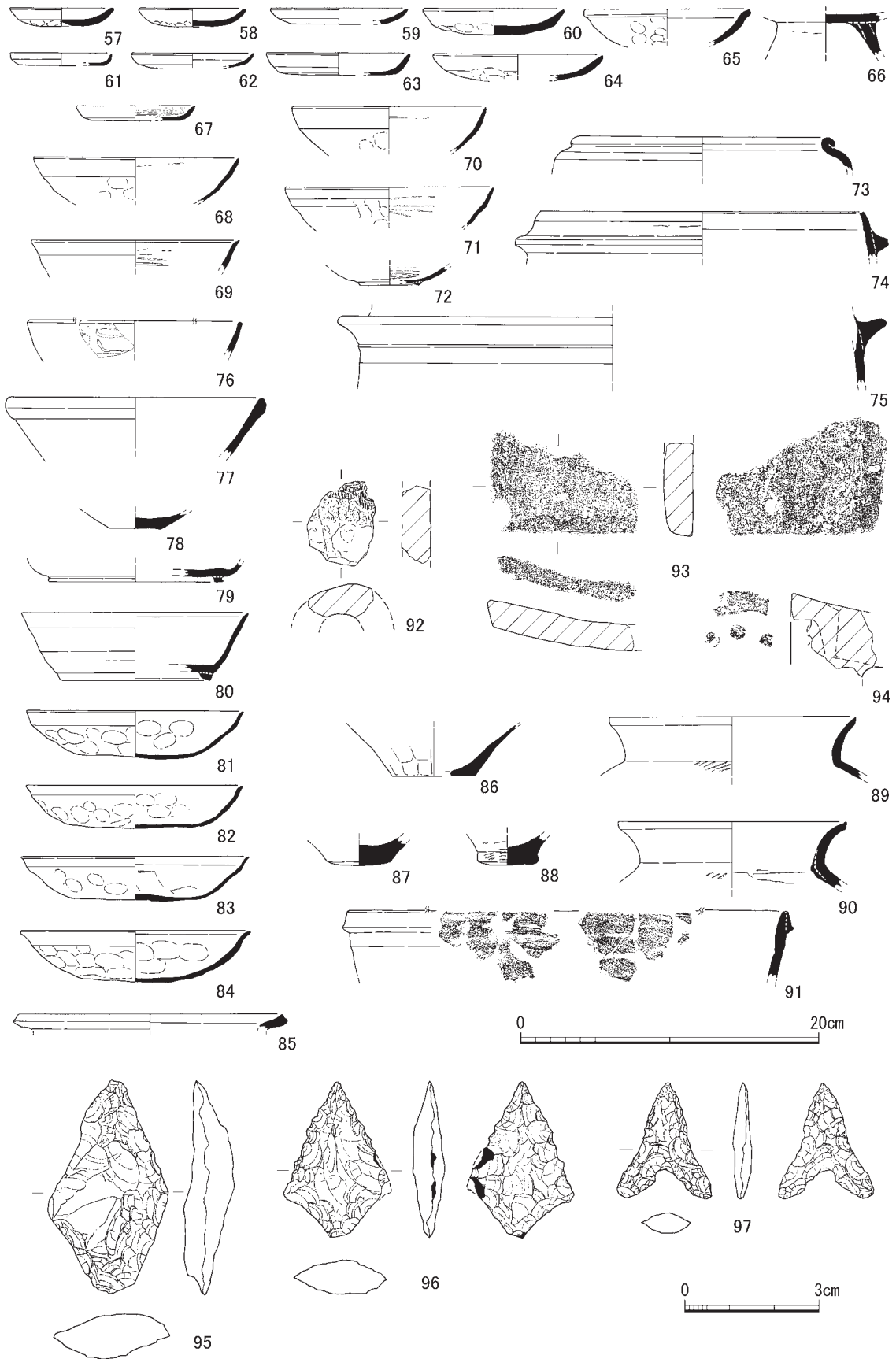
73は土師器釜である。口縁端部を外側に折り返し、玉縁状にする。水田S N19の第95層(灰オリーブ色粘土)から出土した。74は土師器羽釜である。13世紀頃のものか。溝S D351から出土した。75は瓦質土器羽釜である。水田S N19の第51層(暗オリーブ灰色粘土)から出土した。

76は中国製の青磁椀である。口縁部外面に雷文を廻らす。15世紀頃のものと思われる。調査区の西壁S N14埋土中より出土した。77は中国製の白磁椀である。口縁は玉縁状である。12世紀頃のものと思われる。水田S N21の第54層(暗オリーブ灰色粘土)から出土した。78は中国製の白磁皿である。見込みに円刻があり、底部はヘラで平滑に調整する。水田S N19の第87層(オリーブ黒色極細砂質土)から出土した。

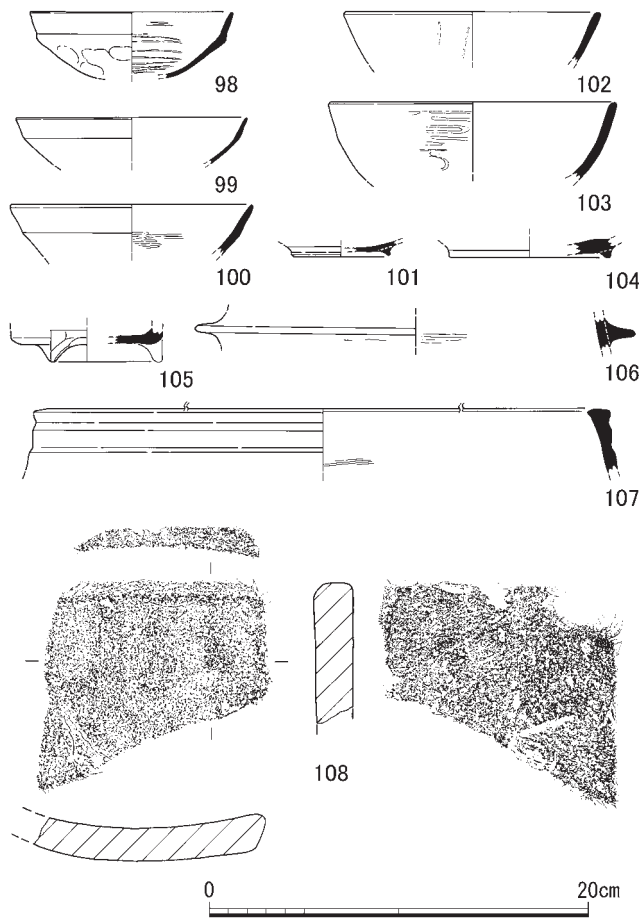
79は須恵器杯である。底部外周のやや内側に高台を貼り付ける。8世紀後半頃のものと思われる。水田S N21の第63層(暗オリーブ灰色粘質土)から出土した。80は須恵器杯である。底部外周に高台を貼り付ける。口縁部は直線的に斜め上方に立ち上がる。9世紀頃のものと思われる。溝S D309から出土した。

81～84は土師器皿である。内外面ともにユビオサエ痕があり、外面口縁端部をやや強めにヨコナデする。83は内面を板ナデする。10世紀頃のものと思われる。島畑16の溝S D331から出土した。85は土師器甕の口縁部である。端部を若干上方につまみ上げる。水田S N19西端の埋土中から出土した。

86～88は弥生土器甕の底部である。86は外面にケズリの痕跡が残る。88は外面にタタキを施す。



第39図 D地区出土遺物実測図



第40図 E地区出土遺物実測図

95は石鏃の未成品である。石材はサヌカイトで、重さ9.98gである。溝S D353から出土した。96は有茎式の石鏃である。石材はサヌカイトである。弥生時代のものか。島畑15南の基盤層直上の盛土層から出土した。97は無茎式の石鏃である。石材はサヌカイトで、重さ1.3gである。形状から縄文時代のものとみられる。水田S N17北側の底面近くで出土した。

(2) E地区出土遺物(第40図98~108)

98は瓦器碗である。内面のミガキは粗く、外面にミガキはみられない。口径も小さめであり13世紀末から14世紀頃のものと思われる。水田S N09から出土した。99は瓦器碗で、内外面とも摩滅のため調整は不明である。13世紀頃のものか。水田S N09から出土した。100は瓦器碗である。内面にやや粗いミガキが残る。13世紀頃のものと思われる。島畑11上面の第56層から出土した。101は瓦器碗の底部である。断面三角形気味の高台を付す。摩滅のため調整は不明である。島畑19上の溝S D406から出土した。

102は中国製の青磁碗である。外面に連弁文を刻出するものとみられる。14世紀頃のものか。北壁精査中に出土したが、層位は不明である。103は中国製の青磁碗である。口縁部外面に雷文を廻らす。15世紀頃のものと思われる。水田S N10最下層(第61層)から出土した。104は須恵器杯底部とみられる。底部に高台を貼り付ける。小片のため、詳細は不明である。水田S N09から出土した。105は瓦質土器香炉である。内外面ともナデ調整である。南壁精査中に出土したが層

後期頃のものと思われる。86・87は溝S D353、88は溝S D336から出土した。89・90は弥生土器である。いずれも肩部にタタキを施し、内面はケズリ調整である。口縁端部を上方につまみ上げる。後期もしくは庄内期のものと思われる。89は溝S D353、90は溝S D335から出土した。91は縄文土器深鉢である。口縁端部を玉縁状に肥厚させる。内面には条痕文がみられる。晩期のものと思われる。島畑16の基盤層直上の盛土から出土した。

92は鞆の羽口である。島畑17上の重機掘削時に出土した。93は平瓦である。摩滅しており、布目やタタキ痕跡は不明である。溝S D309から出土した。94は軒丸瓦で、連珠文が残る。近世の巴紋軒丸瓦とみられる。水田S N14掘削中に出土した。

95は石鏃の未成品である。石材はサ

位は不明である。106は瓦質土器羽釜である。外面ナデ調整で、内面にハケ目の痕跡が残る。水田 S N10の第61層から出土した。107は瓦質土器である。小片のため器種は不明であるが、火舎の可能性もある。ナデ調整であるが、内面に一部ハケ目がみられる。水田 S N09から出土した。108は平瓦である。摩滅しているが、凸面にわずかに縄タタキの痕跡と思われるものが残る。中世以前のものとみられる。重機掘削時に出土した。(引原茂治)

7. まとめ

1) 時期別の変遷

縄文時代 縄文時代の遺構は確認されなかったが、各所で少量の土器片の出土が認められた。大半が小片化したものであるが、B地区島畑4・5北端では比較的まとまった土器片が出土した。D地区の島畑15の北側にある S N19基盤層上面の堆積土および島畑16下の基盤層(第101層)上面の窪みに堆積した埋土中の木炭を¹⁴C年代測定をしたところ、暦年較正年代で、前者は縄文時代晩期後葉から弥生時代の移行期頃、後者は縄文時代晩期中葉～後葉頃の結果が得られた。このように遺構は確認できなかったが、各所にその存在の痕跡が認められる。

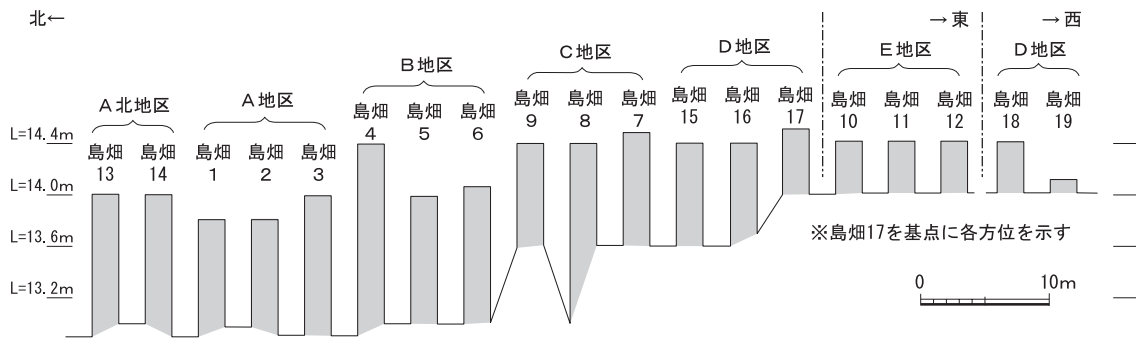
これらの土器片や焼土・炭化物は、弥生時代後期以降の土地利用に伴い、微高地を削平して自然地形の窪みや傾斜面に整地したものと判断される。その際に、当該期の遺構は削平されたものと考えられる。

弥生時代 弥生時代の遺構は、B地区とD地区で散見できる。B地区の島畑4の北端で検出した S X102・104・108、D地区の島畑17・18の上・下で検出した S D335・336・349・353・361では弥生土器片が出土している。いずれも弥生時代後期に属するものである。遺物は出土しなかったが、B地区の S K105・S X107も遺構の重複関係や弥生時代の遺構が近傍で検出されていることより、弥生時代の遺構である可能性が高い。一方、A地区やC地区・E地区では当該期の遺構は確認できなかった。

D地区の島畑17・18の上・下で検出した S D335・336・349・353・361は深さ最大0.9mを測るが、周囲に土坑やピットなどは認められなかった。こういった点から、弥生時代の遺構面は、後世にかなり削平を受けたものと判断される。それに対して、B地区の島畑4の上で検出した土坑などは、後世の削平をさほど受けていないものと考えられる。

この点を確認した上で島畑基盤層の標高を見ると(第41図)、D地区の島畑17が最も高い位置にあり、北側と東側に向けてやや下り、D地区の島畑15・16・18、C地区の島畑7～9がほぼ同じ高さにある。また、B地区では島畑4の標高だけが高く、南側の島畑5・6と島畑3以北の標高が急激に低くなる。

島畑の標高と弥生時代の遺構の分布を重ねると、最も高い位置にある島畑17と、島畑4上に遺構が分布する。島畑17上は先に見たように浅い遺構は削平され深いものだけが残っているだけであり、こういった点で、島畑4の土坑とは状況が異なるものである。島畑17の遺構のあり方とC・D地区で遺構が見つからない点は、島畑の造成に伴い高い部分は大幅に削平を受けたものと考え



第41図 島畑の標高一覧

られ、弥生時代の遺構も消失したと判断されるのである。一方、島畑4の遺構はさほど削平を受けていないことから、地形が下る傾斜変換点にあたるために削土を行わなかったと考えられる。

このように推定すると、D地区の高所を中心に、北はB地区まで、東は島畑18の範囲で、弥生遺構が分布していたものと復原できる。D地区で検出した溝 S D 335・336・349・353・361は北西・南西方向など不定方向に延びるものである。溝の性格はよくわからないが、埋土の観察において水が流れた痕跡は認められなかったため、水路等の用途は考えにくく、何らかの区画に伴う溝と推定される。

平安時代 この時期の遺構としては、B地区島畑4の上で検出した溝 S D 103・106、島畑5の上で検出した溝 S D 109、D地区の溝 S D 331、島畑18の上で検出した溝 S D 352があげられる。S D 352を除いて、これらの溝は島畑の軸に直交・平行しないものである。中世以降の島畑およびそれに伴う溝はほぼ南北-東西に合致しているので、その方位からずれる溝はこの時期のものである可能性が高い。

さらに、西側隣接地の水主神社東遺跡第5次調査区では、平安時代と考えられる掘立柱建物跡、井戸が検出されている。周辺からは8世紀後半と考えられる遺物が出土しており、島畑16上の溝 S D 331では10世紀代の遺物が出土している。こういった点から、奈良時代後半以降には、調査地の周辺は宅地として利用されていたものと考えられる。掘立柱建物跡や井戸はD地区周辺にあり、畑地に伴う溝がD・B地区に分布している。弥生時代の集落と同じく、微高地を中心に宅地・畑地として土地利用していたようである。微高地の下は湿地であり、おそらくその中の比較的高い場所は水田として利用されていたのであろう。

中世 13世紀後半以降には、一帯の耕作地は様相が変わり条里型地割に沿った土地開発がなされる。現地形に残る水田区画は、条里型地割をよく残しており、周辺の条里復原がなされている(第3図)。一つは、この地割がいつなされたか、という点が問題としてある。

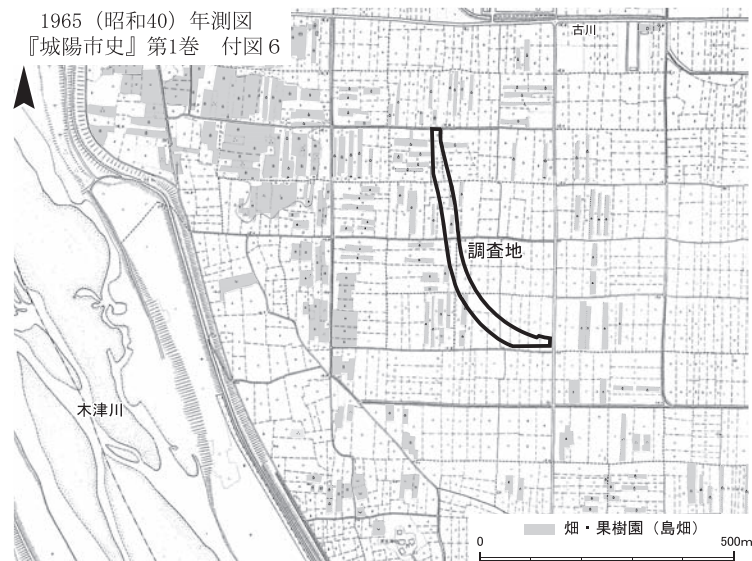
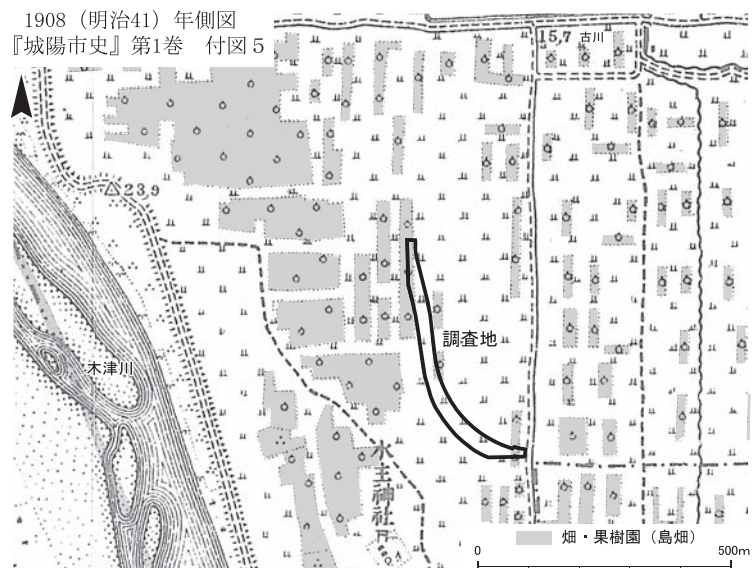
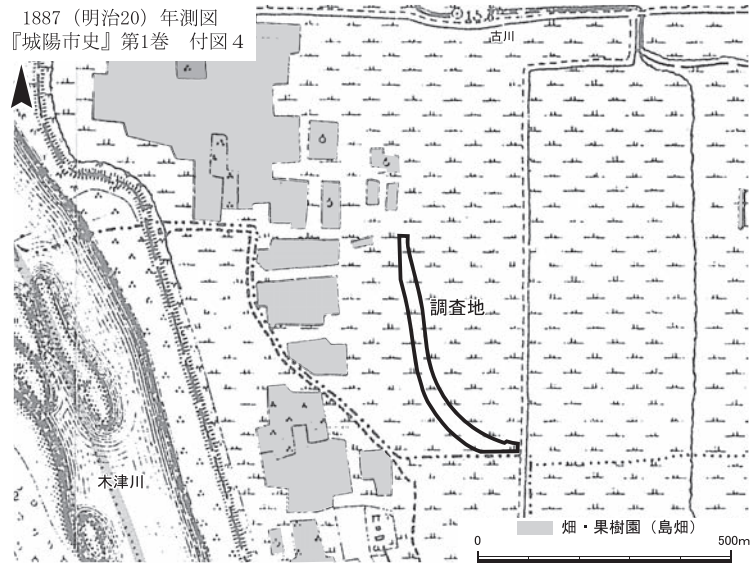
調査の結果、今回検出した島畑は、現地形の水田区画と同じ形状をなしていることが判明した。すなわち、島畑が造られた当初の地区割りが、現在の水田区画にまで残っているということである。実際、調査中の土層の観察でも、島畑が造られると、その場所・規模をほぼ踏襲して島畑に改変を加えていることがわかったことは、報告のとおりである。そして、島畑の造成は13世紀後

半であることが判明した。

それ以前の区画は、平安時代の項で見たように、正方位を指向するものではなく、斜行するものである。13世紀後半までは、それ以降と違った地割がなされていた可能性が指摘できる。

島畑造成時には、微高地を長方形に削り出し島畑とし、削り出した周囲を水田としている。微高地や湿地部分を島畑と水田に分けて活用することについては、後述の2) 島畑の検討で検討したい。

近世以降 島畑の土壌を分析し、その作物の一部が明らかとなった。江戸時代以降と考えられる土層中からは、ワタ・コムギ・オオムギ・ウリ・イネなどの栽培種の種子が同定できた。第42図の明治20年、明治41年、昭和40年の地図にあるように、時々において島畑の分布が違っている。今回の調査でも、島畑を均して水田へと改変した土層を確認した。その後、昭和40年の地図では多くの島畑が認められるが、現在では大半の島畑が失われ、現在の水主集落周辺から北側にかけて大型の島畑が存在している。



第42図 明治20・41年、昭和40年城陽市域地図

2) 島畑の検討

本遺跡の特徴は、中世以降の土地利用の一形態である島畑にある。島畑は、一般的に水田(湿地)の中に土砂を島状に盛り上げ造成した区画で畑作を行い、周囲の低地では水稲耕作を行う形態である。

南山城地域を貫流する木津川は上流域が風化しやすい花崗岩地帯であるため、その土砂が木津川に流れ込み、堤防が決壊した際には大量の土砂が田畑に流れ込んだ。『城陽市史』によると、この地域は旧巨椋池との比高が5m内外しかない湿地にあたり、豪雨時には木津川のみでなく宇治川とさらに巨椋池からの氾濫による浸水を受けていたところである。近世初頭に堤防が築かれた以後は、氾濫の回数は減少しているようであるが、豪雨時の堤防決壊が逆に被害を大きくしている。昭和44年に上流域で高山ダムが築かれるまでは多くの洪水に見舞われている。現在では、豪雨による水路・小河川が排水能力を超えた場合に水田部や家屋の浸水を見るなど、木津川の氾濫被害を直接受けずにしても、内水災害による被害を蒙っている。また、東側の山地から流れる小河川を灌漑用水として利用しており、これらの河川を条里型地割に合致させて木津川に直線的に流れるように敷設していることも原因の一つとして挙げられている。

洪水・氾濫により水田等の耕作面が河川堆積物に覆われると、復旧して耕作面とすることを繰り返し行っている。その際に、島畑造成後は島畑谷部の水田に堆積した土砂を島畑上に盛り土し、常に島畑と島畑谷部の水田面との比高を一定に保っていたようである。これは、木津川畔に広がる微高地の後背湿地の開発に伴って、排水路の役目も担っていたためと考えられる。これらの造成時期については、調査の結果13世紀前半には開始されたものと考えられる。

1887(明治20)年測図(第42図上)では調査地周辺には島畑は認められず、水田が広がっていて、西方には大規模な島畑が存在する。1908(明治41)年測図(第42図中)になると、A北地区～C地区やその東方にも島畑が多く認められるようになる。1965(昭和40)年測図(第42下)によると、明治41年測図に比べると東方の島畑が減少するが、周辺にはまだ多くの島畑が存在している。調査で確認された近世以降の島畑は、明治20年以前の段階で削平・水田化されたものと思われる。現代の土地境界図には水田の中に畠が存在するという登記がなされているが、登記に載るものは明治段階でも島畑が存在していた部分を指しているのであろうか。

このように近代以降でも、水田の増加や減少が頻繁に起こっている。これが、洪水に伴う未復旧が水田化したものか、洪水の影響が一段落したため島畑を復旧、栽培作物の変化に伴い島畑が復旧されたものなのかは不明である。いずれにしろ、この島畑部分は中世から同一場所が利用され、規模の大小はあったものの連綿と受け継がれている。当該地周辺には、水田の中に大小の島畑が分布する特徴的な景観が広がっており、江戸～大正時代には広範囲で綿や果樹栽培などが行われている。

寺田地区の国道24号より西側には、現在も寺田イモ、イチジク、梨、ブドウ、茶、長いも等を栽培する島畑が多く存在する。また、先にも触れたように文化庁の『農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究』(平成15年度)では、「畑地景観」で、城陽市所在の「木津川流

域の島畑」が掲げられている。

(1) 島畑の立地

「島畑」は、周辺の土を島状に盛り上げて造成したもので、先に見たように、周囲の一段掘り下がった部分を水路・水田として利用し、島畑上では畑作を行うものと考えられる。島畑は、木津川右岸沿いに広がる自然堤防状の微高地および後背湿地に立地し、現在まで連綿と続く耕作形態である。島畑の分布する範囲については明確ではないが、近世以降には復原されている条里の外側にまで分布し、規模・形態も大型化している。このように条里型地割内にある島畑とは規模・形態を異にするようである。

島畑の造成を調査の結果から見ると、基盤層である黄褐色粘質土の微高地を長方形に削り出し島畑を造成するものと、微高地が低いためその上に盛土を施すもの、湿地上に盛土し島畑を造成するものの3種(第43図)が認められる。

調査で検出した島畑の配置を見ると、個々の島畑の規模・方向はさまざまであるが、規則正しく配置されている。また、現在に残る水田区画は、調査で検出した地割と一致しており、条里の基本単位である約109m四方の一町の規制を受けている。田畑の区画も長地型・半折型に則したのものとなっている。こういった点から、造成当初から正方形が存在したことが窺われる。

検出された島畑については、一般的に掘り下げ田と掻き上げ田に2分される。

掘り下げ田については、

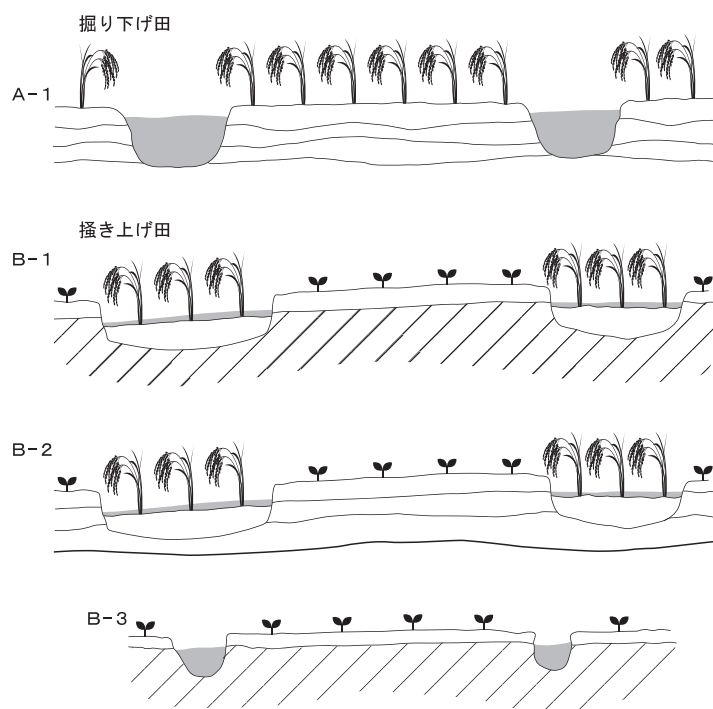
A 湿地等の泥を掘り下げその土砂を盛土し、高まり部分を水田として利用したもので、掘り下げた部分は排水溝の役目も果たす。

掻き上げ田については、

B-1 湿地等の泥を掘り下げてその土砂を盛土し、高まり部分の上面を畑、谷部を水田として利用する。

B-2 微高地(ベース面)を掘り下げて盛土し、高まり部分の上面を畑、谷部を水田として利用する。調査では、暗灰色・暗青灰色など還元作用を受けた状態の強い粘性を帯びた粘質砂が堆積しており水田耕作が行われたと考えられる。

B-3 微高地(ベース面)を掘り下げて盛土し、高まり部分上面を畑として利用したもので、掘り下



第43図 掻き上げ田と掘り下げ田

げ部分は給・排水溝の役目も成す。島畑間の水田幅が島畑に対して狭いため、排水を目的としたもので水田として利用していないものと推定される。Aと同様のものであるが、水田としないことや、畑面積が大きいため平常時の給排水、増水時の排水溝の役目を果たしたと考えられる。今回の調査でも、島畑間の水田面が極端に幅の狭いものを確認している。

(2) 京都府内の島畑調査

京都府下での島畑の調査は、第二京阪自動車道路(京都南道路)建設に伴い、京都府八幡市大字内里小字八丁・中島・日向堂において内里八丁遺跡と、久世郡久御山町佐山で佐山遺跡の調査が行われている^(注15)。内里八丁遺跡は旧蜻蛉尻川と呼ばれる現在の防賀川西側を流れる旧河道沿いの自然堤防上(微高地)、佐山遺跡は旧巨椋池と木津川に挟まれた自然堤防上(微高地)に立地する。

内里八丁遺跡・佐山遺跡とも全体が微高地部分を方形に削り出し、削り取った土砂を畑地部分に盛り上げるにより造成されている。内里八丁遺跡では、大小さまざまな島畑(13か所)が検出されている。削り取られ、一段低くなった部分は2段階以上の水田耕作土が認められ、この間には数cmの厚さの洪水による堆積砂層があり、水田の復旧時に掻き上げた痕跡とされている。検出された島畑間の溝は南北方向のものは幅が狭く、東西方向のものは広がっている。水田は東西方向で、南北方向のものは用水路として機能したと考えられる。同様に佐山遺跡でも、島畑間の溝幅が畑地に対して狭く、溝は排水目的としたもので水田とは考えられない。

佐山遺跡の島畑は、14世紀に造成され15世紀には埋没している。条里型地割に対して10°東に振っている。内里八丁遺跡では、13世紀後半から14世紀にかけて造成され、近年まで使用されている。条里型地割に対して8°東に振っている。

(3) 島畑の造成

調査地の北西にあたる現下水主集落周辺に広がる島畑は規模が大きく、調査で検出した島畑とは規模が異なる。早くから自然堤防上が居住域・生産域として利用され、島畑もそれに伴い拡大利用されていたものと考えられる。

島畑の造成、すなわち、微高地を開削し、開削部分を水田として利用するため一段低くし、微高地上を畑地としたのは、水害からの被害をできる限り最小限に抑えるためであり、水害常襲地帯での生産形態と考えられる。水害時には直線的な水田部分が排水路の役目を果たし、畑作物が被害を受けないようにしたものと思われる。しかし、水田面と島畑の平坦面とは高低差が30～40cmしかなく、どれほどの効果があったか疑問である。

微高地開削に伴う谷部分の土砂は湿地部分の造成用土砂としても使用されたと考えられる。また、湿地の肥沃な土砂は耕作土に転用された可能性もある。ただ、湿地上に位置する島畑には微高地を開削した黄褐色粘質土の盛土は認められず、島畑本体を構成する青灰色粘質土が盛土となっている。土層の区別が難しく、調査時には青灰色粘質土を乾燥状態に置くと4～5ヶ月程度で酸化され厚さが30cm以上に達し、微高地を形成する基盤層にも見える状態に変化している。

島畑の標高一覧(第41図)に見られるように、削平された微高地の平坦面は南端のE地区で標高14.6m、D地区の島畑17で14.8m前後、北端のA北地区で14.0m、A地区で13.8m前後となる。微

高地は南が高く、北に向かい緩やかに傾斜し、西側に向かうにつれやや高くなっていく。E 地区の東は湿地になっている。B～A 地区にかけては微高地が一段低くなり、A 北地区で再びやや高くなる。このことは国道24号線を挟んで西側で調査されている新名神高速道路城陽インターチェンジ建設に伴う調査でも同様の傾向が確認されている。

島畑の造成は、まず湿地の排水から行われたと考えられる。湿地の水を落とすために水路を開削して湿地をいったん陸化・乾燥させた後、水田に相当する部分の土砂を掘削し島畑状に盛土する。

調査を行った島畑間の谷部の高低差(第41図)を見ると、坪境ごとに排水方向が特定できる。幹線水路は基本南北方向と考えるが、島畑谷部にかなり高低差が認められることから、排水方向が想定できる。南北方向についてはA北・A地区は南方向、B地区は北方向、C地区は南方向、D地区は島畑16を境にして南と北に分かれる。E地区は南方向である。東西方向も坪境ごとに排水方向が特定できる。A・B地区は西方向、B地区とD地区は島畑16を境にして西方向が観察される。東西方向の島畑は、島畑造成時の排水溝を兼ねるとともに水田耕作時の水位調節を図る土堤として設けられ、島畑間の幅の狭い水田等は、用水路の役目も果たしたと考えられる。

現在も、隣接地の新名神高速道路城陽インターチェンジ建設に伴う調査は行われており、縄文時代以降の遺構や数多くの島畑が検出されている。今後はこれらの調査結果を待ち検討していきたい。
(増田孝彦)

注1 『城陽市史』第一巻 城陽市史編さん委員会 2002

注2 注1に同じ

注3 『山城町史』山城町役場 1987

注4 『城陽市史』第3巻 城陽市史編さん委員会 2002

注5 注1に同じ

注6 中井均「南山城の中世城郭跡」(『機関紙 城』第113号 関西城郭研究会)1982

注7 『日本歴史地名大系 26 京都府の地名』平凡社 1981

注8 関口秀雄ほか「木津川・宇治川低地の地形と過去400年間の水害史」(『京都歴史災害研究』第7号)2007

注9 D地区島畑15基盤層上面堆積土中の木炭(試料1)およびS N19の基盤層上面堆積土中の木炭(試料2)を放射性炭素年代測定作業を株式会社パレオ・ラボに委託した。その結果は次のとおりである。「試料の¹⁴C年代は、1が2540±30yrBP、2が2450±30yrBPで、2点の値は誤差(±1σ)の範囲では一致しないが、かなり近い値である。暦年較正年代(1σ)は、2点の間で重なる範囲が多く、1が縄文時代晩期中葉から後葉頃、2が縄文時代晩期後葉から弥生時代への移行期頃に相当する。試料の炭素含有率はいずれも60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない」

注10 注9に同じ

注11 試料は、島畑17・18間の水田S N17の第25～27・29・30・44・45・50層より採取した堆積物の水洗選別・抽出済み種実遺体15点の計100個である。

中世から現在まで利用されていたS N17の堆積物からは、栽培種のイネ、オオムギ、コムギ、ア

ワ(?)、メロン類、ワタ属が確認された。穀類は、イネの穎が第25層、イネ、オオムギ、コムギの胚乳が第26層、アワ(?)が第45層から確認された。メロン類は、大粒のモルディカメロン型が第27層、モルディカメロン型またはマクワ・シロウリ型、中粒のマクワ・シロウリ型が第26層より確認された。最も多く確認されたワタ属は、江戸時代～明治時代とされる第27層、第54層より多産したほかに、第44層より1個確認された。

栽培種を除いた分類群は、木本が極めて少なく、圧倒的な草本主体の組成を示す。開発が進んだ草地化の影響と示唆される。木本は、本地域に分布する常緑広葉樹林(照葉樹林)の主要種である常緑高木のクスノキ?と、照葉樹林内の林床に生育する常緑低木～小高木のヒサカキが確認された。これらは遺跡周辺域の照葉樹林内に生育していたと考えられる。

草本は、人里植物に属する分類群が多く、水湿地生植物が大半を占める。水湿地生植物は、抽水性のイヌホタルイ近似種やホタルイ近似種を含むホタルイ属が最も多く、沈水性のイトトリゲモ近似種が次ぎ、ホッスモ、スプタ、抽水性～湿生のオモダカ属、湿生のヌカスケ類、タカサブロウなども確認された。その他に、オヒシバ、エノコログサ属、メヒシバ属?、イヌビエ属?、イネ科、スゲ属、イヌタデ近似種、サナエタデ近似種、タデ属、アカザ属、ヒユ属、アブラナ科、マメ科、カタバミ属、エノキグサ、スマレ属、アカネ科、オミナエシ属などの湿った場所にもやや乾いた場所にも生育する中生植物が確認された。第45層から第25層まで(試料数が少ない第27層を除く)の堆積場は、水深が浅い(1～2m以内)水湿地環境と推定される。出土遺構が耕作地であることを踏まえると、水湿地生植物は水田雑草に、やや乾いた場所にも生育可能な中生植物は畠雑草に由来する可能性も考えられる。栽培植物の産状を含め、当該期の調査区の景観や環境を考える上で興味深い結果といえる。また、第45層と第50層では、抽水性のホタルイ属と沈水性のイトトリゲモ近似種がともに多いのに対し、第44層ではホタルイ属の多産が続き、イトトリゲモ近似種が減少する。第30層、第29層になると、ホタルイ属が減少し、イトトリゲモ近似種が優勢となる。このような組成の違いは、各時期の耕作地形成期の水文の条件の違いや、耕作地の利用履歴の違いを反映している可能性がある。

注12 D地区の水田S N19の第87層ら出土した生材1点と、S N20第76層から出土した炭化材1点の、計2点である。測定を行った試料について、 2σ 暦年代範囲(確率95.4%)に着目して結果を整理する。

第87層から出土した試料No.27 (PLD-27124) は、1475-1529 cal AD (34.1%) および1543-1635 cal AD (61.3%) で、15世紀後半～17世紀前半の暦年代を示した。これは、室町時代から江戸時代前期に相当する。S N20第79層から出土した試料No.49 (PLD-27125) は、1447-1515 cal AD (79.6%) および1600-1618 cal AD (15.8%) で、15世紀中頃～17世紀前半の暦年代を示した。これは、室町時代から江戸時代前期に相当する。

注13 注12に同じ

注14 試料は、C地区南壁およびD地区東壁の調査壁面より採取された堆積物、計10点である。

周辺植生を反映する木本類についてみると、C地区第19層(サンプル4)～第12層(サンプル5)までいずれも類似した組成を示しており、マツ属複雑管束亜属が多産あるいは優占する。マツ属複雑管束亜属(いわゆるニヨウマツ類)は極端な陽樹であり、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。よって、当時の調査地点周辺に二次林や植林としてのマツ属が生育していたと推測される。それ以外にはモミ属、ツガ属、スギ属等の針葉樹、クマシデ属-アサダ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などの常緑広葉樹などが、周辺域に生育していたことが窺える。特にC地区第10層(サンプル1・2)・D地区第54層(サンプル9)ではハンノキ属の割合が高くなる。ハンノキ属は河畔や低湿地などの適湿地に生育

する種類を含むことから、木津川などの周辺河川沿いにハンノキ属が増加した可能性がある。

草本植生の変化についてみると、C 地区第19層(サンプル4)～第12層(サンプル5)では、イネ科が多産し、カヤツリグサ科、ヨモギ属等を伴う。これらはいずれも開けた明るい場所に生育する「人里植物」を含む分類群であることから、当時の周辺域の草本植生を反映していると推測される。また、ガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属、サンショウモ、アカウキクサ属などの水湿地生草本・シダ類も検出されることから、これらが生育する水湿地の存在も窺える。栽培種としてはソバ属が検出されることから、ソバの栽培・利用も想定される。

C 地区第12層(サンプル6)～D 地区第24層では、イネ科が多産～優占し、カヤツリグサ科、ナデシコ科、ヨモギ属などの人里植物や、ガマ属、ミズアオイ属、タヌキモ属、サンショウモなどの水湿地生植物も認められる。よって、基本的には同様の草本植生が続いていたと考えられる。

なお、多産するイネ科にはイネ属型花粉も含まれる。本調査区で実施された種実分析では、中世以降の島畑から、栽培種のイネ、オオムギ、コムギ、アワ(?)、メロン類、ワタ属などの穎、胚乳、果実、種子が確認されている。これを踏まえると、多産するイネ科花粉も栽培種のイネに由来する可能性が高い。その他の栽培種・栽培の可能性のあるものでは、ソバ属、ナス属、キュウリ属、ベニバナ属などが挙げられ、イチビ属などは植栽されていた可能性もある。

注15 森下 衛ほか「内里八丁遺跡Ⅱ」(『京都府遺跡調査報告書』第30冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

奥村清一郎ほか「佐山遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第33冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003

<参考文献>

文化庁『農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究』(平成15年度) 2003

付表1 島畑規模一覧表

地区	島畑番号	規模（上端・m）		規模（下端・m）		溝からの高さ（m）	標高（島畑上面・m）	方向	備考
		幅	検出長	幅	検出長				
A北地区	島畑13	13.5	4.4	16.0	5.0	0.9	14.0	東西	島畑中央に耕作溝1条
	島畑14	7.5	4.0	7.9	4.2	0.9	14.0	東西	
A地区	島畑1	—	—	12.0以上	4.0以上	0.84	—	東西	裾のみ確認
	島畑2	9.5以上	2.0以上	11.0以上	4.5以上	0.7	13.8	東西	
	島畑3	6.0以上	1.5以上	8.0以上	3.5以上	1.0	14.0	東西	
B地区	島畑4	7.0	40.0以上	14.0以上	44.0以上	1.2	14.4	南北	島畑中央に耕作溝1条
	島畑5	9.5	46.0以上	14.0	49.0以上	1.2	14.0	南北	島畑肩部に耕作溝1条
	島畑6	13.5以上	3.5以上	16.0	5.0以上	1.06	14.0	東西	一部G地区に及ぶ
C地区	島畑7	6.0	75.0以上	10.0	77.0以上	0.8	14.5	南北	島畑中央に導水用の水路 一部D地区に及ぶ
	島畑8	3.0	28.0以上	3.0～10.0	31.0以上	0.7	14.4	南北	一部D地区に及ぶ
	島畑9	2.0以上	5.6以上	20.0以上	8.0以上	0.6	14.0	南北	島畑中央に耕作溝1条
D地区	島畑15	6.0	18.0以上	10.0	22.0以上	0.8	14.4	東西	
	島畑16	5.0	30.0以上	9.0	32.0以上	0.8	14.4	東西	
	島畑17	4.0	53.0以上	9.0以上	53.0以上	0.8	14.8	南北	一部C地区に及ぶ
	島畑18	12.5	65.5以上	16.5	66.0以上		14.4	南北	一部C地区に及ぶ
	島畑19	1.5	59.0以上	6.0	63.0以上		14.1	南北	大半C地区に及ぶ
	島畑20	8.0	61.0以上	11.0	63.0以上		14.3	南北	大半C地区に及ぶ
	島畑21	9.0	48.0	12.0	52.0		14.4	南北	大半C地区に及ぶ
E地区	島畑10	1.6	28.6以上	3.0	23.0以上	0.8	14.8	南北	島畑肩部に耕作溝1条
	島畑11	3.0	16.0以上	6.0	17.0以上	0.6	14.6	南北	
	島畑12	2.0	10.0以上	5.0	10.6以上	0.4	14.4	南北	

付表2 出土土器観察表

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	成形調整等	備考
1	弥生土器	壺	A地区	SN01第7層	—	(2.2)	7.1	—	内面：灰色 (N5/0) 外面：浅黄橙色 (10YR8/4)	やや粗	内：ナデ 外：ケズリ後ナデ	中期か
2	瓦器	椀	A北地区	SN12直上	(13.3)	(3.9)	—	1/12	暗灰色 (N3/0)	密	内：ミガキ 外：ユビオサエ	13c後半
3	瓦器	椀	A北地区	島畑13 SD07	9.5	3.8	—	2/12	灰色 (N4/0)	密	内：ミガキ 外：ユビオサエ	大和型、14c
4	土師器	羽釜	A北地区	SN12	(24.0)	(3.2)	—	—	灰褐色 (7.5YR6/2)	粗	内：ナデ 外：ナデ	
5	陶器	天目椀	A北地区	SN13第10層	—	(3.5)	3.9	—	黒褐色	密		美濃瀬戸陶器、鬼板化粧、16c後半
6	土師器	皿	B地区	島畑4第11層	5.8	1.1	—	4/12	黒褐色 (7.5YR3/1)	密	内：ナデ 外：ユビオサエ	
7	染付磁器	椀	B地区	東壁精査	7.6	(3.4)	—	—	地：灰白色 絵付：明緑灰色	密		口縁端部外反、肥前磁器、花文、17C中
8	弥生土器	壺	B地区	SX102	—	(9.8)	—	8/12	内面：灰白色 (2.5Y8/11)～橙色 (7.5YR7/6) 外面：橙色 (7.5YR7/6)～浅黄橙色 (10YR8/3)	やや粗	内：ナデ 外：キザミ、櫛描き波状文、刺突文、ミガキ	後期
9	弥生土器	壺	B地区	SX104	11.7	(22.0)	(3.6)	9/12	内面：褐灰色 (10YR4/1) 外面：明赤褐色 (2.5YR5/8)	粗		図上復元、摩滅著しい、後期

一般国道 24 号金尾交差点改良事業関係遺跡平成 24・25 年度発掘調査報告

10	縄文土器	深鉢	B 地区	島畑 4 北端第 2 4 層	(27.0)	(2.8)	-	1/12	内面：にぶい黄褐色 (10YR5/3) 外面：黒褐色 (7.5YR3/2)	粗		外面口縁端部に縦方向の細い溝あり、晩期
11	縄文土器	深鉢	B 地区	島畑 4 北端第 2 4 層	27.0	(7.6)	-	2/12	褐色～黒褐色 (7.5YR4/3～3/2)	粗	ケズリ	晩期
12	縄文土器	深鉢	B 地区	島畑 4 北端第 2 4 層	-	-	-	-	内面：にぶい褐色 (7.5YR4/4) 外面：褐色 (7.5YR5/4)	粗		晩期
13	縄文土器	深鉢	B 地区	島畑 4 北端第 2 4 層	-	-	-	-	内面：褐色 (7.5YR4/3) 外面：黒褐色 (7.5YR3/2)	粗		晩期
14	縄文土器	深鉢	B 地区	島畑 4 北端第 2 4 層	-	-	-	-	内面：暗褐色 (7.5YR3/3) 外面：褐色 (7.5YR4/3)	粗		晩期
17	土師器	皿	C 地区	SN05	5.7	0.7	-	5/12	橙色 (2.5YR7/6)	密	内：ナデ 外：ユビオサエ	
18	土師器	皿	C 地区	SN05	6.7	(1.1)	-	4/12	内面：褐灰色 (10YR5/1) 外面：にぶい黄橙色 (10YR7/2)	やや粗	内：ナデ	
19	土師器	皿	C 地区	島畑 7 SD208	7.5	(0.9)	-	3/12	淡赤橙色 (2.5YR7/4)	やや粗	内：ナデ 外：ナデ	
20	土師器	皿	C 地区	SN06	7.2	1.0	-	4/12	淡橙色 (5YR8/4)	密	内：ナデ 外：ユビオサエ	
21	土師器	皿	C 地区	重機掘削中	8.3	1.6	-	完形	灰白色 (5Y7/1)	密	内：「の」字ナデ、ユビオサエ	鎌倉時代、13c 前半
22	土師器	皿	C 地区	SN05	8.1	1.2	-	1/12	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	やや粗	ナデ	
23	土師器	皿	C 地区	東壁精査	8.7	0.9	-	1/12	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	密	外：ナデ	コースター型
24	瓦器	椀	C 地区	SN05 第 45 層	11.3	(3.2)	-	1/12	内面：暗灰色 (N3/0) 外面：灰色 (N4/0)	密	内：ミガキ 外：ユビオサエ	13c
25	瓦器	椀	C 地区	SN06 南端	12.9	(3.4)	-	1/12	灰白色 (2.5Y8/2)	密	外：ユビオサエ	摩滅著しい、13c
26	瓦器	椀	C 地区	島畑 7 SD208	12.8	(3.9)	-	3/12	灰色 (N4/0)	密	内：ミガキ 外：ユビオサエ	13c
27	瓦器	椀	C 地区	SN05 第 45 層	14.2	(2.4)	-	1/12	灰白色 (N8/0)	密	内：ミガキ 外：ユビオサエ	口縁端部内側に沈線、大和型、13c
28	瓦器	椀	C 地区	島畑 7 SD208	13.0	(3.5)	-	1/12	灰色 (N5/0～4/0)	密	内：ミガキ 外：ユビオサエ	13c
29	瓦器	椀	C 地区	島畑 7 SD208	12.7	(4.5)	-	2/12	暗灰色 (N3/0)	密	内：ミガキ 外：ユビオサエ	13c
30	瓦器	椀	C 地区	島畑 7 SD208	12.1	(2.8)	-	1/12	灰白色 (2.5Y8/1)	密	内：ミガキ 外：ユビオサエ	13c
31	瓦器	椀	C 地区	島畑 7 SD208	11.3	(2.9)	-	1/12	暗灰色 (N3/0)	密	内：ミガキ 外：ユビオサエ	摩滅著しい、13c
32	瓦質土器	三足鍋	C 地区	SN05 第 45 層	-	(9.5)	-	-	暗灰色 (N3/0)	やや粗	ナデ	
33	土師器	釜	C 地区	SN05 北側精査中	18.5	(2.8)	-	1/12	内面：浅黄橙色 (7.5YR8/3) 外面：にぶい褐色 (7.5YR5/3)	やや粗	内：ナデ 外：ユビオサエ	
34	土師器	釜	C 地区	島畑 7 SD208	22.6	(3.0)	-	1/12	内面：灰白色 (10YR7/1) 外面：褐灰色 (10YR6/1)	やや粗	内：ナデ 外：ナデ	煤付着、口縁端部は淡赤橙色を呈す
35	土師器	釜	C 地区	島畑 7 SD208	22.5	(3.6)	-	1/12	内面：灰白色 (10YR8/2) 外面：淡赤橙色 (2.5YR7/4)	やや粗	内：ナデ 外：ナデ	
36	土師器	羽釜	C 地区	島畑 7 SD208	20.4	(3.8)	-	1/12	内面：灰白色 (10YR8/2) 外面：浅黄橙色 (7.5YR8/3)	やや粗	内：ナデ 外：ナデ	煤付着

37	土師器	羽釜	C地区	島畑7 SD208	-	(4.3)	-	-	内面：にぶい褐色 (7.5YR5/3) 外面：灰褐色 (7.5YR5/3)	やや粗	内：ナデ 外：ナデ	煤付着
38	陶器	甕	C地区	島畑7 SD207	28.4	(5.0)	-	-	内面：灰色 (N5/0) 外面：灰白色 (N7/0)	密	回転ナデ	常滑か、13c か
39	青磁	坏	C地区	重機掘削中	16.0	(2.7)	-	2/12	緑灰色	密		龍泉窯、蓮弁文、 13c 後半～14c 前半
40	白磁	椀	C地区	SN05 第48 層	-	(2.8)	6.5	-	灰白色	密		見込みに櫛描文、 12c
41	褐釉陶器	椀	C地区	島畑 7SD207	-	(4.6)	6.2	-	暗茶褐色	密		中国製
42	陶器	椀	C地区	島畑7 SD207	-	(1.6)	4.3	-	淡緑灰色	密		古瀬戸
43	陶器	天目 椀	C地区	東壁第5・ 10層	12.3	5.4	-	1/12	暗褐色	密		美濃瀬戸陶器、 16c
44	陶器	皿	C地区	東壁第5・ 10層	11.8	(2.4)	-	2/12	灰緑色	密		肥前陶器、17c 初 頭
45	陶器	皿	C地区	東壁第5・ 10層	-	(0.9)	4.8	-	灰白色	密		見込みに砂目、肥 前陶器、17c 前半
46	陶器	椀	C地区	重機掘削中	8.8	(7.1)	4.2	2/12	浅黄色	精良		肥前陶器、17c 後 半
47	青花磁器	椀	C地区	南端部重機 掘削	-	(3.7)	-	11/12	地：灰白色 絵付： 淡青色	精良		中国製、靈芝文、 15c 後半～16c 前 半
57	土師器	皿	D地区	SN19	6.8	1.3	-	4/12	淡赤橙色 (2.5YR7/3)	やや粗	内：ナデ 外：ケズリ、ナデ	
58	土師器	皿	D地区	重機掘削中	6.9	1.3	-	4/12	浅黄橙色 (10YR8/3)	密、 精良	内：ナデ 外：ユビオサエ	
59	土師器	皿	D地区	SN19	9.1	(1.1)	-	2/12	橙色 (7.5YR7/6)	やや粗	ナデ	
60	土師器	皿	D地区	重機掘削中	9.3	1.7	-	3/12	内面：浅黄橙色 (7.5YR8/3) 外面：にぶい黄 橙色～灰白色 (10YR7/2～7/1)	密、 精良	内：ナデ 外：ユビオサエ	
61	土師器	皿	D地区	SN17	6.8	0.9	-	2/12	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	密	内：ナデ 外：ユビオサエ	
62	土師器	皿	D地区	島畑18の 北東谷部	8.1	(1.0)	-	1/12	淡橙色 (5YR8/4)	密	ナデ	
63	土師器	皿	D地区	SD331	9.5	1.5	-	1/12	黄灰色 (2.5Y4/1)	密、 精良	内：ナデ 外：ナデ	
64	土師器	皿	D地区	SN19	11.2	(1.8)	-	2/12	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	密、 精良	内：ナデ 外：ユビオサエ	燈皿か
65	瓦器	皿	D地区	SD309	7.9	1.0	-	2/12	灰白色 (N7/0)	密	内：ミガキ 外：ユビオサエ	
66	土師器	皿	D地区	SN21	10.9	(2.4)	-	1/12	灰黄色 (2.5Y7/2)	密、 精良	内：ナデ 外：ユビオサエ	
67	土師器	台付 皿	D地区	SN20	-	(2.8)	-	-	浅黄橙色 (10YR8/3)	密	ナデ	
68	瓦器	椀	D地区	SD315	13.7	(3.0)	-	1/12	灰白色 (N8/0)	密		摩滅著しい、13c
69	瓦器	椀	D地区	島畑16第 61層	13.9	(2.2)	-	1/12	暗灰色 (N3/0)	密	内：ミガキ 外：ユビオサエ	13c
70	瓦器	椀	D地区	SN17	12.9	(3.0)	-	1/12	灰白色 (2.5Y8/1)	密		摩滅著しい、13c
71	瓦器	椀	D地区	SN17	13.9	2.7	-	2/12	内面：黒色 (N2/0) 外面：灰白色 (N7/0)	密	内：ミガキ 外：ユビオサエ	13c
72	瓦器	椀	D地区	SN20	-	(1.3)	3.9	-	暗灰色 (N3/0)	密	内：ミガキ	摩滅、13c
73	土師器	羽釜	D地区	SN19 第95 層	-	16.5	(2.1)	1/12	灰白色 (10YR8/2)	やや粗	内：ナデ	外面摩滅著しい
74	土師器	羽釜	D地区	SD351	21.7	(3.1)	-	-	にぶい橙色 (5YR7/4)	やや粗	ナデ	13c
75	瓦質土器	羽釜	D地区	SN19 第51 層	-	(4.6)	-	-	暗灰色 (N3/0)	やや粗	内：ナデ 外：ナデ、ハケ	
76	青磁	椀	D地区	SN14	(14.1)	(2.4)	-	1/12	濃い緑灰色	密		龍泉窯、雷文、 15C

一般国道 24 号金尾交差点改良事業関係遺跡平成 24・25 年度発掘調査報告

77	白磁	碗	D 地区	SN21 第 54 層	16.8	(4.0)	-	1/12	灰白色	密		玉緑、12c
78	白磁	皿	D 地区	SN19 第 87 層	-	(1.1)	3.5	-	淡灰緑色	密		
79	須恵器	杯	D 地区	SN21 第 63 層	-	(1.3)	11.7	-	明青灰色 (5PB7/1)	密	内：回転ナデ 外：ヘラ切り、回転ナデ	杯 B、8c 後半
80	須恵器	杯	D 地区	SD309	15.2	4.6	9.9	1/12	灰色 (N6/0)	密	回転ナデ	杯 B、9c
81	土師器	皿	D 地区	SD331	14.5	3.3	-	11/12	灰白色 (10YR8/2)	粗	内：ナデ 外：ユビオサエ	摩滅著しい、10c
82	土師器	皿	D 地区	SD331	14.5	2.9	-	11/12	橙色 (2.5YR7/6)	やや粗	内：ナデ 外：ユビオサエ	摩滅著しい、10c
83	土師器	皿	D 地区	SD331	15.1	3.1	-	7/12	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	やや粗	内：ナデ 外：ユビオサエ	摩滅著しい、10c
84	土師器	皿	D 地区	SD331	15.3	3.5	-	完形	内面：浅黄橙 (7.5YR8/3) 外面：橙色 (5YR7/6)	やや粗	内：ナデ 外：ユビオサエ	10c
85	土師器	甕	D 地区	SN19 埋土中	17.6	(1.1)	-	1/12	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	やや密	ナデ	
86	弥生土器	甕	D 地区	SD353	-	(3.5)	5.7	-	内面：にぶい黄橙色 (10YR7/2) 外面：明褐色～黒褐色 (7.5YR7/2～3/1)	粗	外：ケズリ	摩滅著しい、後期
87	弥生土器	甕	D 地区	SD353	-	(1.9)	4.3	-	内面：黒色 (10YR2/1) 外面：灰黄褐色～橙色 (10YR6/2～2.5YR7/8)	やや粗	内：ハケ	摩滅著しい、後期
88	弥生土器	甕	D 地区	SD336	-	(2.1)	4.1	-	内面：にぶい橙色 (7.5YR7/3) 外面：褐灰色 (10YR4/1)	やや粗	内：ナデ 外：タタキ、ナデ	後期
89	弥生土器	甕	D 地区	SD353	16.5	(4.3)	-	2/12	内面：灰白色 (2.5Y7/1) 外面：灰白色 (7.5YR8/2)	やや粗	内：ケズリ 外：斜め平行タタキ	摩滅著しい、後期もしくは庄内期
90	弥生土器	甕	D 地区	SD335	15.3	(4.5)	-	-	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	粗	内：ヨコナデ、ケズリ 外：タタキ	後期もしくは庄内期
91	縄文土器	深鉢	D 地区	鳥畑 16 直上	(29.2)	(4.5)	-	1/12	内面：褐灰色 (10YR5/1) 外面：灰黄褐色 (10YR6/2)	やや粗		晩期
92	土製品	鞆羽口	D 地区	鳥畑 17 上重機掘削	-	-	-	-	赤褐色 (10R4/4)、赤橙色 (10R6/6)、灰褐色 (7.5YR6/2)	やや粗		
98	瓦器	碗	E 地区	SN09	10.5	(3.5)	-	1/12	暗灰色 (N3/0)	密	内：ミガキ 外：ユビオサエ	13c 末～14c
99	瓦器	碗	E 地区	SN09	12.1	(2.5)	-	1/12	灰白色 (N8/0)	密		摩滅著しい、13c
100	瓦器	碗	E 地区	鳥畑 11 上面	12.7	(2.8)	-	2/12	内面：灰色 (N6/0) 外面：黒色 (N2/0)	密	内：ミガキ	13c
101	瓦器	碗	E 地区	SD406	-	(0.9)	5.0	-	暗灰色 (N3/0)	密		摩滅著しい
102	青磁	碗	E 地区	北壁精査	13.4	(2.8)	-	1/12	緑灰色	密		外面連弁文か、14c
103	青磁	碗	E 地区	SN08 第 61 層	15.0	(4.2)	-	1/12	緑灰色	密		龍泉窯、雷文、15c
104	須恵器	杯	E 地区	SN09	-	(1.1)	8.4	- L2	灰白色 (N6/0)	密	内：回転ナデ 外：ケズリ	杯 B
105	瓦質土器	香炉	E 地区	南壁精査	-	(1.9)	(8.0)	-	黒色 (N2/0)	密	内：ナデ、ケズリ 外：ケズリ、ナデ	
106	瓦質土器	羽釜	E 地区	SN09	-	(1.8)	-	-	黒色 (N2/0)	密	内：ハケ 外：ナデ	
107	瓦質土器	羽釜	E 地区	SN10 第 61 層	(28.8)	(3.5)	-	1/12	黒色 (N2/0)	やや粗	内：ナデ、ハケ 外：ナデ	

※口径欄の記号 推定復元径、()：復元径。

※器高欄の記号 残存高：() 破片の長さ：[]

・小数点第 2 位を四捨五入、第 1 位で表示

付表3 出土瓦観察表

報告番号	種類	文様	地区	出土地点	長さ (cm)	幅・径 (cm)	厚さ (cm)	色調	胎土	備考
93	平瓦	-	D地区	SD309	(7.5)	(9.5)	(2.0)	橙色～明赤褐色 (5YR6/6～5YR5/6)	やや粗	
94	軒丸瓦	巴文か	D地区	SN14 掘削	-	-	-	灰白色～灰色 (N8/0～N4/0)	やや密	近世
108	平瓦	-	E地区	包含層	(11.0)	(12.5)	2.1	上面：灰色 (N4/0) 下面：灰白色 (N7/0)	密	中世以前

・小数点第2位を四捨五入、第1位で表示
 ・/：計測不能、-：該当部位なし

付表4 出土石製品観察表

報告番号	種類	地区	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
55	石鏃	C地区	鳥畑8	2.2	1.5	2.8	7.0	サヌカイト
56	石鏃未成品	C地区	SN05 第48層	4.2	6.4	0.7	19.5	サヌカイト 弥生中期
95	石鏃未成品	D地区	SD353	2.7	4.8	1.0	9.9	サヌカイト
96	石鏃	D地区	鳥畑15 南直上	3.5	2.4	7.3	4.0	サヌカイト 弥生
97	石鏃	D地区	SN17	2.6	2.1	4.3	1.3	サヌカイト 縄文

付表5 出土木製品観察表

報告番号	種類	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	長さ	幅	高さ・厚さ	色調	備考
48	漆器椀	C地区	西壁第5・10層	-	(3.5)	4.6	-	-	-	-	外：黒漆塗 朱漆で施文 内：朱漆塗	
49	漆器椀	C地区	重機荒掘り	12.4	-	6	1/4	-	-	-	外：黒漆塗 内：朱漆塗	
50	漆器椀	C地区	重機荒掘り	12.0	(4.15)	5.2	-	-	-	-	朱漆塗	黒漆の上に赤漆を塗る
51	漆器椀	C地区	南端部重機掘削	-	(5.9)	4.45	-	-	-	-	黒漆塗	
52	不明	C地区	重機荒掘り	-	-	-	-	17.2	5.55	1.2		
53	不明	C地区	重機荒掘り	-	-	-	-	10.4	3.65	1.15		木取りは不明瞭
54	不明	C地区	重機荒掘り	-	-	-	-	11.35	2.35	1.65		加工痕

圖 版

下水主遺跡第 2 次



(1) A 地区調査前の状況(南西から)



(2) B 地区調査前の状況(南から)



(1) C 地区調査前の状況(南西から)



(2) E 地区調査前の状況(東から)



(1) A 北地区調査前の状況(北から)



(2) D 地区調査前の状況(北西から)

下水主遺跡第 2 次



(1) A 地区全景 (北から)



(2) A 地区全景 (南から)

下水主遺跡第 2 次



(1) A 地区島畑 1・2 西壁断面(南東から)



(2) A 地区島畑 2 断面(北東から)

下水主遺跡第 2 次



(1) B 地区島畑 4・5 全景(南から)



(2) B 地区島畑 4 全景(南から)

下水主遺跡第 2 次



(1) B 地区北西拡張部島畑 6 全景 (北東から)



(2) B 地区島畑 5 南拡張部全景 (東から)

下水主遺跡第 2 次



(1) B 地区島畑 4 北側検出遺構
(北西から)



(2) B 地区島畑 4 土坑 S K105
(南西から)

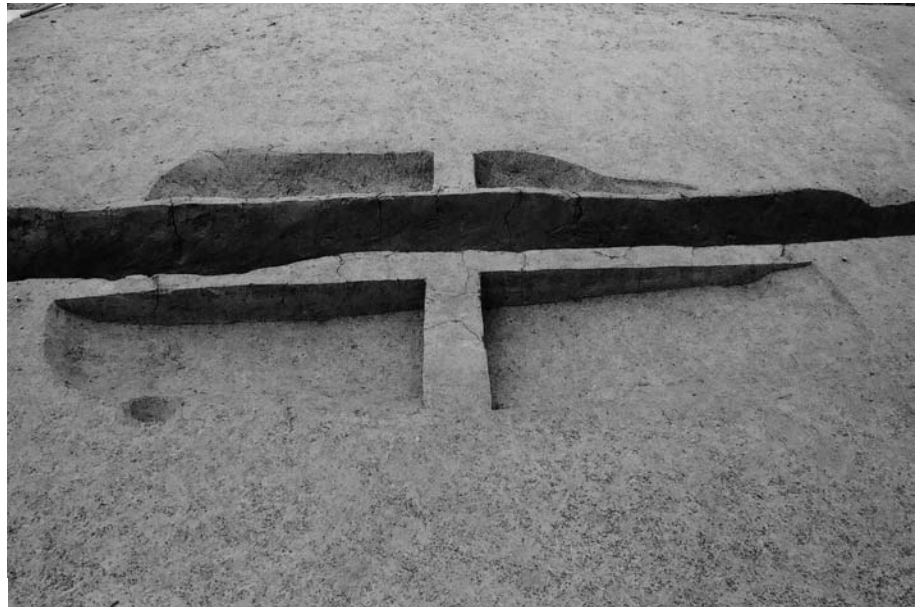


(3) B 地区島畑 4 溝 S D109
(南から)

下水主遺跡第 2 次



(1) B 地区島畑 4 溝 S D 109
断面 B - B' (南東から)



(2) B 地区島畑 4 土坑 S X 107
(西から)



(3) B 地区島畑 4 南壁断面
(北東から)

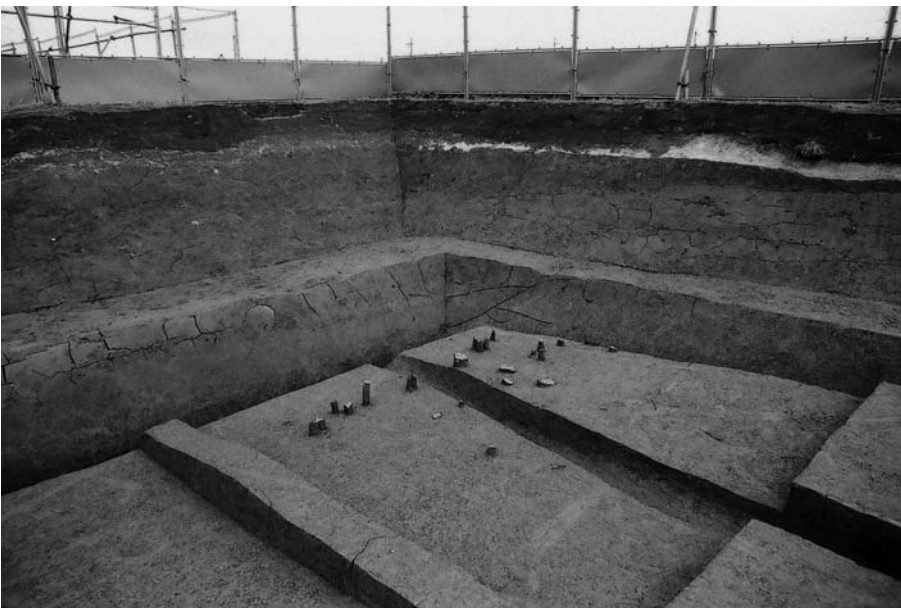
下水主遺跡第 2 次



(1) B 地区島畑 4 土坑 S K102
遺物出土状況(西から)



(2) B 地区島畑 4 土坑 S K102
完掘状況(北から)



(3) B 地区島畑 4 縄文土器出土状況
(南西から)

下水主遺跡第 2 次



(1) C 地区全景(北西から)



(2) C 地区全景(北から)

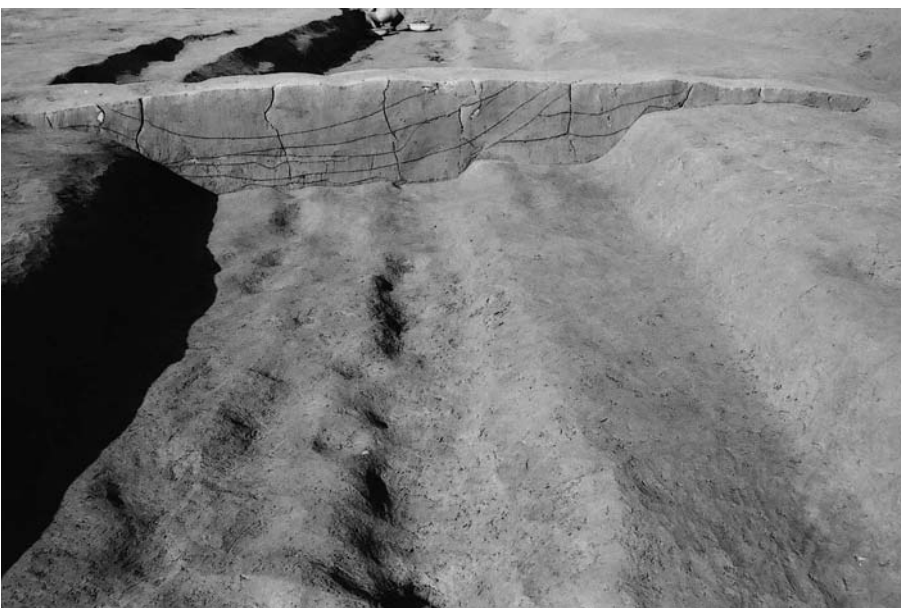
下水主遺跡第 2 次



(1) C 地区北壁断面(南から)



(2) C 地区南壁断面(北東から)



(3) C 地区島畑 7 溝 S D 207 ~ 209
断面 F - F' (南から)

下水主遺跡第 2 次



(1) C 地区島畑 7 溝 S D 207 ~ 209
断面 G - G' (南から)

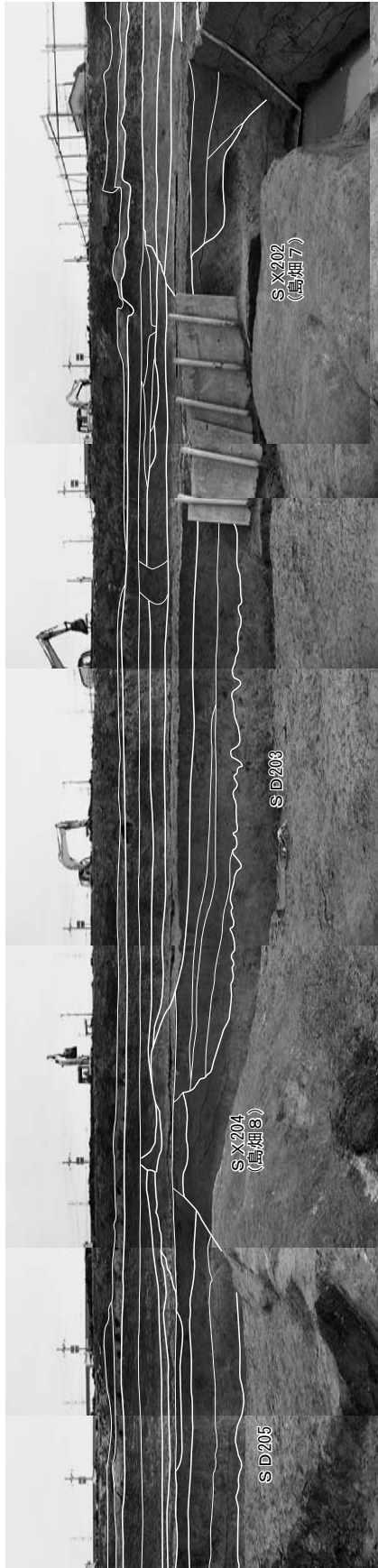


(2) C 地区島畑 7 溝 S D 207 ~ 209
断面 H - H' (南から)



(3) C 地区島畑 7 溝 S D 207 ~ 209
断面 I - I' (南から)

下水主遺跡第 2 次



南壁断面



北壁断面



北壁断面

水主神社東遺跡第 3 次



(1) E 地区全景(東から)



(2) E 地区全景(西から)

水主神社東遺跡第 3 次

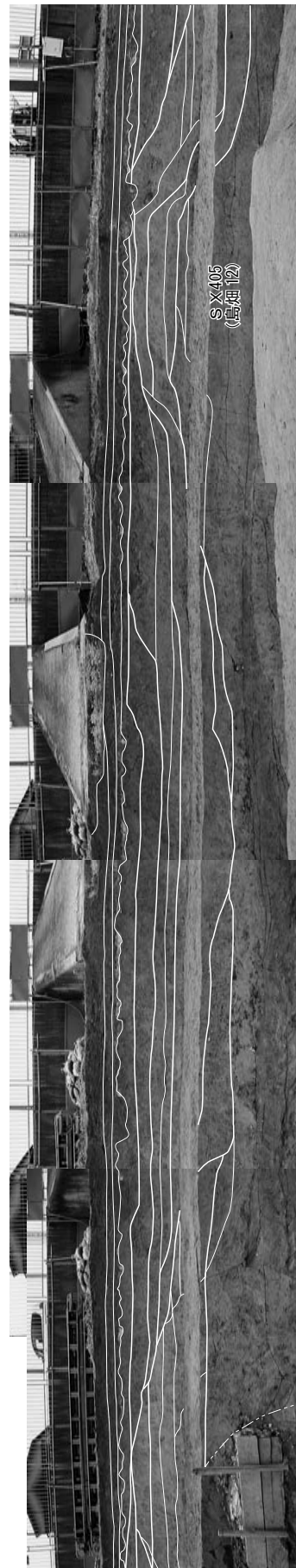
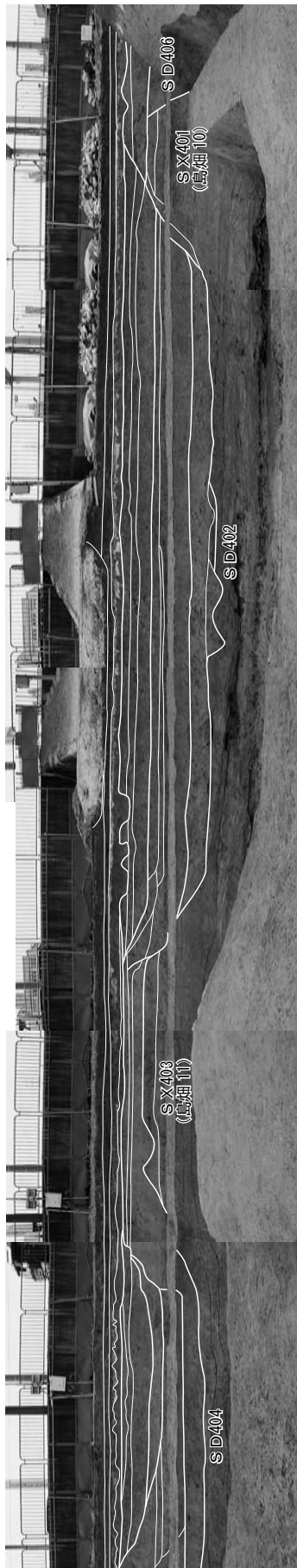


(1) E 地区島畑10・11・12全景(北西から)



(2) E 地区島畑10溝 S D 406全景(北から)

水主神社東遺跡第 3 次



E地区南壁断面(合成写真、北から)

下水主遺跡第 2 次・水主神社東遺跡第 3 次



(1) A 地区微高地下層断ち割り
(東から)



(2) B 地区微高地下層断ち割り
(東から)



(3) E 地区微高地下層断ち割り
(東から)

下水主遺跡第 3 次



(1) A 北地区全景(北から)



(2) A 北地区全景(南から)

下水主遺跡第 3 次



(1) A北地区島畑13近景(南東から)



(2) A北地区島畑14近景(東から)

水主神社東遺跡第 4 次



(1) D 地区全景(北から)



(2) D 地区全景(上が東)

水主神社東遺跡第 4 次



(1) D 地区全景 (北西から)



(2) D 地区全景 (南東から)

水主神社東遺跡第 4 次



(1) D 地区島畑 8・15・16 全景(西から)



(2) D 地区島畑 8・15・16 全景(東から)

水主神社東遺跡第 4 次



(1) D 地区島畑17全景(北から)



(2) D 地区島畑18溝 S D 352全景(南から)

水主神社東遺跡第 4 次



(1) D 地区島畑18全景(北から)



(2) D 地区島畑18全景(南から)

水主神社東遺跡第 4 次



(1) D 地区水田 S N16 全景(南から)



(2) D 地区水田 S N16 全景(北から)

水主神社東遺跡第 4 次



(1) D 地区島畑17断ち割り
(南東から)

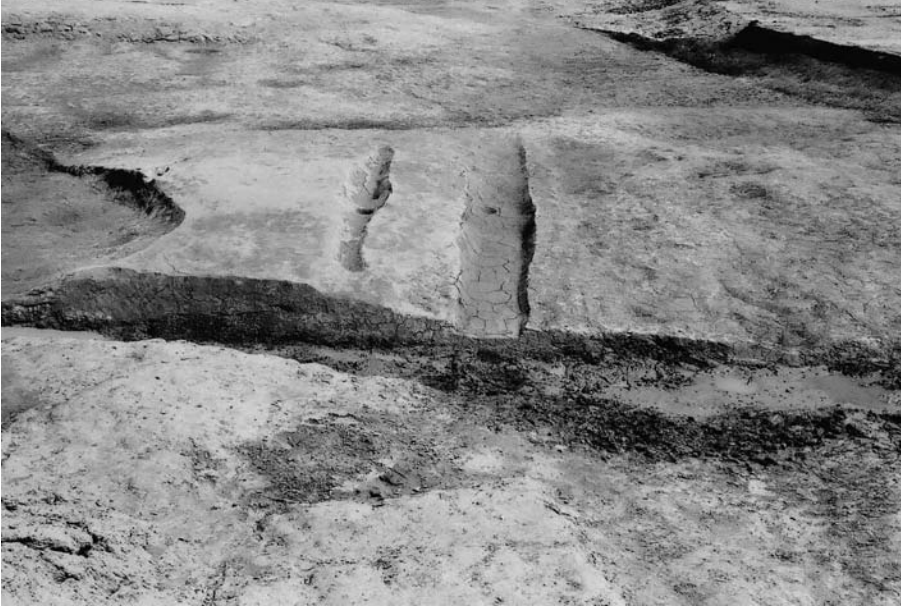


(2) D 地区水田 S N16断面
(南西から)



(3) D 地区島畑18断面(南から)

水主神社東遺跡第 4 次



(1) D 地区島畑 8 溝 S D 345 ~ 347
全景(北から)



(2) D 地区島畑 15 溝 S D 342・343
全景(東から)



(3) D 地区島畑 16 溝 S D 331 全景
(西から)

水主神社東遺跡第 4 次



(1) D 地区島畑16溝 S D 331 近景
(西から)



(2) D 地区島畑16溝 S D 331
遺物出土状況(北から)



(3) D 地区島畑19溝 S D 368 全景
(北から)

水主神社東遺跡第 4 次



(1) D 地区島畑 8 溝 S D345 断面
(南から)



(2) D 地区島畑 8 溝 S D346 断面
(南から)



(3) D 地区島畑 15 溝 S D342・343
断面(西から)

水主神社東遺跡第 4 次

(1) D 地区島畑16溝 S D 331
(南東から)



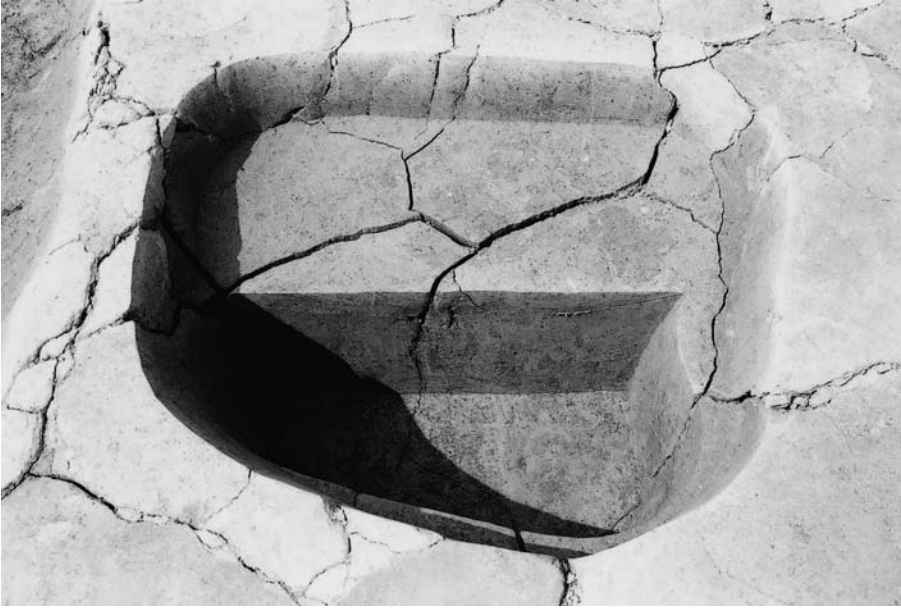
(2) D 地区島畑18溝 S D 308・323・
324断面(南から)



(3) D 地区島畑18溝 S D 351・352
断面(南から)



水主神社東遺跡第 4 次



(1) D 地区島畑 17 柱穴 S P 354
(南から)



(2) D 地区溝 S D 349・353 全景
(西から)



(3) D 地区溝 S D 349・353 全景
(北から)

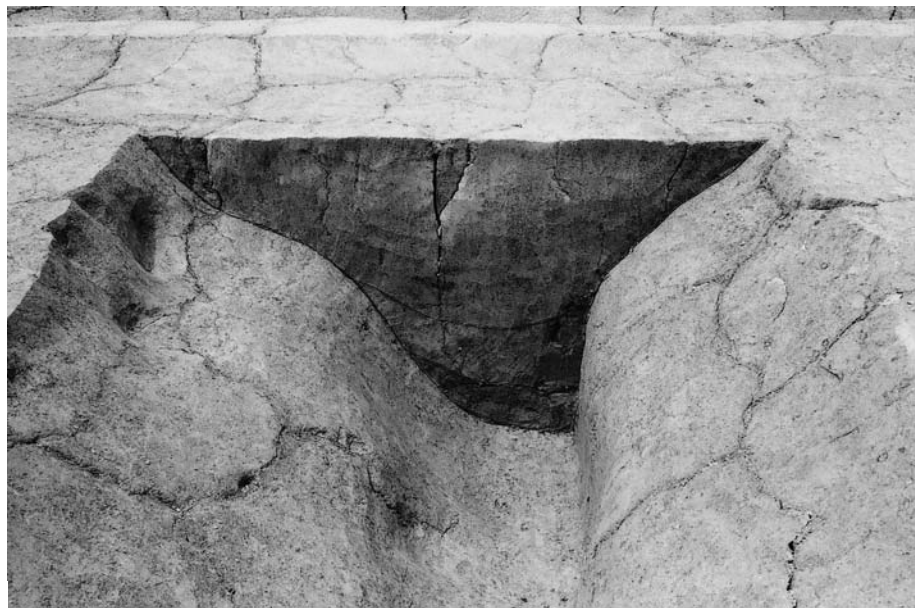
水主神社東遺跡第 4 次



(1) D 地区溝 S D 335・336・349・353 全景 (東から)



(2) D 地区溝 S D 335・336 全景 (東から)



(3) D 地区溝 S D 336 断面 (東から)

水主神社東遺跡第 4 次



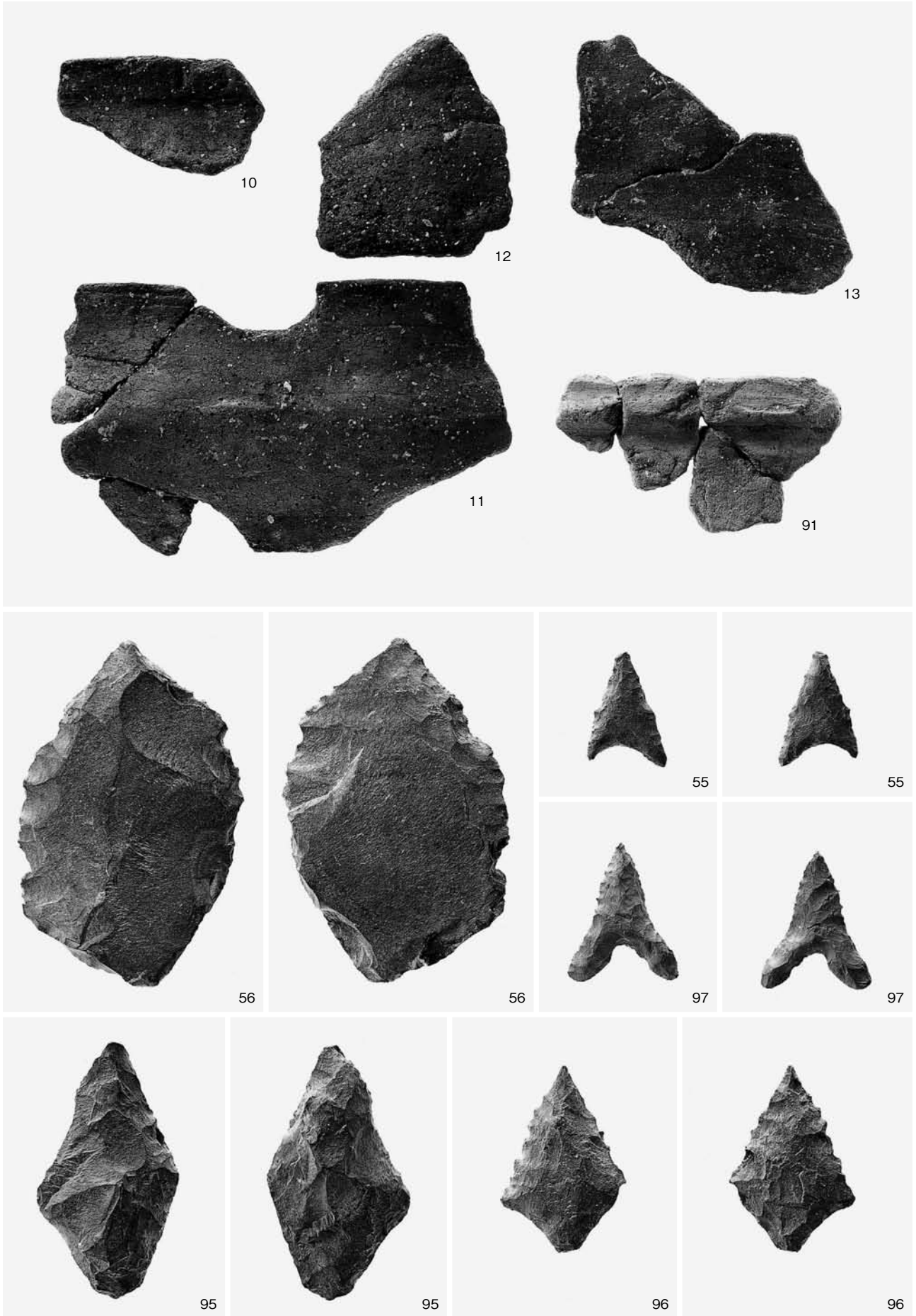
(1) D 地区溝 S D336断面(西から)



(2) D 地区溝 S D335断面(東から)



(3) D 地区東壁焼土検出状況
(¹⁴C分析、西から)



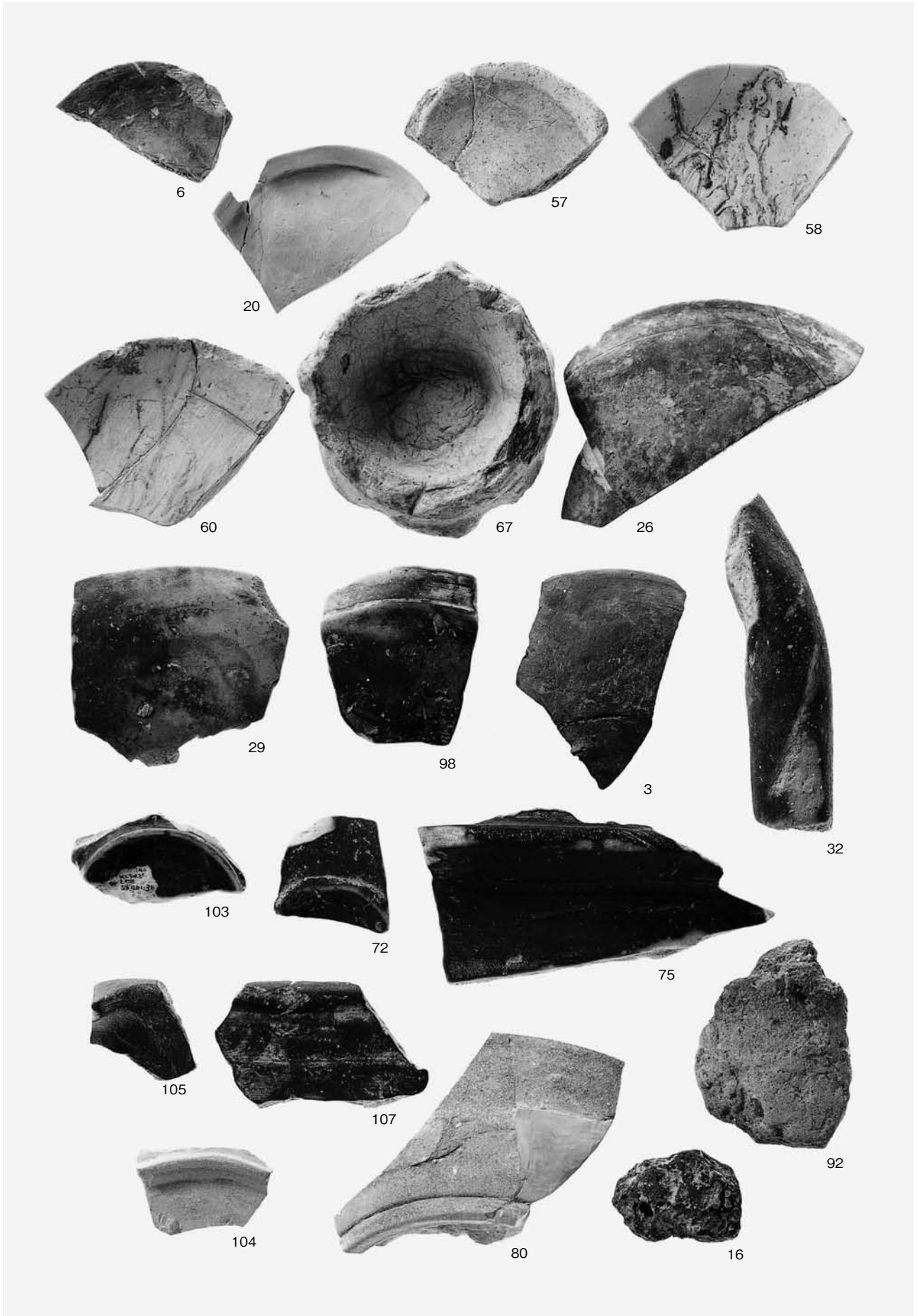
出土遺物(縄文土器・石器)

下水主遺跡・水主神社東遺跡



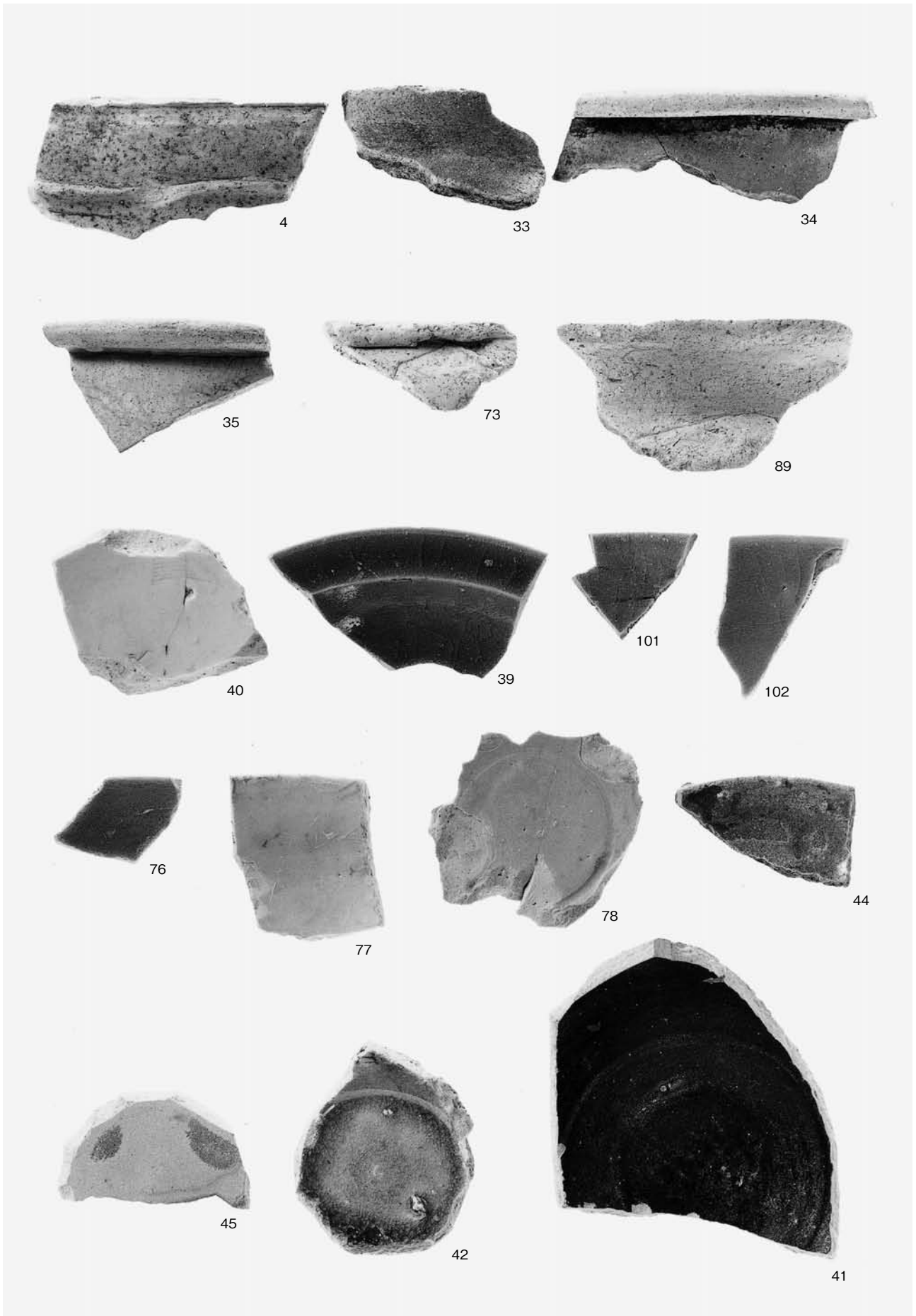
出土遺物(弥生土器・土師器・瓦)

下水主遺跡・水主神社東遺跡



出土遺物(土師器・須恵器・瓦器・鉄滓)

下水主遺跡・水主神社東遺跡



出土遺物(弥生土器・土師器・陶磁器)



(1) A北地区東側の現在の野菜栽培島畑(西から)



(2) A北地区北東側の現在のイチジク栽培島畑(南東から)



(3) B地区東側の現在のイチジク栽培島畑(北東から)



(1) C 地区東側の現在の野菜栽培
島畑(南から)



(2) C 地区東側の現在の島畑肩部の
養生(南東から)



(3) C 地区東側の現在の島畑肩部
崩落状況(北東から)

報告書抄録

ふりがな	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう
書名	京都府遺跡調査報告集
副書名	
巻次	第163冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第163冊
編著者名	増田孝彦・岡崎研一・黒坪一樹・引原茂治・岩松保・松尾史子
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番03 Tel. 075 (933) 3877
発行年月日	西暦2015年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもみずしいせき 下水主遺跡第 2・3次	きょうとふじょうよ うしてらだいまはし 京都府城陽市寺 田今橋	26207	88	34° 50' 55"	135° 45' 40"	20130924 ～ 20140308 20140426 ～ 20140903	5,560 500	道路建設
みぬしじんじゃひ がしいせき 水主神社東遺 跡第3・4次	きょうとふじょうよ うしてらだかなお 京都府城陽市寺 田金尾	26207	30	34° 50' 44"	135° 45' 53"	20130924 ～ 20140308 20140426 ～ 20140903	800 2,800	道路建設

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下水主遺跡第2・3次	集落跡 生産遺跡	中世	島畑・水田・溝・土坑・自然流路	縄文土器・弥生土器・土師器・瓦器・瓦質土器・陶磁器・漆器・木製品・石器・鉄釘・鉄滓	現在の島畑の景観が13世紀後半まで遡ることが明らかになった
水主神社東遺跡第3・4次	散布地		島畑・水田・溝・土坑・ピット・窪地・自然流路	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶磁器・瓦・石器・鞆羽口	

所収遺跡名	要 約
下水主遺跡第2・3次 水主神社東遺跡第3・4次	<p>現在の寺田・水主地区の水田区画には、条里型地割が明瞭に認められる。</p> <p>今回の調査では、13世紀後半に造成された島畑を検出し、その配置が現在の水田区画とほぼ合致することが明らかとなった。検出した島畑の上には近世までに3～5回程度の改修が認められるが、その際には島畑の上に土を盛るだけで、平面的な形は変えていなかったと考えられる。このことから、島畑が造成された時点の配置が、そのまま現在の水田区画に踏襲されているといえ、寺田・水主地区に見られる条里型地割が13世紀後半に遡ることが明らかになった。南山城地域の条里型地割の成立時期や水田・島畑といった土地利用のあり方を検討する上で重要な資料といえる。</p> <p>また、城陽市域の島畑では、江戸時代から明治時代にかけて綿などを栽培していたことが知られているが、島畑間の溝の土を分析した結果、それを裏付ける資料を得ることができた。中世段階の栽培作物については、今後の調査で明らかになることが期待される。</p>

京都府遺跡調査報告集 第163冊

平成27年3月31日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141